



神の母聖マリア (ルカ 2:16-21)

戸惑う出来事を突破して

神の母聖マリアの守るべき大祝日を迎えました。カトリック教会は、神の母聖マリアに、新年のスタートを大切にする日本と日本の教会をゆだねようとしているのかもしれませんが、2017年を、どのように過ごせばよいのか、マリアの模範を仰ぐことにしましょう。

皆さんあらためて、新年おめでとうございます。過ぎた年は皆さんにとっても、入れ替わりの年で戸惑うことも多かったかと思います。わたしも、これまで六年間住んでいた環境からがらりと変わり、戸惑いながら何ができるのかを探しつつ過ごしてきました。

一つお知らせしておきたいことがあります。わたしは年賀状を近くの人に出さないことにしています。小教区の皆さんから年賀状をいただくこともあります、こうして新年を皆さんと迎えますので、年賀状は省略させてもらっております。小学生とか保育園の園児の場合は、届いたのを見てから出すこともあります、それ以外は出しておりませんので、お許してください。

福音朗読に入りましょう。登場人物は大きく二手に分かれています。羊飼いたち、そしてマリアとヨセフは、幼子の誕生をとおして神の働きに思いを向けようとしています。これが一つのグループです。もう一つは、羊飼いたちがこの幼子について天使が話してくれたことを知らせましたが、羊飼いたちの話不思議に思うだけの人々です。

一方は、出来事を見て、その出来事の中で何が起きているのかを見極めようとしています。もう一方の人々は、出来事を見るには見ますが、出来事の表面、うわべだけに目を奪われている人々です。それはたとえば言えば、手品を見せられてどうしても仕掛けが見破れずに目を丸くしている人と、どうすれば気付かれずに実行できるのかをじっくり考えてトリックを見抜く人の違いでしょうか。

手品はわたしの専門分野ではありませんが、ふたをしっかりと閉めた瓶の上に五百円玉を置いて、その上に手をかざして五百円玉を瓶の中に落とすという手品があります。わたしはその程度の手品でしたら見破られずに実演して見せることができるかなと思っています。

ジャムなどを入れる瓶を空にして、あらかじめふたの内側に五百円を張り付けておいてふたをしっかりと閉め、それからふたの上に五百円を置き、手を勢いよく押し付けると、ふたの内側の五百円が落ちる。あとはふたの上に置いた五百円をさりげなく取り除けば、見た目には五百円が通過して瓶の中に落ちたように見えるわけです。

出来事の向こうにあるものを見抜くことができない人には、いつまでもその手品は有効だと思います。しかし必ず何かの仕掛けがあるに違いないと思って、日夜考え抜くなら、ある日その仕掛けを思い付くでしょう。羊飼いたちは、今まで何度も見たであろう赤ん坊の誕生に遭遇したのですが、マリアとヨセフに見守られている赤ん坊を見た時、本当

に起こっていること、つまり「見聞きしたことが天使の話したとおりだった」（2・20）この見逃せない点を見抜いて、神をあがめ、賛美しながら帰って行ったのです。喜びのしるしはこれこれの形で与えられる。それが家畜小屋の中であっても、天使の話した通りであれば、ここに神の救いの計画が実現したのだと羊飼いは理解できたのです。

すべての人が出来事の中で実現していることを理解できるわけではありません。羊飼いたちの話をも不思議に思った人たちがいました。彼らは出来事が天使の話したとおりであったと聞かされても信じることができなかったのでしょうか。羊飼いが信用できなかったのかもしれないし、救い主が飼い葉桶に寝かされているなど、信じられなかったかもしれません。いずれにしても、表面的なことに目を奪われて、与えられたしるしの中で実現している神の計画まで思い至らない人たちがいるのです。

それは現代でも同じことです。人類の救い主が、十字架にかかって亡くなるなど、とても考えられないことです。けれども実際には出来事は起こり、その中で神の計画が実現したのです。特にマリアはイエスの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしました。

誕生から、十字架上の死まで、出来事の表面だけに目を奪われるならどこで信頼を失っても不思議ではありませんでした。けれどもマリアは、戸惑う出来事をいつも突破して、神の計画が実現していくのを目の当たりにしたのです。出来事の表面に惑わされないマリアの姿は、すべての人の中で際立った特徴です。

ここに、わたしたちの模範があります。マリアは何度も、戸惑いを覚えるような出来事にぶつかり、そのたびに戸惑う出来事を突破して、本当に見なければならぬものを探し出して進みました。マリアが表面的な出来事を突破するとき基本にしていたのは、出来事の中に実現していく神の計画を、じっと思い巡らすということでした。

わたしたちも、今年一年難しい問題に直面することもあるかと思います。しかしあきらめたり投げ出したりするのではなく、そのたびに「神は今ここで何を実現させようとしておられるのだろうか」と思い巡らす。そうして本当に見なければならぬものを探し出し、前に進んでいきましょう。

わたしたちが前に進むときの判断基準は、マリアと同じく「神が望まれることは何か。神が喜ばれることは何か」です。答えはすぐには見つからないかもしれない。その時は立ち止まって、思い巡らしましょう。神が必ず指し示してくださる唯一の物差しで、2017年を歩みだすことにしましょう。



主の公現 (マタイ 2:1-12)

いつかは自分も「東方で見た星」になる

過越の神秘の祭儀に次いで教会がおこなってきた最古の祭儀は、主の降誕の記念と、主の初期の公現の追憶です。日本では主の公現の祭日は1月2日から8日の間の主日に祝われます。ついですが、主の洗礼の祝日は主の公現の祭日直後の主日に祝われますが、主の公現の祭日が1月7日か8日の場合はその翌日の月曜日に祝われます。今年はこの条件に当てはまっています。

さて、占星術の学者たちが「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」(2・2)と言ってヘロデにあいさつに来ました。ヘロデがどのようにしてユダヤを支配していたかを考えると、ひそかに幼子を訪ねてひそかに帰るほうがよいと考えたかもしれません。ですが事実はそうはならず、さまざまな危険を引き寄せた格好です。

占星術の学者たちの言葉はわたしが辿ってきたカトリック司祭としての歩みをもう一度振り返る機会を与えてくれました。一つの印象深い体験を話させてください。伝統的な司祭養成をしている長崎では、中学生から神学生の道を歩み始めます。わたしもその道を歩み始め、およそ1年が過ぎた2月5日、西坂という場所で日本 26 聖人の殉教記念ミサに参加しました。2月の寒空での野外ミサでした。それほど広くない公園に、2千人がひしめき合ってミサに参加していました。

ミサの説教が始まりました。少年だったわたしは、何という名前の司祭だったのか全く知りませんでした。冒頭次のように呼び掛けたのです。「あなたがたは何を見に、ここへ来たのか。しなやかな服を着た人か。殉教者か。そうです。みなさんは殉教者に会うために来たのです。」実はここしか覚えていないのですが、当時は「立派な説教をする司祭がいるなあ」と思って、そんな司祭になりたいとずっと思い描いていたのです。長い道のりがあって、わたしは司祭になりました。

司祭になって最初の赴任地は浦上教会でした。6千人以上の信徒を抱える教会でした。クリスマスのある夜、主任司祭と、助任司祭が集まって遅くまで祝っていき、それぞれ何かとおきの召命の話をしなさいということになりました。わたしは助任司祭の末っ子でしたので、最後に順番が回って来て、「西坂でのミサで、とても印象深い説教を聞き、まだ見ぬその司祭を追いかけてわたしは司祭になりました」と話したのです。

すると黙って聞いていた主任司祭が声を上げました。「その説教をしたのはわたしだ。よくぞ司祭になってくれた。」わたしは胸が熱くなりました。姿も知らず追いかけてきた司祭が、わたしにとって最初の主任司祭だった。本当に不思議な巡り合わせ、神の不思議な計らいに、心を打たれたのでした。

だれでも、主を信じ、主に従っていく決定的な契機となる出来事が

あると思います。占星術の学者たちにとっての「東方で見た星」です。わたしにとって、それは中学1年生の26聖人殉教記念ミサで聞いた説教、その説教をした司祭でした。その時からおよそ13年、ときにはその星の導きを見失いながらも、司祭召命の道を一步ずつ進めてきたのでした。そしていよいよ司祭になってみて、任命を受けた教会に赴任してみると、「東方で見た星」がそこでわたしを待っていてくれたのです。

信仰者はみな「東方で見た星」の導きを信じて旅をしているのだと思います。まだ見ぬ救い主を、いつかどこかできっと会えると信じて、旅をしているわけです。しかし星の存在を口にしたとき、さまざまな摩擦を生じるかもしれません。「あの人はクリスチャンなんだって。」何か偏見の目で見られることになるかもしれない。それでも、わたしたちはその星が指し示すお方に信頼して人生を歩いていきます。

そして、長い旅を続けていく中で、ある時「あなたが膝をかがめるべきお方はこのお方だ。さあ礼拝しなさい」そういう体験をするのではないのでしょうか。もう思い残すことはない。そんな喜びを手に入れば、「黄金、乳香、没薬」とも言えるわたしの人生のすべてをイエスにささげて、希望を持って旅をする、あるいは宣教の旅に出ることも可能なわけですね。

ただ、救い主を信じてから始まる人生は、多くの人の人生と比べると「別の道を通して自分たちの国へ帰って行く」旅になることでしょう。「イエスを信じて何になるのか。イエスをすべての判断の物差しにしてこの人生の荒波が乗り越えられようか。」そうした声にも怯まず、きっぱりと「わたしはヘロデを通して行かない。わたしは歩むべき道を授かったので、もはやこの道以外にない。」と言える人生でありたいと思います。

わたしにとっての「東方で見た星」は、数年前に引退され、一線から退いておられますが、今でもその先輩司祭はわたしの心の中にいて、「救い主を告げ知らせよ」と励ましてくださっています。いつかわたしも、誰かにとっての「東方で見た星」になり、その人が唯一の道・真理・命であるイエス・キリストをまっすぐに歩く姿を見たいものだと思います。



年間第 2 主日 (ヨハネ 1:29-34)

だからわたしも証しする

「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ。」(1・29) 洗礼者ヨハネは、目の前においでになったイエスを見て、自分はこの方がイスラエルに現れるために、呼び出され、使命を授かり、悔い改めの洗礼を授けているのだと証言しました。「わたしはこの方を知らなかった」と繰り返していますが、「世の罪を取り除く神の小羊」と確信するまでの洗礼者ヨハネの心の動きを探ってみましょう。

無事にイスラエル巡礼を終えてきました。17年前にも一度行ったのですが、覚えていない場所もありました。パレスチナ自治区の領土にあるベツレヘムにも行きました。降誕節にイスラエルを巡礼しましたので、文字通り「ベツレヘムの飼い葉桶に眠る幼子イエス」を拝みに行きました。文字通りって、すごくないですか？

何よりありがたかったのはご公現の祭日のミサをささげたことです。17年前のイスラエル聖地巡礼で、島本大司教様の引率のもと、長崎教区の青年と各地区代表の同行司祭とでイスラエル各地を巡礼し、いろんな教会でミサをしました。

今回ミサをささげたのは「ペトロの首位権の教会」と言われるところです。17年前、それぞれのミサの中での説教を「この教会ではあなたが説教してください」と割り振ってもらったのですが、わたしの記憶に間違いがなければ、中田神父が頼まれたのは山上の説教の教会での説教でした。できれば17年を経て、もう一度同じ教会でミサをささげ、説教したかったのですが、今回は叶いませんでした。ですが同じイスラエルの地でミサをもう一度ささげる。それだけでも幸運と言うべきでしょう。

わたしは、出来事は単なる偶然で起こるものではないと思います。再びイスラエルの地でミサをささげ、説教ができたのは単なる偶然ではなく、神さまの深い計らいだったと思っています。今回、カトリック司祭はわたしだけだったという巡り合わせが一つありました。

巡り合わせはほかにもありました。イスラエル巡礼のお誘いが降誕節中だったということです。当日1月8日はご公現の祭日で、占星術の学者たちが「東方で見た星」に導かれ、はるばる旅をして幼子イエスを拝みに来たことを祝う祭日です。わたしも、はるか東の国日本で目には見えない光に導かれて降誕節にイスラエルに赴き、救い主を礼拝することができた。そう考える時、決して偶然の重なりとは思えないのです。

福音に戻りましょう。ヨハネはヨルダン川で水を用いて悔い改めの洗礼を授けていましたが、彼には一つの確信があったと思います。それは、自分が神に呼ばれて、この使命を果たしているということです。単に立派な行いだからとか、生き方を突き詰めてみたいとか、そういうことで悔い改めの洗礼を授けているのではなく、「わたしは荒れ野で叫ぶ声である。『主の道をまっすぐにせよ』と。」(1・23 参照) そう呼びかけられたから、使命を果たしている。この確信があったのだと思いま

す。

更に何を語り、どのように悔い改めさせるのかも、呼びかけてくださった神に準備を整えてもらったのです。そのヨハネの活動は、決定的な場面を目撃して完成を迎えます。「しかし、水で洗礼を受けるためにわたしをお遣わしになった方が、『“霊”が降って、ある人にとどまるのを見たら、その人が、聖霊によって洗礼を受ける人である』とわたしに言われた。わたしはそれを見た。だから、この方こそ神の子であると証ししたのである。」(1・33-34)

ここでヨハネが体験したことは三つです。使命のために呼びかけられたこと。活動のために準備を整えてもらったこと。先駆者としての使命が成し遂げられたと悟る場面を目撃したことです。そして今週、この三つにわたしたちの生活を重ねて考えてみたいのです。

わたしはちょうど、先週この体験を積ませていただきました。人間的にはつまらない者でありながらも、司祭召命に呼ばれました。そして司祭として何にもまして大切なミサをささげる祭壇を、山上の説教の教会で二度も整えていただきました。

そして山上の説教の教会祭壇でミサをささげながら、イエス・キリストの身分においてささげることで、このイスラエルでも、世界中のどの教会でも、もちろん田平教会でも、同じいけにえがささげられ、同じ効力と恵が与えられると目撃して帰って来たのです。

皆さんお一人お一人にも、使命のために神は呼びかけ、準備を整えてくださり、使命が成し遂げられたことを悟らせてくださいます。ときには人間が思い描く形ではないかもしれませんが、けれども神が呼びかけ、準備を整えて、完成させる働きは誰にでも与えられ、体験させていただけると思っています。

先に、出来事は偶然の積み重ねではないと話しましたが、会うべき人に会わせてもらえとか、見たかった場面をととう見たとか、どれほど偶然を積み重ねても起こらないような出来事を、神はわたしたちを使って成し遂げてくださるのです。わたしたちが「このことは神の深い計らいだったのだ」と気付いたなら、ぜひそれは証ししてほしいと思います。

昨年一年、わたしが説教台から話したことは、ひとことで言うなら「福音に書かれていることは、わたしたちの今の生活の中に見つかります」ということでした。今年はみなさんと共に歩く二年目です。もう一歩踏み出して、「わたしたちの今の生活に見つかった福音を身近な人に証ししましょう」このように位置付けたいと思います。

証しする福音の種は、二千年前にあるのではなく、今のあなたの生活の中にあるのです。



年間第 3 主日 (マタイ 4:12-23)

イエスは一人ひとりを弟子として呼ばれた

年間第 3 主日、イエスがガリラヤで伝道を始める場面が朗読されました。イエスは「ナザレを離れ、ゼブルンとナフタリの地方にある湖畔の町カファルナウムに来て住まわれた」(4・13)とあります。せっかくイスラエル巡礼をしてきたのですから、カファルナウムで見たことを初めに紹介したいと思います。

カファルナウムでは、イエスがこの地を活動の拠点とされたことを記念して、教会が立てられていました。現代的な教会で、発掘によって見つかった古い住居のあとをそのまま残すために、高床式の建物のように教会を建てています。

さらに聖堂の中央部分はガラス張りになっていて、古代の住居跡が見えていました。イエスが活動の拠点にしたカファルナウムに残る遺跡から、イエスが住まわれた場所もこのようなものだったかなと思い巡らしながらしばらく祈ってきたのでした。

ついでですが、ここは 17 年前にも訪ねた場所でした。ところがほとんど記憶がなくて、この巡礼を企画してくれた旅行会社の野口さんから、「神父さま、本当に覚えてないのですか？困りますねえそんなことでは」と言われてしまいました。よくよく考えると、聖堂内に入ったような記憶はありますが、床がガラス張りで、当時の住居跡が確認できるようになっていたことは思い出せませんでした。

このカファルナウムは、ガリラヤ湖の北に位置しています。ガリラヤ湖は海拔マイナス 210m で、地中海などと比べるとはるかに低い場所なのです。そのため、「暗闇に住む民は大きな光を見、死の陰の地に住む者に光が射し込んだ」(4・16)と光が届かない地底に例えられるのも無理はありません。

そういう地理的条件にあるカファルナウムの町に、イエスは伝道の拠点を置きました。光は、光源から遠ざかるほど弱い光になります。「暗闇、死の影の地」と例えられたガリラヤの町々は、地の底でしたから光が届くころには弱い光になるはずなのです。

しかしマタイ福音記者は、イエスがカファルナウムに住まわれた様子を「光が届かないはずの場所に、光の方から近づいてこられた」と理解したのです。ガリラヤの人たちも同じだったでしょう。自分たちの住む場所に、光の方から近づいてこられるなど考えられないと思っていたはずです。そこへイエスはやって来てお住みになり、ガリラヤ周辺の人々の希望の光となってくださったのです。

このような背景を踏まえてイエスが宣べ伝えた言葉を考えると、当時のガリラヤの人々がどのように受けとめたかが分かってきます。見捨てられた町、光が差し込まない町と考えられていた町々に、光であるイエスが直接降りて来て、「悔い改めよ。天の国は近づいた」(4・17)と言われたのです。それはきっと、「わたしたちに特別に目をかけてくれ

る人が現れた。わたしたちを見捨てないお方が現れた」そう受けとめたのではないのでしょうか。イエスの呼びかけは、すんなり聞き入れられたと思います。

こうした伝道の中で、イエスはご自分の弟子をお呼びになりました。シモンとその兄弟アンデレの召命、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネの召命、それぞれ別々の場面ですが、呼ばれて弟子となる流れは驚くほど似ています。「イエスが彼らのところに行き→二人の兄弟をご覧になって→彼らに声をかけると→彼らは網や父親を残して→イエスに従った」。この流れです。

もっと言うと、召命とは「イエスに呼ばれること」です。生き方が180度変わるのは、それがイエスに呼ばれたからです。今までの生き方は自分のために生きる生き方でしたが、イエスが呼ばれたのはイエスにすべてを委ねるためにお呼びになります。湖の底の潜んでいる魚を引き上げる仕事から、光の届かない闇、死の影の谷に住む人に光を届け、かれらを引き上げるために呼ばれたのです。

実はわたしたちも、イエスに呼ばれて、呼びかけに答えた者です。司祭は「わたしとわたしの後継者に、尊敬と従順を約束しますか」と呼ばれて、「はい」と答えました。修道者も清貧・貞潔・従順の誓願によって神に呼ばれました。結婚した人たちも、「あなたは〇〇さんを夫としますか、妻としますか」と呼ばれて、「はい」と答えたのです。

だれもが、神のお住まいになるこの聖堂で、それぞれの生き方に入るために呼ばれたのです。堅信の秘跡を受けた時点でわたしたちは「神の賜物である聖霊のしるしを受けなさい」「アーメン」と答えて、キリストの兵士として、キリストを生き、証しするよう呼ばれているのです。

イエスに呼ばれたのですから、呼びかけに答えたわたしたちはすっかり変えられたはずです。「わたしはシモン・ペトロやアンデレではないから」とか「わたしはヤコブやヨハネとは違うから」と考えて、イエスの呼びかけを軽んじたりしていないのでしょうか。

わたしたちはこの聖堂で、あるいはほかの聖堂で、神がおられる場所から呼ばれ、「はい」と答えた者なのです。ぜひもう一度、自分が呼ばれた生活でイエスに自分を委ねて生きてきたらどうかと振り返ってみてください。「イエスよ、あなたの呼びかけにこうして答えてまいりました」と申し上げながらこの人生を完成させたいと思います。

もちろん答えられない場面もあるでしょう。それらはゆるしを願いながら、一つでも二つでも、「喜んでください。わたしはこんな形であなたに答えることができました」という報告をしながら日々を送りましょう。

子どもたちに特にお願いしたいことがあります。イエスさまはさらにまさった生き方を用意しています。もし、イエスさまのもっとそば近くでお手伝いしたいと感じたなら、主任神父さまやシスターにその気持ちを伝えてください。イエスさまのそば近くで働く子どもたちを、主任神父さまやシスターたちは心待ちにしています。



年間第 4 主日 (マタイ 5:1-12a)

山上の説教を生活のあちこちで響かせる

年間第 4 主日、今週選ばれた福音朗読箇所は「山上の説教」です。今耳を傾けたイエスの招きが、自分の生活にどうすれば当てはまるのか考えてみましょう。あわせて、わたしが出会う人に、この招きを語って聞かせることができるか、考えてみましょう。

今週の福音朗読に合わせて、山上の説教の教会の写真を掲載してみました。ここはガリラヤ湖畔の、少し高い丘の上にあります。以前ここを訪問した時、「あー、『心の貧しい人は幸い』とそれに続く八つの幸いが八角形の屋根にラテン語で書かれている。なるほどー」と頷いて帰りました。しかし今回二度目の訪問をしてみると、八角形の屋根に八つの幸いがラテン語で書かれているのは十分理解した上でこの場に訪れていますから、もっと何か吸収して帰りたいと思いつつ訪問の時を過ごしました。

結果的に、その場では新しい学びはありませんでした。がっかりしました。しかし田平に戻ってみて、説教を準備するためにもう一度思い出してみたとき、新しい気付きがありました。それは、「自分は小高い丘の上でこのみ言葉を味わい、そして持ち帰ってきた」ということです。前回はその場の雰囲気圧倒されて、その場に立てたことで満足して帰ってきました。ただその喜びや感動は、その場限りで、言ってみれば丘の上に置いてきたのでした。

ところが今回は、たしかに持ち帰って来たという実感があります。その場に立つことができない方々にも、山上の説教の教会でイエスが語りかけてくださった言葉は、あの丘の上だけで響いているのではない。この地上のあらゆる場所で響いてこそ、本当に意味ある幸いの言葉に生まれ変わる。そのためには持ち帰ったものをどう生かすかが大事だ。田平に帰ってもう一度考えてみて、そのような答えにたどり着きました。

以前気付かなかったことに改めて気付くことができるのは、たいてい一つの場所を二度三度訪ねてみて理解できるようになるのです。なかなか一度ですべてを理解できるものではありません。あえて違う場所から眺めてみたり、時間を置いて眺めてみたりしなければ、そこに込められた多くの思いを汲み尽くせるものではないと思うのです。

そういう意味でも、わたしは今回のイスラエル巡礼は大きな収穫があったと思っています。17年前、ほとんどすべての場所を「わあ、すごい」と感嘆して帰って来たのですが、その体験をほとんど持ち帰ることができませんでした。今回は、体験をある程度まで説明できるのです。本当にありがたいことだと思います。

み言葉に戻ってみましょう。「心の貧しい人々は、幸いである」この招きから「義のために迫害される人々は、幸いである」に続く八つの幸いは、互いに関連があります。そのあとの 11 節「わたしのためにものしられ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられる

とき、あなた方は幸いである」は、わたしはそれまでの八つの幸いをまとめ一言だと考えています。それについては最後に触れたいと思います。

そこで最初の八つの「幸いである」という招きですが、最初の四つ「心の貧しい人々」「悲しむ人々」「柔和な人々」「義に飢え渴く人々」は、迫害の中でじっと耐えている人々のことです。例えるなら畑の作物が雨に打たれたり強風にさらされたりして、じっと雨風をしのいでいる様子で、迫害にもへこたれず、神がきつと計らってくださると信じて日々を過ごす人たちです。

後半の四つ「憐れみ深い人々」「心の清い人々」「平和を実現する人々」「義のために迫害される人々」は、迫害の中にあっても正しいことのために行動する人々です。

魚の中には、自分が生まれた川に遡上して、卵を産み付ける種類があります。なぜそんなに自分が生まれた場所にこだわるのか分かりませんが、どんな困難をもはねのけて、子孫を残して息絶えます。迫害の中でも平和のために働き続ける人も、どんなに活動を妨げられても、否定されても、正しいことのために行動することをやめないのです。

こうした生き方が、11節以下でまとめて言われているのだと思います。「わたしのためにののしられ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである。喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。」(5・11-12)

山上の説教で説かれた生き方の招きは、わたしたちが生きるとき、本当に意味ある幸いの言葉になります。わたしたちが、カトリックの信仰のためにへこたれそうになる。雨に打たれたり、強風にさらされるような思いをするかもしれませんが、イエスはそんなわたしたちを必ず助け起こしてくださると信じ、一日ずつ積み上げていきたいものです。

迫害の中で行動を起こすとなると、さらに困難を感じるようになるでしょう。いのちを守るために、いのちを大切にしましょうと声を上げたり立ち上がったたりすること。学校の話し合いの中で、カトリック信者としてわたしはこう思うと意見を述べる。それらは相当風当たりが強いかもしれませんが、わたしたちが風当たりをものともせず立ち上がるなら、イエスはわたしたちに答えて報いを与えてくださいます。

わたしたちがイエスの示す幸いを生きようとするとき、山上の説教は山の上だけで響くのではなく、生活のただなかで響く福音となります。わたしたちはイエスの神秘体の一部として、生活のあちこちで、山上の説教を生きていきましょう。山上の説教に生きるわたしに報いてくださるのは、他の誰でもない、真の幸いを語ったイエス・キリストです。



年間第 5 主日 (マタイ 5:13-16)

わたしたちは今もともし火であるべき

「山の上にある町は、隠れることができない。」(5・14) 年間第 5 主日でイエスが思い描いたのはエルサレムの町かもしれません。エルサレムは標高 800m の小高い丘の上にあるので、イエスの考えていた町にうまく合致します。このエルサレムの町に、イエスは何を重ねて考えたのでしょうか。

掲示してある写真は「山の上にある町」として紹介されたエルサレムを訪ねた時のものです。オリーブの茂るゲッセマネの園がわから見た景色、エルサレム旧市街を囲む城壁、聖墳墓教会、かつてあったエルサレム神殿の模型などを並べてみました。あらためて、今回巡礼したイスラエルの訪問地の中で、ひときわ印象に残る場所でした。

ところで皆さんは田平教会を海の上から眺めたことがあるでしょうか。わたしは漁船で海に出て三度目に、ようやく海の上から田平教会を眺めることができました。それまでは釣りをすることで精いっぱいだったのですが、周りを見回しながら船を出した三度目の出航で、初めて海の上から田平教会の塔が丘の上に見えたのです。それはまさに「山の上にある教会」でした。

「あー、これだ」と思いました。「あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることができない。また、ともし火をともして升の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家の中のものすべてを照らすのである。そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。」(5・14-16)

田平教会が献堂されたとき、まだ山の木はそれほど高くなかったことでしょう。ですからなおさら、この平戸瀬戸を船で行き交う人々は、カトリック教会のすばらしさ、カトリック信者の働きやすさを身近に感じ、天の父をたたえていたのではないのでしょうか。

宣教師たちが教会を山の上に建てたり、港を見下ろす場所に建てました。それは、最も効果的な場所を選んでのことでした。見事な教会を眺めて、遠くから見る教会の明かりに導かれて、教会に足を運んだ人もいたに違いありません。そのような人の中から、天の父をあがめる人も現れるのだと思います。

「山の上にある町エルサレム」「山の上にある田平教会」と考えてみました。最終的に、「山の上にある町」とは何を指しているのでしょうか。「ともし火」は「家の中のものすべて」を照らし、「山の上にある町」は「隠れることのできないもの」「人々の前に輝くもの」「立派な行い」「天の父をあがめるきっかけ」となっていくます。すると、わたしこそ「ともし火」であり「山の上にある町」である、と言うのはちょっと言いづらいかもしれません。

このあたりで勘のいい人は気付いていることでしょう。最終的に「と

もし火」「山の上にある町」とは、イエス・キリストのことではないでしょうか。わたしたちが燭台の上に置き、山の上にある町として大切にすべきものは、イエス・キリストなのです。

今年、2月5日が日曜日と重まりました。2月5日は日本 26 聖人殉教者の祝日です。この田平教会が日本 26 聖人にささげられた教会ですので、この教会の祝日と言ってもよいと思います。26 人の殉教者は、西坂の丘の上で殉教したのだと思います。すると、彼らの殉教は「山の上にある町」のように、隠れることができない明白な出来事だったわけです。

一説によると、大浦天主堂は、26 聖人の殉教の丘の方角に向けられて建設されたとも言われます。大浦天主堂もまた、「山の上にある町」のように、隠れることができない明白な信仰のシンボルとなっています。26 聖人は、いのちをささげて、自分たちに注がれたイエスのともし火、イエスの光を人々の前に輝かせたのです。

26 聖人は、西坂の丘の上で、迫害に正面から向き合って「地の塩」「世の光」「山の上にある町」となりました。わたしたちはどうでしょうか。わたしたちもこの山の上にある田平教会に集まっています。山の上で山上の説教を聞いています。山の上で秘跡の恵みを受けています。そして派遣されて、山を降りて生活の場に戻っていくのです。この集いの中で、何かを持ち帰るべきではないでしょうか。わたしたちの家のもののすべてを照らす「ともし火」を、持ち帰る必要があるのではないのでしょうか。

この田平教会には、26 聖人を目指して 22 人も司祭を送り出した信仰があります。修道者はその何倍もです。何かこの教会になれば、22 人もの司祭や数多くの修道者を送り出せるはずがありません。ひとつまみで味を決めてくれる塩、家の中のものすべてを照らすともし火、山の上にある町の輝き、何かがここにあるはずです。

もしわたしたちが、山の上にあるこの田平教会から、毎週何かをつかんで持ち帰るなら、わたしたちの家庭、わたしたちが出会う人、わたしたちが暮らす社会は、わたしたちを通してイエス・キリストを知り、天の父をあがめるようになるでしょう。

この神の家に集うたびに、何かをつかみ、持ち帰る。その習慣を身に付けましょう。毎回はつかめないかもしれませんが。しかし何かをつかもうと耳を積まし、目を見開いてこのミサにあずかる人が増えるなら、田平教会はこの 21 世紀にあっても地の塩世の光、山の上にある町なのだと思います。



年間第 6 主日 (マタイ 5:17-37)

廃止するためではなく、完成するために

年間第 6 主日の福音朗読は律法に目を向けさせる招きです。「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思っ**て**はならない。廃止するためではなく、完成するためである。」(5・17) しかし律法に固執したり、しがみついたりしなさいと言っているわけではありません。イエスが本当に言おうとしていることを汲み取る努力をしましょう。

そこでイエスが言われる「廃止する」「完成する」について考える材料を提供しましょう。現代の医学は急速に進歩し、臓器移植をするにも誰かに直接臓器を提供してもらうのではなく、細胞を培養して臓器を作り、移植するという道にさえ可能性が開けてきました。

ただそれでも、細胞という最小の単位はあるわけで、細胞を砕いてしまえばもうそれは使い物になりません。ここまで細かくすることには意味があるけれども、これ以上細かくしたり砕いたりすれば意味を失う。そういう線引きが最先端の医療にもあるわけです。

イエスが言われた「廃止する」という言葉の意味合いも、このようなものです。律法や預言者、つまり聖書が教える神の掟と命令を、律法学者やファリサイ派の人々は細かく分けて考えることで詳しく知ろうとしたわけですが、あまりにも細かく分けて、砕いてしまうと、神が示した律法と命令は意味を失ってしまうのです。

イエスが語った「廃止する」という言葉は、「ばらばらにする」とか「ずたずたにする」という意味があるそうです。律法学者やファリサイ派の人々は、掟を細分化しすぎて、ばらばらに、ずたずたにしてしまった。イエスはそのようことをしに来たのではなく、律法が血の通った掟、神の思いを適切に表す掟に再びよみがえらせるためにおいでになり、語られたのです。

ついこの前堅信組の試験をしました。祈りの暗唱の部と、学びを試す筆記試験を行いました。祈りが 5 問で 50 点、筆記試験が 150 点、合計して 160 点で合格としています。合格しなくても補習をして受けさせますが、やはり堅信の秘跡を受ける人に、使徒信条くらいは覚えていてほしいと思います。

そこで祈りの暗唱の部で使徒信条や、天主の十戒などを尋ねました。一字一句覚えているかどうかを聞きたいのではありません。多少間違えて暗記したかもしれない、たどたどしいかもしれない。けれども、唱えている使徒信条が血の通ったものかどうかは、試験官が聞いていれば分かるわけです。

特に使徒信条については、全員が血の通った使徒信条を唱えられる状態で、堅信の秘跡を受けてもらいたいなあと心から願っています。使徒信条を暗唱できないなら、何を信じて堅信の秘跡を受けているかわかりません。自分が信じている父と子と聖霊の神を人の前で表明できてこそ、堅信の秘跡を受ける一人前の信者のはずです。そこは譲れません。

今週の選ばれた福音朗読の中で、イエスが律法について、殺人について、姦淫について、離縁について、誓いについて語っています。これらはイエスが宣言した「廃止するためではなく、完成するためである」に基づいて考えるとよくわかります。

律法学者やファリサイ派の人々は事細かに場面を分けて、この場合はこうである、あの場合はこうであると解釈していたのですが、これまでの行き過ぎた細分化はむしろ律法を破壊していたのです。だからもう一度イエスはこれらのずたずたに引き裂かれた律法を血の通ったものによみがえらせてくださったのです。

わたしたちも、ともすると教会にしっかりつながっている根拠を、教会の教えを事細かに説明できる、そういうことに求めているかもしれません。しかし、イエスが期待しているのは血の通った信仰です。別の箇所に書かれている神殿で祈る二人の人の姿です。

律法を隅から隅まで熟知し、週に二度断食し、全収入の十分の一をささげていると祈るファリサイ派の人。かたや目を天に上げもせず、胸を打ちながら、「神よ、罪人のわたしを憐れんでください」と祈る徴税人。血の通った信仰は、徴税人にあったわけです。「言っておくが、あなたがたの義が律法学者やファリサイ派の人々の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の国に入ることができない。」（5・20）

行いだけを見れば、ファリサイ派の人々の義にまさるわざはおそらく誰にもできません。けれども血の通った祈りを唱えること、血の通った悔い改めを示すことは、わたしたちの誰にでも可能なのです。

わたしたちの日頃の信仰生活は、血の通ったものになっているでしょうか。わたし自身を振り返ると、日曜日の説教案を準備する中で、「あーやっと書けた」こういう思いは「ファリサイ派の人々の義にまさらない」かもしれません。説教を書き上げたことには違いありませんが、「これで今週の福音朗読の何かが伝わりますように」そういう思いがなければ、血の通ったものとは言えないと思うのです。

もう一度、堅信の秘跡を受ける中学生に呼びかけたいです。使徒信条を、血の通った唱え方のできる人になってください。カトリックの信仰などさらさら持っていない同級生でも、「天地の創造主、全能の父である神を信じます」とオウム返しに言うことは可能なのです。

けれども堅信の秘跡を受ける皆さんの使徒信条は違うはずです。十分とは言えなくても、信じている。信じた上で、たとえたどたどしくても唱えている。そこがいいのです。そこに意味があるのです。

信仰の一つひとつのわざを、血の通ったものにしましょう。「廃止するためではなく、完成するために来た」イエスにわたしたちが従っている証しは、わたしたちの信仰に血が通っているかどうかにかかっています。



年間第 7 主日 (マタイ 5:38-48)

聖霊の七つの賜物が一步踏み出させる

今週、すなわち年間第 7 主日 A 年に与えられた福音朗読は、堅信の秘跡を今まさに受けようとしている子供たちに向けて考えるとよいのではないかと思います。一緒に学びを得て、直前の準備に充てることにしましょう。

それにしても、堅信組のテストの結果は意外でした。楽々と合格点をクリアできると思っていたのですが、5 人の受堅者のうち 1 人しか、合格点の 160 点を超えてなかったのです。1 人合格したと言っても 160 点ちょうどでした。

もちろん補修の課題を与えまして、紐差教会での最終チェックに答えることができないと分かれば、躊躇せず席を外れてもらいますと伝えております。2 ヶ月の猶予を与えて試験問題と解答を両方配っているわけですから、わたしの要求はそんなに厳しいとは思っていません。皆さんはどうお考えでしょうか。

中には、同情してあげたいなあと思うような回答もありました。「叙階の秘跡」についての問題で、「司教は、自分の協力者としてふさわしい（男性の信徒）を司祭に叙階します。」という問題がありまして、「男性の信徒」という部分が空欄となっていますから、すでに配った解答の通りに「自分の協力者としてふさわしい（男性の信徒）を司祭に叙階します」と答えればよいわけです。ところが 5 人のうち 2 人が、「自分の協力者としてふさわしい（助祭）を司祭に叙階します」と答えていたのです。

まあ、間違いとは言えませんが、女性の信徒ではなく男性の信徒ですよ、ということを問うている問題なのです。解答に（男性の信徒）と書いてあるのを（助祭）となぜ書いたのか、田平教会ならではの事情があったのか、頭を抱えてしまいました。けっきょく（助祭）と書いた子には、半分だけ点数をあげました。

福音朗読に入りましょう。「復讐してはならない」という勧めと「敵を愛しなさい」という勧めが語られています。イエスはどちらについても「これまでの言い伝え以上の実践」を求めています。なぜなら、先週の福音朗読で考えたように、イエスは律法を「廃止するためではなく、完成するために来た」からです。

イエスは律法を通して神が本来求めていることを明らかにしました。当時の宗教指導者も一般のユダヤ人も、律法に書かれてあることは理解しましたし実行しようとしたのですが、律法を通して神が期待していることが分かるためにはイエス・キリストの照らしが必要だったわけです。

イエスが律法の精神を明らかにし、律法を完成させてくださいました。神は律法を、そこから一步も離れず、右にも左にもそれなければよいと思って与えたものではありませんでした。律法は人がより自由に、活発に神を賛美し、神の喜ぶ生活をするように促している。そのことをイ

エスが明らかにされたのです。

堅信の秘跡を受ける中学生も同じことを考えるべきです。祈りの試験の中で天主の十戒を暗記しました。たとえば「第七なんじ盗むなかれ」と、すらすら言えたと思います。「盗んではいけない」と命じられたのだから、物を隠したりしてイジメても掟に反しないと、悪意を持って受け取ってははいけません。イエスはそのために、「これまでの言い伝え以上の実践」を求めているのです。

友達が必要な時に物が見つからなかった。もし原因を作ったのがあなたであるなら、あなたは「第七なんじ盗むなかれ」という掟が求めている神の望みに反しているのです。言い伝え以上の実践を、イエスはお手本をもって示し、わたしたちにも同じようにしなさいと招いているのです。

わたしは、天主の十戒に文字通り書かれているそれ以上の実践をできるでしょうか。だれかが知り合いが友達のことを隠してイジメている。もしそのことに気づいても、関わらないなら「盗むなかれ」という掟には反していないでしょう。何もしなくても、掟から外れていないかもしれません。

けれどもイエスは、「掟を通して神が本来求めているのは、困っている友達を助けることではないのか？」と問いかけているのです。「君の持ち物は、どこに隠されているんだよ」と教えてあげることを、イエスは期待していると思います。掟から一步も外れないことに満足するのではなく、掟から一步踏み出してよいことを実践するように、求めているのです。言い伝えられている以上の実践に向かう人が、本当のイエスの弟子だと思います。

では本当に、自分の努力で実行できるでしょうか。自分にはそれだけの勇気が持てないかもしれません。そのための力はどうやって手に入れるのでしょうか。それこそ、堅信の秘跡があなたがたを強めてくれるのです。聖霊の七つの賜物、「知恵・理解・判断・勇気・神を知る恵み・神を愛する恵み・神を敬う心」これらの賜物が注がれて、掟に書かれている以上の実践ができるように強め、励ましてください。

堅信の恵みは、洗礼のときにいただいた「人を神の子とするいのち」を成長させ、「信仰の証しを立てる力」を与えます。洗礼を受けて天主の十戒や教会の五つの掟の中で過ごしてきました。堅信の秘跡を受けた時から、これまでの掟に守られた中にとどまるだけではなく、一步踏み出して、掟を超える実践、掟以上の実践を果たす力が与えられるのです。

堅信の秘跡が与えてくれる聖霊の七つの賜物に信頼してこれからの学校生活、社会生活に踏み出しましょう。堅信を受けたなら、教会の中では下級生のお手本として、積極的に声を出して祈り、聖歌を歌いましょう。イエスが期待するカトリック信者になれるように一步踏み出す。神はあなたの決意を、聖霊の七つの賜物によって支え、実践へと導いてくれます。



年間第 8 主日 (マタイ 6:24-34)

神をすぐそこに感じて生きる

降誕節から四旬節までをつなぐ年間の主日も、年間第 8 主日で終わります。今週の水曜日は四旬節の開始となる「灰の水曜日」です。イエスは「思い悩むな」(6・25)と呼びかけていますから、心の整理を付ける何かをつかんで持ち帰ることにしましょう。

さて、来週初聖体を迎えるお子さんがわたしたちの教会にもいます。わたしにとって初聖体の思い出は白いタイツを履いたことくらいしかありませんが、わたしたち田平教会の家族の中で初聖体を受けるお子さんには、ご聖体を授かった思い出を残してあげたいと思います。

小さい子を前にしていつも心を痛めるのは、ミサの説教が難しいということです。子供たちからは「何を言ってるんだろう？」といつも思われていることでしょう。初聖体のお子さんはなおのこと、「早く終わらないかなあ」くらいにしか思われていないはずです。

もしよかったら、「今日、神父さんはこんな話をしていた。聞き取れたか？」と、教会からの帰り道でご両親がもう一度説教を話題にしてくれたらありがたいです。わたしもできるだけ、帰り道でも思い出せるような話を用意しようと思います。

初聖体のお子さんには、来週二つのことを試験しようと思っています。どの教会でも同じことを試験しているので、共通一次試験のようなものです。将来堅信組になった時、二次試験をしますが、一次試験に通らなければ二次試験もないのですから、来週しっかり問いかけに答えてほしいなあと思います。試験の内容は、今週のお話からです。

今週イエスさまは、当たり前のように見ているものをたとえにしながら、大切なことを教えようとしています。当たり前のように見ているものから、「思い悩むな」と教えるのです。一つは「空の鳥をよく見なさい」(6・26)と言います。

空の鳥を養ってくださる神さまは、なおさら、わたしたち人間を養ってくださいますと教えます。もう一つは、「野の花がどのように育つのか、注意して見なさい」(6・28)と言います。野の花を美しく装ってくださる神さまは、なおさら、わたしたち人間の必要にも答えてくださるのですよと教えます。

当たり前のように見ているものが二つ出てきました。「空の鳥」と「野の花」です。実はこの二つでイエスさまは、世界のすべてを表しているのです。空と大地、そこにあるものを示したのですから、空と大地のすべてを、たった二つのたとえで言い表しているのです。何とイエスさまは頭がよいのでしょう。そのイエスさまが「思い悩むな」と言っておられるのです。思い悩む必要なんてどこにもありません。

それなのに人間は、毎日毎日悩んでいます。お母さんは献立で悩んでいるかもしれません。「あー、今日のご飯は何にしよう。昨日と違うものを考えて、家族が健康に過ごせるようにしたいなあ。」そんな悩み

があるかもしれません。

お父さんも悩みがあるかもしれません。「子供たちが将来大きくなった時に困らないように、いろんなことを教えたり話してあげたいなあ。どうすればお父さんの気持ちが伝わるだろうか。」そんなことを思っているかもしれません。

おうちの人が子供のためにいろいろ思い悩んでいます。ひょっとしたら、気持ちはたくさんあるのに、それをうまく伝えられなくて、うまく説明できなくて、悩んでいるかもしれません。

おうちの人がそんなに悩んでいるのなら、まして神さまはすべての人に、もっと思いが溢れていると思います。みんなが食べて満たされるために、どんな食べ物をあげようか。天と地のすべてに心を配っているわたしは、人間にはもっと心を配っているよと、どうやって伝えたらよいだろうか。「思い悩むな」と、どうやって伝えたらよいだろうか。おうちの人以上に、神さまはいつも気にかけていると思います。

そこで神さまは、答えを見つけました。わたしは、御子イエス・キリストを人間の食べ物として与えよう。御子イエスが人として生まれてからお亡くなりになるまでのすべての時間を、人間を初めから終わりまで守り導くしるしとして与えよう。神さまが出した最高の答え、それがイエスさまをわたしたちの食べ物として与えること、救いの切り札としてわたしたちに与えることだったのです。

神さまはわたしたち人間を必ず養う。そのためにイエスさまがパンとぶどう酒の形のもとにとどまることをお望みになりました。一つめの質問はこうです。「パンの形のもとにとどまっておられる方はどなたですか。」「パンの形のもとにとどまっておられるのはイエスさまです。」わたしたち人間を必ず養う。わたしたち人間をいつも養うために、イエスさまはパンの形のもとにとどまっておられるのです。

二つ目の質問はこうです。子供たちはおうちの人とお話をしながら育っていきます。親子の会話は、両親が子供をいつも見守り、導いてくれることのしるしです。では、「わたしたちが父である神さまとお話しをするために、イエスさまが与えてくださったものは何でしょうか。」「わたしたちが父である神さまとお話しをするために与えていただいたのは『主の祈り』です。」

主の祈りを覚えて、お祈りすると、神さまはわたしたちに答えて導いてくださいます。幼い時だけでなく、学生が試験を受けるときも、大学や就職を目指すときにも、大人になって何か決めなければならないときも、主の祈りを唱える人に神さまは答えてくださり、導きを与えてくださいます。天と地のすべてに心を配る神さまは、なおさらわたしたち人間、それも神様に祈る人に、心を砕いてくださるのです。

初聖体は、「思い悩むな」と励ますイエスさまからの最高の贈り物です。ご聖体を与えてくださる神さまがわたしたちの神さまです。思い悩むことをやめて、信頼を取り戻しましょう。すべてにまして配慮してくださる神さまの答えを、来週の日曜日、いただきましょう。



四旬節第 1 主日 (マタイ 4:1-11)

わたしたちは「ただ一つの道」を歩む

四旬節に入りました。最後の晚餐、ご受難、ご復活に向かって、節制と償い、愛のわざにいそしみながら日々を過ごしてまいりましょう。四旬節第 1 主日にあたり、イエスは悪魔の誘惑を退け、「ただ一つの道」を示し、御みずから先頭に立ってその道を歩みます。そして今日、わたしたちは一人のお子さんの初聖体を見届けます。「イエスさまに養われて生きていきます。」今この子も初聖体を通して「ただ一つの道」を選ぼうとしています。

ところで灰の水曜日、皆さんきっちり大齋小齋の断食の務めを果たしたでしょうか。わたしは 50 歳なので大齋の務めを果たしましたが、ある人を唆して釣りに連れて行ってもらいました。結論から言うと、灰の水曜日には釣りに行くべきではない、ということです。

釣りに行こうよとそそのかした人は、ちょいちょい釣りに出ても「鯛が釣れましたよ。神父様焦るでしょ」と言って来る人です。まあそれだけ言う人ですから、何かしら釣れる場所に連れて行ってくれるだろうと思って頼み込んだのです。

まあ見事に、釣れませんでした。「坊主」でした。一匹だけアラカブを釣れましたが、それはわたしではなく、相方の「坊主が上手に」釣った虎の子の一匹でした。2 時間以上いましたが、音も沙汰ありませんでした。実績のある人をもってしても、結果を出せなかったのです。

理由はいろいろあるかもしれませんが。水温が低い、魚の活性が低い、今は時期的にいちばん悪い、などいろいろ説明はあるでしょう。しかしわたしは、そういうことではないと思っています。理由はたった一つ、「灰の水曜日だったから」これ以外考えられません。

確かに、魚の活性が低かったかもしれない。けれどもこの日まで、食べ物にありつけずに困っていた魚が何匹かはいたはずです。時期的にいちばん悪いと言っても、もうそろそろ食べないと自分が死んでしまう。そういう魚もいたに違いありません。それでも、そういう魚でさえ、わたしたちの仕掛けに食いつかなかった。これはつまり、魚も大齋小齋の務めでやむなく食いつけなかったのではないのでしょうか。

思わず仕掛けにとびかかろうとして「あ、今日は灰の水曜日だった！」そう考えて思いとどまった。もっと切羽詰まっていた襲いかかろうとした魚さえ、周りの魚から「おい、今日は大齋小齋ぞ。思いとどまれ！」そう言われて泣く泣く思いとどまった。そう考えると、すべてに説明がつけます。今後二度と、灰の水曜日に釣りにには行きません。

福音朗読に戻りましょう。イエスは荒れ野で四十日間の断食の後、悪魔の誘惑と向き合い、悪魔を退けました。この悪魔の誘惑は、さまざまに説明が可能です。人間が限界に達したとき逆らうことのできない誘惑、食欲と、名誉欲と、権力欲なのだと説明することもできるでしょう。

わたしは、本来イエスにとって何が誘惑なのかを考えることが必要

だと思います。イエスにとってたった一つの誘惑、それは「父なる神との絆を横に置くこと」これに尽きると思います。イエスが四十日間の断食で歩んだのは父なる神との一致の道です。これをいよいよになって断ち切らせようとしたのが悪魔のさまざまな誘惑だったのです。

イエスはどのような誘惑にも惑わされませんでした。父なる神との一致の道、それは御父と聖霊が両端を握っている綱渡りの綱のようです。この綱を危うくするいかなる誘惑も、イエスはきっぱりと退けたのでした。それはご自分のためと言うよりも、あとを歩むわたしたちのためでした。イエスが先頭に立って歩む「ただ一つの道」を、わたしたちも歩むのです。

わたしたちキリスト者はどんな時も、「ただ一つの道」を歩む者です。「うわべだけ誘惑を受け入れたふりをして歩む」そのような道はわたしたちに与えられてはいません。たとえ日曜日にミサにあずかることができなかったとしても、「ただ一つの道」を歩もうと悩んだ挙句に、悩んで出した結論が、「今日はどうしてもミサに参加できない。」もしそうであるなら、わたしはその人は「ただ一つの道」を歩もうとした結果なのだと思います。

映画「沈黙」を、ご覧になった方もいるでしょう。転んでしまった人、転ばなかった人、いのちをささげた人、踏み絵を踏んで生きながらえた人。いろいろいましたが、きっとどの人も、「ただ一つの道」を歩もうと真剣に考えながら、答えを出し続けたのだと思います。わたしも映画を観ましたが、最後は「わたしはイエスに従うというただ一つの道を歩みます。」この答えに狂いがなければ、結果はいろいろありうると思いました。

さて、説教台を降りて、初聖体を今まさに受けようとしているお子さんのもとに行きましょう。先週予告しておいた二つの質問で、「イエスさまに養われて生きていきます」という「ただ一つの道」を確認してから、その後の初聖体式の流れに移りたいと思います。

ふるさと君。「ご聖体のうちにおられる方はどなたですか？」そうですね。「ご聖体のうちにおられる方はイエスさまです。」ではもう一つ。ふるさと君。「父である神さまとお話しするために、イエスさまが与えてくださったものは何ですか。」

その通りです。「父である神さまとお話しするために、イエスさまが与えてくださったものは『主の祈り』です。」あとで、お父さんお母さん、お兄さんたちと教会のみんなと一緒に、唱えることにしましょう。



四旬節第2主日 (マタイ 17:1-9)

イエスが連れてきた場所にいつもとどまる

四旬節第2主日は主の変容を朗読に取り上げて、わたしたちを「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け」(17・5)と招きます。イエスの声に聞き従うとはどういう生き方を指すのか、考えてみましょう。

3月12日、51歳の誕生日を迎えました。日本人男性の平均寿命は、2015年の統計によると80.79歳だそうです。普通に考えるとあと30年生きられれば良しとしなければなりません。そうすると、これからの30年で何をすべきかを決めておかなければならないと思いました。

何か具体的なことを決めるのではありません。個人的には今年韓国語を勉強しようと考えていますが、あれをする、これをするということよりも、むしろ何をしているときでも「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け」この声に聞き従っている人生でありたい。要するにイエスのあとをついて行く人生でありたいと思いました。

生まれた時の様子を母親から教えてもらったことがあります。わたしは仮死状態で生まれたために、すぐは鳴き声を上げなかったそうです。自宅から100mも離れていないところに産婆さんがいて、この方に取り上げてもらいました。第一声を上げるまで、母は生きた心地がしなかったそうです。産婆さんが処置をして、ようやく鳴き声を上げました。

それからもう51年も経ちました。あと5日経つと、今度は叙階記念日です。3月17日の叙階記念日で、とうとう25周年、銀祝を迎えることになります。小学生で警察に補導までされた過去を含め、わたしは本当は「家を建てる者の捨てた石」(マタイ 21・42)だったのに、神さまは今日まで辛抱強く使ってくださいました。感謝に絶えません。先に話した通り、どのように決断し、行動すべきか、残る30年はイエス・キリストに耳を傾けて、決断し行動する人生を送りたいと思うのです。

福音朗読に移りましょう。ペトロは高い山でイエスの輝く姿、モーセとエリヤが現れ、イエスと語り合う姿を見て、「主よ、わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです」(17・4)と感嘆しました。

この場面、わたしたちは大切なことを見落として、興奮気味に語るペトロの言葉を聞いているかもしれません。それは、「イエスは、ペトロ、それにヤコブとその兄弟ヨハネだけを連れて、高い山に登られた」(17・1)ということです。誰がこの場所に導いてくれたのか。それはイエスだったのです。イエスが目的をもって弟子たちを山に連れて行き、あの光景をお見せになったということです。

そこを見落とさずに考えると、今度は「一同が山を下りるとき、イエスは、『人の子が死者の中から復活するまで、今見たことをだれにも話してはならない』と弟子たちに命じられた。」(17・9)ここもイエスが導いて山を下りているのだと分かります。目的があるのです。

何が言いたいか。弟子たちはイエスが導いたので高い山に連れてこ

られ、あの荘厳な場面を見た。そうであれば、これから山を下りて弟子たちが直面しなければならない主のご受難とご死去、これらもイエスが導いて体験させる出来事である、ということです。人間が体験する輝かしい場面も闇の場面も、イエスがそこに導いて、イエスが体験させてくれている。そういうことなのです。

ペトロをはじめ弟子たちは、高い山での栄光ある場面に感嘆するのですが、苦しめられ、死んで、復活することになっていると打ち明けられると、手の裏を返したように否定します。弟子たちはイエスに導かれ、連れてこられてすべての体験をしているのに、輝かしい場面は受け入れ、惨めな場面になると避ける。どちらもイエスは「わたしが弟子たちを呼び出して、指し示している道だ」と教えているのです。

同じことはわたしたちにも当てはまります。わたしたちは神に呼び出され、導かれてある時ある場所に置かれている。すべて神の導きの中で起こる出来事です。それなのに、自分にとって喜ばしいものは受け入れるけれども、辛く苦しく感じるとそれを途端に拒むのです。これはいけません。イエスが高い山に連れて行ってくだされば栄光を見るし、深い淵に下りて行くことになれば、試練を受けるのは当然です。

人はみな、神に呼ばれてこの世に生を受けています。神に呼ばれて、今日を迎えました。山の上でも、地の底でも、神が導いてお与えになるものは受けるべきです。もちろん、甘んじて受けるためには勇気が必要です。信頼が必要です。拠り所をどこに求めればよいのでしょうか。

わたしたちが拠り所とするのは次のみ言葉だと思います。「イエスは近づき、彼らに手を触れて言われた。『起きなさい。恐れることはない。』」（17・7）イエスのほうからわたしたちに近づいて、触れてくださる。実はイエスが弟子たちに近付く場面は、復活の場面にもあります。

「イエスは、近寄って来て言われた。『わたしは天と地の一切の権能を授かっている。』」（マタイ 28・18）いざ宣教に出かけてみると、だれも耳を貸さないとか冷たくあしらわれるとか、カトリック信者と表明しただけで「なんだ宗教の押し売りか」と相手にしてもらえない。いろんな惨めな思いが考えられます。けれどもイエスはいつも、どんなときも、わたしに近づいて力づけてくださるのです。

輝かしい場面も、惨めで避けて通りたい場面も、勇気を持って受け取る。そのためにイエスは近づいてくださるのです。イエスが導いてくださった場所で出来事は起こっているから、どんなことがあってもイエスはすぐに近づいて、触れてくださったり声をかけてくださるのです。

「イエスがわたしをここに導いて立たせてくださった。」そう信じて日々を送りましょう。わたしたちの態度がぶれないなら、人々は神の声に耳を傾けて生きるわたしたちの姿に魅了されることでしょう。



四旬節第3主日 (ヨハネ 4:5-42)

わたしに飲み方をください

今週の福音朗読はサマリアの婦人との対話です。イエスが言われた「水を飲ませてください」という呼びかけに注目して今週の糧を得ることにしましょう。

わたしの父の話を少しさせてください。わたしの小学生時代、父はまだ遠洋漁業の船に乗っていました。後にわたしが神学校に入学し、父は船を降りて農協の勧めで牛を飼い始めるのですが、当時はまだ船に乗って月夜間の3日間だけ家庭にいるという生活でした。

3日間しか家にいないのに、1日は仲間と徹夜でマー جانをして家に帰らず、1日は疲れてずっと寝て、子供たちと付き合ってくれるのは1日だけでした。この1日で1ヶ月分を埋め合わせるのですから、父にしてみれば教えることが山のようにあったわけです。わたしたちは、一つひとつ目に焼き付け、次に帰ってくるまでおさらいするのでした。

当然、1日で教えられることは限られてきます。トリモチの木から皮をはいでトリモチを作る。竹馬の足を載せる部分を自分で作る。凧揚げの凧を骨組みから作り、障子紙を張って飛ばす。釣りに行けば釣り糸に針を結ぶ。いろんなことを一から教わりました。

一つだけ悩みがありました。父はあらゆることを教えてくれましたが、一度しか教えてくれなかったのです。しかも作り方は教えてくれましたが、実物は残しませんでした。魚釣りが好きだったわたしにとって、釣り針の結び方を一度しか教えてくれなかったのには苦勞しました。お手本にと、結んでくれた釣り針も残してくれなかったのです。

手取り足取りきっちり教えてくれたのですが、いざ父親が船で出てしまい、一人で釣りに行くと、結びが不十分で針が抜けたりします。父のそばで見よう見まねで結んだときはどんなに引っ張っても抜けなかったのに、自分で繰り返してもうまくいきません。これには閉口しました。

しかしよくよく考えると、出来上がったものを与えられても、失ったり壊したりすることがあり得ます。ところが作り方、使い方、手に入れる方法を学んだ人は、決して失わないわけです。その意味で父が与えてくれたものは、わたしの中で生涯失わないものとなっていました。

福音朗読に戻りましょう。サマリアの婦人とイエスが生ける水について対話します。イエスは、「水を飲ませてください」と言われました(4・7参照)。ただし、日本語訳ではこうだということで、本来福音書が書かれたギリシャ語もそうであるかは確かめる必要があります。

悲しいかな、わたしはギリシャ語を読み解くだけの語学力はありませんので、原文に近い形で翻訳された英語を読むと、**"Give me to drink."**と書かれています。「水を飲ませてください」と**"Give me to drink."**の違いが分かると、わたしの説教のオチもすでに分かったようなものです。

"Give me to drink."をあえて日本語に訳すと、「わたしに飲み方をください」となります。これが原文のギリシャ語に近いと思います。す

るとイエスは、サマリアの婦人に、「水を飲ませてください」と言ったのではなく、「わたしに飲み方をください」と言ったことになります。これは明らかに違いがあります。

つい最近高校受験をなさって、見事合格を勝ち取られた中学3年生でしたら、”Give me to drink.”と “Give me (this) water.”は区別できると思います。イエスはサマリアの婦人に目の前の水を飲ませてほしいと言ったのではなく、飲み方を教えてくださいと、わざと言ったのです。

今週の説教のために、クムランの洞窟遺跡の写真を用意してみました。見てお分かりかと思いますが、このように乾燥した砂漠で、目の前に水などあるはずがありません。たとえ運よく井戸が掘り当てられても、その井戸もいつ涸れるかもわかりません。すると、本当に必要なのは目の前の水なのではなくて、水の飲み方、肉体的にも精神的にも、渇きをいやすその方法を知っておかなければならないのです。

ではイエスは、水の飲み方、渇きをいやすその方法を、サマリアの婦人に教えてもらおうとしたのでしょうか。そんなはずはありません。

「もしあなたが、神の賜物を知っており、また、『水を飲ませてください』と言ったのがだれであるか知っていたならば、あなたの方からその人に頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことであろう。」(4・10)と言っているお方ですから、イエスは人間がどのようにすれば真に渇きをいやすことができるのか、ご存知なのです。

ではなぜ、あえてサマリアの婦人にそのように話しかけたのでしょうか。それは、彼女に気づいてもらうためです。人は誰もが渇く。肉体的にも渇くけれども、それ以上に精神的に乾く。だから人はみな、渇きをいやすために、水の飲み方を学ばなければならない。それも、イエスから学ばなければならないと気付かせようとしているのです。

最終的に、サマリアの婦人は渇きをいやす水のありかを見つけたのでしょうか。彼女の理解はまだ不十分でした。「主よ、渇くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください。」(4・15)

イエスの招きを十分理解するためには、聖霊の照らしが必要です。サマリアの婦人にも、そして彼女を通してイエスを知り、信じるようになったサマリア人たちも、そしてわたしたちもです。洗礼を受けていきなりカトリックの信者として十分生きていけるわけでもないし、堅信を受けた瞬間、大人の信者に成長するわけでもありません。一步ずつ近づいていくし、徐々に恵みの意味を理解するようになるのです。

「わたしに飲み方をください。」イエスが示してくれた願い方を、わたしたちも願いましょう。どんな場面でも、永遠の命に至る水を探し当てることができるように。イエスが、その水を与えてくださることを忘れないように。永遠の命に至る水の探し方を学んだ人は、ある時目の前の水を失っても、渇いたままではいることはありません。



四旬節第 4 主日 (ヨハネ 9:1-41)

イエスはわたしたち人類に「遣わされた者」

四旬節第 4 主日は洗礼の準備をしている志願者がおられる教会はそのための典礼を行うことになっています。わたしたちの教会にも洗礼志願者がいます。少し洗礼の準備のことと重ねて、今週の福音朗読を考えることにしましょう。

いよいよ黙想会が始まります。赴任して最初の年なのでわたしが黙想を引き受けましたが、今年はいつになく準備ができず、うまくいくか心配しています。しっかり準備すれば済むことですが、なかなか時間が取れなかったので、神さま助けてくださいと、祈っているところです。

また、田平教会献堂百周年も、あと一年ちょっととなりました。百年前の 5 月 14 日に献堂、つまり神さまにささげられていますので、近い日程、来年の 5 月 20 日に記念ミサがおこなえたらなあと思っています。

関連してですが、「田平教会献堂百周年の祈り」というものを作ってみました。典礼委員会で「作ってくれ作ってくれ」とせがまれたものですから、あまり祈りをしない神父が、必死に祈って作ってみたわけです。おかげで髪の毛が 100 本抜けました。

祈りの用紙はすでに出来上がっておりますが、どうやら田平教会でのわたしの銀祝が済んでから百周年の祈りを始めるようです。今配ってしまうと、無くしてしまう恐れがあるので、近くなってから配ります。

今日の十字架の道行き、どうでしたか。今回のイエスさまが今まででいちばんだったでしょ？でも身代わりになったクレネのシモンは現れませんでしたね。布を差し出すペロニカおばさんも、現れませんでした。

今日のイエスさまを見て、わたしにもできそうだなと思った人がいるでしょう。そう思った人は、祈りの先唱をしている典礼の人に名を名乗ってください。四旬節に徳を積むことになると思います。今年の四旬節の十字架の道行きも、もうあと残りわずかです。来年も続けたいです。

福音朗読に戻りましょう。「生まれつきの盲人をいやす」物語です。2つのことに注目しましょう。この生まれつき目の不自由な人の、置かれている状況が変わっていく様子と、この人がイエスを呼ぶその呼びかけが変わっていく様子です。わたしにとってこの2つのことは、とても興味深い気付きとなりました。

置かれている状況の変化はさらにファリサイ派の人々から見た変化と、イエスの立場で見た変化とに分かれます。ファリサイ派の人々から見た「生まれつき目の不自由な人」の置かれている状況の変化ですが、彼ら宗教指導者にはもともと、この人が眼中にありませんでした。

当時の考え方では、身体的な不自由をこうむっているのは、本人か、周りの者か、先祖が罪を犯したからだとか本気で考えていました。罪を極力遠ざけて生きていると威張っていた人々ですから、「罪の中にいる人」は全く眼中になかったのです。

しかし、イエスによって視力を取り戻し、盲人がファリサイ派の人

々の視界に飛び込んできました。彼らは見えるようになった人を尋問し、尋問して自分たちには都合の悪い「あの方は預言者です」という信仰を聞くに至って、またも彼を外に追い出し、視界の外に置いたのです。

彼らファリサイ派の人々は、罪人とされていた生まれつき目の不自由な人が解放されて正しい人の仲間入りをする様子を受け入れることができませんでした。人間の弱さのためです。神のあわれみといつくしみが罪人を救うという愛のはたらきの前に、ひれ伏すことができないのです。自分の正しさだけが大事なのであって、罪人が正しい者とされるのが面白くないのです。

イエスはのでしょうか。イエスは多くの人にとって視界の外にいる人、蚊帳の外にいる人に神がどのように働きかけるのかを身をもって示します。イエスは通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけ、すぐにお世話をして、多くの人目に留まっていなかった人を注目の的にしていただきます。

それは見世物にするという意味ではなく、神は「身分の低い、この主のはしためにも目を留めてくださった」（ルカ 1・48）このようになさる方ですと知らせるためでした。人々が無視したり、避けたりして視界の外にいた人々に、神は初めから目を留め、最後までお世話するということです。生まれつきの盲人は、しいたげられてきた場所から、神の愛といつくしみを溢れるほど受ける場所に移されたのでした。

次に、生まれつきの盲人が、イエスを呼ぶその呼びかけの変化に注意しましょう。ファリサイ派の事情聴取の初めのころ、「あの方が、わたしの目にこねた土を塗りました。そして、わたしが洗うと、見えるようになったのです。」（9・15）と言います。尋問の最後には、「あの方は預言者です」（9・17）と答えました。そしていよいよイエスと再会して、「主よ、信じます」（9・38）と言ってひざまずいたのです。

わたしたちは、どちらから示された状況の変化に心惹かれるのでしょうか。答えは明らかです。わたしたちが信じるイエスが用意してくださる変化に引き付けられるはずです。たとえ今、人々の視界から遠ざけられていても、わたしたちを注目の的とし、はしためにも目を留めてくださる神のなさり方に心惹かれるはずです。

そうであるなら、わたしたちの語る言葉も、変わっていかなければなりません。今の生活にあって、イエスに呼びかける言葉は、単に「あの方」かもしれません。教会に行った時だけ関わりのある方、あの方。本当にそれでよいのでしょうか。もっと、関わりの深い方として呼びかけなければなりません。わたしの生活の大事なところで照らしと導きをいただいている方ですと、答えることができているのでしょうか。

そして最後には、「主よ、信じます」と、人生のすべてを託す方として呼びかけたいものです。わたしたちが信じるのは、社会の底辺に置かれている人、日の当たらない片隅に置かれている人を探し出して、光を当て、そっと触れてくださるお方です。そのためにイエスはわたしたちに「遣わされた者」なのです。



四旬節第 5 主日 (ヨハネ 11:1-45)

ラザロを解放したイエスを信じる

四旬節第 5 主日 A 年に朗読された箇所は、「ラザロの死」に始まり、「ラザロを生き返らせる」物語で頂点を迎えます。ヨハネ福音書の中でイエスがことばとしるしでもってご自分が誰であることを教える前半部の総まとめでもあります。わたしたちも四旬節を過ごしてきて、イエスが誰であることを学ぶ締めくくりとして、朗読を振り返ってみましょう。

4 月 1 日は、どのように過ごされたでしょうか。わたしはこの日の朝のミサで、「かつては『4 月 1 日付の辞令で台湾に転勤することになりました』とある人に言って、その人が食事も喉を通らないほど心配させたことがありましたが、今年も誰にどんなウソを言おうかと楽しみにしております。ただし、『今日こそは騙されない』と身構えている人には年に一度、ウソを言わない日にしようと思っています。」そんな話をしたわけです。

ミサの帰りでした。朝ミサの参加者を見送りながら、小学生にも「おはよう」と声かけましたら、「神父さま、髪の毛がふさふさしてます」と言われました。「え？そうかなあ」と言った途端、その子は「引っかかった引っかかった」と言って帰って行きました。誰かに何かを言うてからかってやろうという一日の計画が、打ち砕かれた瞬間でした。

これから話すのはウソでも何でもないのですが、黙想会を終えてすぐ、長崎に用事で出かけ、日帰りで帰ってくる途中居眠り運転をしてしまい、事故を起こすところでした。西海町の大串インターからずーっとバイパスを乗り継いで佐々まで来るルートです。

大串インターから入って間もなく眠気が来て、緑色のポールが立ててある中央分離帯のブロックに接触し、ようやく目が覚めました。接触した時すごい音がしました。西海町なのに、「ゴト、ゴト、五島」って、音がしたのです。今日はもうここしか笑うところはありません。分からなかった人はこれ以降の真面目な話だけ聞いてください。

では福音朗読に戻りましょう。マルタとマリアの兄弟ラザロの病気の知らせを受け、何日かして訪ねてみるとラザロは亡くなって墓に葬られていました。マルタとマリアの兄弟なのでから、年齢的にまだ若かったでしょう。人を悲しみの淵に追いやる死に対して、イエスは心の底から憤りを感じたのでした。

イエスは人間にいのちを与え、人を縛り付ける「死」から解放し、生かしてくださるために御父のもとからおいでになりました。人々の中には、この場面でイエスに疑問をいだく人も現れます。「盲人の目を開けたこの人も、ラザロが死なないようにはできなかったのか」(11・37)。

しるしがあるからと言って、誰もがマルタのようにイエスを「はい、主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであるとわたしは信じております」(11・27)と信仰告白できるわけではありません。人間の弱さとか、人間の限界に、イエスは再び憤りを覚えるのです。

そこでラザロを通して、イエスは決定的に、ご自分が人にいのちを与え、生かすためにおいでになったことを示されました。「ラザロ、出て来なさい」(11・43)。こうしてイエスは、人間を悲しみの淵に突き落とす「死」ですら、解き放ってくださる方であることを示されました。

イエスは人間の悲しみに無頓着でいられない方であることを、決定的な形で示されたのですが、一方ではイエスを信じない人たちとの対立も決定的となります。祭司長とファリサイ派の人々は、イエスの存在が耐えられないものとなります。彼らは偽善者であり、イエスに厳しく問い詰められていました。またイエスの行動で民が騒ぎを起こすことにもなれば、ユダヤ全域を支配下に置いているローマが黙ってはいません。イエスには死んでもらわなければならないと考えるようになります。

結果として、イエスは最後まで信じようとしなない人々によって死に追いやられることになりました。人にいのちを与え、人を生かすためにおいでになったイエスが、その働きのために死に追いやられます。イエスのわざは無駄だったのでしょうか。しかしイエスは十字架の死を通して復活し、この疑問に復活をもって答えてくださいました。

ラザロの生き返りは、人を取るべき態度を迫る出来事でした。イエスは人を悲しみの淵に突き落とすような死からも人を解放してくださいます。あなたはこの方を信じますか、拒みますか。態度を迫るのです。

もしかしたら、9割以上は神の望みにかなった生活をしているのに、ほんのわずか、隠れて神の望みに背いているかもしれません。イエスを拒んだ宗教指導者たちがそうだったでしょう。9割9分、神の望みにかなって生きていますから、ほんのわずか、悪に手を染めていても見逃してください。そういう生き方にもイエスは釘を刺し、それは偽善である、わたしを信じて生きるか、拒むのか、どちらかであると迫るのです。

まもなくすると、わたしたちは聖なる一週間、聖週間を迎えます。その頂点である聖なる三日間が始まります。この日々を迎えるにあたって、わたしたちはイエスの求めに答えを出さなければなりません。イエスは、信じて神の前にひざまずくのか、イエスの目を盗んでイエスを拒む生活が続けるのか、決めなければならないと思います。

イエスに返事をする一つの姿として、できる限り聖なる三日間の典礼に続けて参加しましょう。大人の人だけではありません。小学生も中学生も高校生も、聖なる三日間は教会の典礼の頂点ですから、続けて参加するようにしましょう。

「わたしたちはイエスに活かされて生きているので、イエスのもとに集まります。」この返事をもって、誰にでも堂々と、聖なる三日間の過ごし方を説明してください。その毅然とした態度が、今のわたしたちに求められているのだと思います。



受難の主日（枝の主日）（マタイ 27:11-54）

正しい人を正しい人と証言する信仰

受難の主日、聖なる一週間を迎えました。この一週間で、一年分の恵みをいただくようなつもりで過ごしていきましょう。

「受難の朗読」について少し説明したいと思います。受難朗読は、古くから聖金曜日の主の受難の記念祭儀に行われていました。きょうの主日にも受難朗読をするのは、主日ごとにキリストの生涯の主な出来事を記念していくためです。現在の朗読配分では、毎年聖金曜日にヨハネ福音書が読まれ、他の福音書は受難の主日に三年周期で読まれます。今年はA年なので、マタイ福音書です。

受難朗読は福音朗読の中でも最も重要な部分で、特別に長い朗読になっています。本日の「聖書と典礼」に掲載されていない長い形（マタイ 26・14-27・66）は、ユダの裏切り、最後の晩餐から始まり、イエスの遺体が墓に納められるところまで続きます。また、伝統的に受難朗読を分担して朗読するようになっているのは、キリストの受難の出来事をより生き生きと再現するための工夫です。

朗読から二つのことを取り上げたいと思います。一つはマタイが、イエスの死の場面に、すでにイエスの復活後のことを書いているということです。「そのとき、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂け、地震が起こり、岩が裂け、墓が開いて、眠りにについていた多くの聖なる者たちの体が生き返った。そして、イエスの復活の後、墓から出て来て、聖なる都に入り、多くの人々に現れた。」（27・51-53）

福音記者は、イエスの十字架上の死が、すでに迫害の中にある教会共同体にとって、さらに墓に眠る聖なる人々にとって、希望となることは明白であると教えようとしているのです。

もう一つは、ピラトの妻が伝言で、「あの正しい人に関係しないでください。その人のことで、わたしは昨夜、夢で随分苦しめられました。」（27・19）と証言したことです。ピラトも無罪を確信していましたが、ユダヤ人群衆はその頑なさのために致命的な過ちを犯したのでした。

わたしたちは繰り返し受難の朗読に耳を傾けています。わたしたちもまた、イエスは十字架の上で亡くなられたのち復活することを理解してこの典礼にあずかっています。そうであるなら、マタイ時代の教会共同体や、墓に眠る聖なる人々と同様に、わたしたちも十字架上のイエスを希望の源として仰ぐ必要があります。声に出して、十字架上のイエスはわたしたちの希望ですと、表明する必要があります。また、十字架上のイエスの前にたたずむわたしたちは、あえて罪を犯したりして心を頑なにしてはいけないのです。

これから始まる聖週間は、「すべての人をご自分のもとに引き寄せる」（ヨハネ 12・32 参照）イエスに導かれていく一週間です。



聖木曜日 (ヨハネ 13:1-15)

聖体によって一つにする、結ぶ

聖なる三日間が始まります。主イエスの過ぎ越しの神秘を、聖なる三日間を通してわたしたちも体験することにしましょう。福音朗読は最後の晩餐の途中、弟子たちの足を洗うという場面でした。最後の晩餐にちなんで、食事について思い出すことから少し話したいと思います。

わたしの幼い時、母親は安い魚を手に入れてすり身にして味噌汁を作って食べさせてくれました。たとえばエソを下ごしらえして、すり鉢で小骨もいっしょにすって塩で味を調え、鍋の中に少しずつ入れていました。熱が加わると、固まってみそ汁の具になりました。この料理はわたしも受け継ぎました。

イエスはご自分を食べ物として与えました。食事の席は、人と人を引き寄せ、結び合わせる力を持っています。イエス自身が、人と人を引き寄せ、結び合わせる食材となってくださいました。どのように食べなさいとか、どの人は食べるにふさわしいとか、何も要求せず、ただ黙って食べられてしまう存在になりました。この点は重要です。

今日の洗足式も、イエスの食べ物になるという姿勢が込められていると思います。足を洗う時、足をこのように差し出せとか、右足から出せ左足から出せとか、何も言わず、ただ黙って足を洗います。ここにも、イエスが弟子たちを引き寄せ、イエスに固く結び合わせる働きが表されています。

司祭の働きも、極めれば極めるほど、小言を決して言わないで仕える姿に変わっていくはずです。司祭が奉仕しやすいようにお膳立てをしろとか、司祭の都合が最優先だとか、どうでもいいことです。司祭の働きは、突き詰めれば食べられてしまう存在になることなのです。

主イエスの模範は、弟子たちにとどまりません。「あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない」(13・14)という呼びかけは、イエスを信じるすべての人に及んでいきます。足を洗う動作は、僕の中でも最も低い僕に命じられた務めだったと言われます。イエスは、最も低い僕に自分を置くことを互いに実践しなさいと言い残されたのです。

今の時代に生きるわたしたちには、僕という身分はないので、なかなか実感が湧かないかもしれません。けれどもイエスは、「食べ物」「食材」となって、また食事の途中に弟子たちの足元に膝をついて、互いに実践すべきお手本を残してくださったのです。

わたしは、生活の場で、食べ物となる覚悟があるでしょうか。自分から食べる人を選べないし、ひょっとしたら食べてもらえないこともありうる、そんな身分に自分を置く覚悟があるでしょうか。決して膝をつきたくない人前で、膝をつく覚悟ができているでしょうか。イエスはその心構えを、今日からの聖なる三日間でわたしたちに求めます。



聖金曜日 (ヨハネ 18:1-19:42)

十字架は天と地のかすがい、いのちを与えて一つに結ぶ

今年の聖金曜日受難の朗読の中で、「成し遂げられた」というイエスの言葉が印象に残りました。聖木曜日、弟子たちとの最後の晩餐の中で、ご自分のそばにおいて大切に育ててきた弟子たちに、イエスはご自分を食べ物として与えてくださいました。今日の聖金曜日の出来事の中で、イエスはいのちを与えてくださり、「成し遂げられた」のです。

聖木曜日の、食事の形でご自分を与える姿は、人と人との間でご自分を与える姿と捉えることができます。今日の、十字架の上でいのちを与えてくださる姿は、天と地の間でのやり取りを思わせます。イエスが十字架の上でいのちを与えてくださったことで、地上に暮らすわたしたちに天上の世界が開かれたのです。

ところで、「分け与える」ためには与える方と受ける相手とは近くにいなければなりません。イエスは最後の晩さんの時、ご自身を表すパンとぶどう酒を食事の席に共にについている弟子たちに分け与えました。

同じように、十字架のそばには、母マリアと愛する弟子とがいます。イエスは十字架の上でいのちを投げ捨てるのではなく、母と愛する弟子に分け与えるのです。最後の晩さんの席でも、十字架の上でも、イエスは人々を引き寄せ、いのちを与えて一つに結び合わせてくださいます。

ここに大切なしるしが込められています。イエスはパンとぶどう酒の形においても、十字架の上でも、いのちを投げ与えるのではなく、分け与えてくださるのです。そのためには、わたしたちはイエスのそばにいない必要はないのでしょうか。委ねられたいのちの重さを感じながら、わたしに与えていただいたイエス・キリストといういのちに養われて生きていく。そういう思いを新たにすることがあるのです。

イエスは食事の形でも、実体においても、いのちを分け与えて「成し遂げられた」お方です。わたしたちはその姿を遠くに立って見つめてはいけません。主の食卓にあずかり、主の十字架のそばに立ってあがめ、尊び、主の復活をたたえる者でなければなりません。

わたしたちがこの二日間で学んだことは次の事柄です。イエスは人々を引き寄せ、パンとぶどう酒の形のもとで、また十字架の上でも、いのちを分け与えてわたしたちを一つに結び合わせてくださるお方です。

イエスに分け与えられたいのちを失わないならば、わたしたちは新しいいのちに生まれます。寿命が来れば終わるいのちではなく、天の国と結ばれているいのちに今日から生きるのです。イエスは天と地を、ご自分のいのちを与えて結んでくださいました。死ぬことによってしかいのちを分け与えることができないので、わたしたちのために十字架上で死んでくださったのです。

今日は静かに、いのちを与えてくださる場所となったその十字架をたたえて家に帰りましょう。このあとの十字架の礼拝は、少し時間を取って各自十分な礼拝をおささげしましょう。



復活徹夜祭 (マタイ 28:1-10)

確かに、あなたがたに伝えました

主の復活、おめでとうございます。「あの方は死者の中から復活された。そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる。」(28・7) 弟子たちは復活したイエスと、ガリラヤで再開することになります。ガリラヤにこだわって、今年の復活祭の学びを得ることにしましょう。

主の天使がイエスの墓を訪ねに来たマグダラのマリアともう一人のマリアに語りかけます。墓は、イエスが十字架の上で亡くなられて、その結果としてご遺体が納められている場所です。人間の通るべき順番に沿って、婦人たちはイエスを訪ね求めたのです。

ところが主の天使は、十字架にかけられたイエスは、もはや人間の通るべき道のりの先にはおられない、新しい見方に立たなければ、イエスには会えない。そのように促しました。一方で、「番兵たちは、恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになった」(28・4)とありますが、それは、彼らが人間の通るべき道の先にしかイエスを見ることができなかったのも、完全に我を失ったのです。

では、主の天使が婦人たちに伝えた「ガリラヤ」とは、いったいどのような場所だったのでしょうか。マタイがイエスの宣教開始を描く中に次のように触れられています。「ゼブルンの地とナフタリの地、湖沿いの道、ヨルダン川のかなたの地、異邦人のガリラヤ、暗闇に住む民は大きな光を見、死の陰の地に住む者に光が射し込んだ。」(マタイ 4・15-16) つまり日の当たらない地方だったということです。

また、昨晚のヨハネによる受難の朗読の中で、律法学者のニコデモがイエスを擁護すると、他の律法学者からこう言われました。「あなたもガリラヤ出身なのか。よく調べてみなさい。ガリラヤからは預言者の出ないことが分かる。」(ヨハネ 7・52) ガリラヤは、人々から低く見られていた地方、日の目を見ない土地のシンボルだったのです。イエスはそのガリラヤに先に行って待っておられます。

さらに踏み込んで、低く見られていた人々が住む町ガリラヤに弟子たちが行くとはどういうことでしょうか。ここでわたしは、二つのことを考えました。一つは、人々が見るようにガリラヤを見ている間は、イエスに出会うことはできないのだらうということです。

もう一つは、イエスは三年間の宣教活動のほとんどの時間をガリラヤで過ごし、その教えは人々に受け入れられました。わたしたちが上からの立場で人に接したり、この世が重要視するような物の見方で生き続けるなら、イエスに出会うことはできないのだと思います。

イエスが弟子たちを「ガリラヤへ行くように。そこでわたしに会うことになる」と促すのは、「世の人々があこがれる価値観とは全く違う価値観で生きたあの日々を思い出しなさい。ガリラヤでわたしがしたように、人々から見放された人にも手を差し伸べ続けるなら、あなたたち

はわたしに会おう。」そのように教えたいのだと思います。

さて、これから入信の秘跡に臨もうとしておられる吉田さん。吉田さんはご家族と一緒に引っ越してこの田平町においでになりました。それは、環境を変えるということだったと思います。わたしは、引っ越して住まいを変えることも環境を変えることだと思いますが、カトリックの司祭としては、むしろ今日洗礼をお受けになることが、最も環境を変えるきっかけになるのではないか、と思っています。

今日お父さんが洗礼をお受けになることで、ご家族全員がカトリックの洗礼に結ばれた家族になります。ミサにおいでになった時、全員が聖体拝領のできる家族になります。一つの祈りを、みんなで唱え、一つの歌を、みんなで歌う家族になります。これこそが、環境を変える出来事、環境が新しくなる出来事ではないでしょうか。

主の天使は、神から託されたことばを婦人たちに伝えたあと、「確かに、あなたがたに伝えました」(28・7)と結びました。洗礼式を前に、わたしも同じことを言いたいと思います。神様は、環境を変えたいとのご家族の望みに、はっきりと関わってくださいました。

フランシスコ・ザビエルが宣教した平戸にご家族を招き、フランシスコ・ザビエルの洗礼名のもとに洗礼を受けて今日のこの復活の喜びを迎えらえるよう、神は長い時間をかけて導いてくださったのです。これから受ける洗礼式を通して、神はそのことをはっきり教えようとしておられるのです。「確かに、あなたがたに伝えました。」

ここにお集まりの皆さんも、復活した主イエスに出会うためにおいでになった方々です。復活した主と出会うために、わたしたちはこの世があこがれるような価値を追い求めてはいけません。むしろ降りて行って、悩みを抱えている人や声を上げることのできない人に耳を傾ける人になりましょう。そこで初めて、わたしたちは復活した主に出会うのです。今日から、実行しましょう。「確かに、あなたがたに伝えました。」

復活の主日（日中）（ヨハネ 20:1-9）



復活の主日（日中）（ヨハネ 20:1-9）

いつか代父を務めたお兄ちゃんだと気付いて

あらためて主のご復活おめでとうございます。本日の福音朗読の中から、「先に墓に着いたもう一人の弟子も入って来て、見て、信じた」（20・8）という部分を、徹夜祭に引き続き行われている今日の洗礼式に結びつけて話したいと思います。

福音朗読は、主の復活を連想させますが、描かれている事実だけですと「空の墓の出来事」と言える場面です。しかし、先に墓に着いた弟子は、状況からイエスの復活を信じました。肉眼で見えているものを超えて、その先にある真実を捉え、信じることは可能でしょうか。

わたしは幼い時に、山内豊神父様から洗礼を授けてもらいました。その時の代父は、本家のおじさんで、霊名もおじさんの霊名をもらいました。記録を見れば、授けた神父様も代父も分かりますが、それを信じることができるためにはもう一つの出来事が必要でした。

わたしが中学生で神学校に入学してから、山内豊神父様が一度わたしに声をかけてくれたことがありました。わたしには、山内神父様のあとの神父様からしか記憶がありませんので、わたしにとっては見知らぬ神父様でした。けれどもわたしの神学校入学をどこからか聞きつけて声をかけてくれた。その姿を見て、わたしにここまでしてくれるこの神父様はどんなにわたしを可愛がってくれているかが分かりました。

代父のおじさんも、わたしが神学校に入学してからはことあるごとにわたしに導いてくれました。ここまで面倒を見てくれるのは、わたしの神さまの子供としての始まりに関わってくれたからに違いないと思いました。洗礼の台帳に記録されている以上の愛を、二人から受けたので、わたしは山内神父様が洗礼を授けてくれて、本家のおじさんが代父になってくれたと納得し、信じることができるようになったのです。

イエスの復活を、弟子たちが空の墓から信じたのは、彼ら弟子たちの心の目が、肉眼で見える以上の何かを捉えたからだと思います。イエスは死の束縛にとどまっておられる方ではない。死に対して勝利し、死を超越して、今復活しておられる。自分たちは、肉眼で今見ている場面の向こうにある真実を告げ知らせなければならない。墓に来た弟子たちの中に、まだ十分ではないけれども、希望が芽生えていたのです。

今日わたしたちは、一人のお子さんの洗礼を見届けます。この子は小さいので、ひょっとしたら堅信を受けたばかりのお兄ちゃんが洗礼の代父になってくれたことも、中田神父が洗礼を授けたことも、忘れてしまうかもしれません。けれども後に、信仰の成長のために惜しまず協力してくれる姿を見たら、どうしてここまでお世話してくれるのか、気付いてほしいと思います。面倒を見てくれるお兄ちゃんの姿のその先に、代父として手伝ってくれた姿を見つけてくれたら嬉しいなと思います。

それでは洗礼式に移りましょう。



神のいつくしみの主日 (ヨハネ 20:19-31)

わたしも神のいつくしみを届ける人になろう

「神のいつくしみの主日」を迎えました。一年前の「神のいつくしみの主日」が前任地での最後の日曜日でした。残りわずかとなった日々を惜しみながら説教台に立ったのを思い出します。今年は、去年とは違った学びを見つけました。

さて今年の初めあたりから、百周年記念誌のタイトル募集をしておりまして。少しずつ応募が集まっておりますが、特に黙想会るとき、わたしが声をかけたこともあって、たくさんの方が応募してくださり、最終的に 51 通の応募がありました。

27 人、51 通の応募をすべて開きまして、なかなか一つに決めるのが難しく、最終的に「タイトルとサブタイトル」という形をとり、2 人の方の応募を組み合わせる今回の記念誌のタイトルとすることといたしました。メインのタイトルは「百年の祈り未来へ」を短くして主任司祭が一文字加え、「祈りは未来へ」とさせていただき、サブタイトルは「瀬戸山天主堂 100 年の歩み」を使わせてもらいました。

最終的に、記念誌のタイトルは、「祈りは未来へ～瀬戸山天主堂 100 年の歩み～」とさせていただきたいと思います。応募されたほかのタイトルも印象深いものばかりでした。この場をお借りして感謝申し上げます。採用された 2 人にはあらためて記念品を差し上げますが、応募された全員にも、何かのしるしは差し上げようと思っています。

ちょっとだけ余談です。メインのタイトルからは「百年」を外させていただき、一文字だけ主任司祭の責任で付け加えたと言いました。「一文字加えたから、わたしも記念品もらえるかなあ」と言ったら、「ダメ」と言われました。一文字変えても応募した人の作品であることに変わりはないそうです。それはそうと、記念誌編集部会の皆が、良いタイトルができたと喜んでおられました。前回の記念誌「永遠の潮騒」にかかわった方々もきっと喜んでくださると思います。

福音朗読に戻りましょう。今週の朗読箇所は、直前の箇所と読み比べると興味深いです。直前のヨハネ 20 章 1 節から 18 節は、週の初めの日の出来事で、前半では複数の弟子たちが登場し、後半ではマグダラのマリアに焦点が当てられています。

同じように、今週の朗読も週の初めの日の出来事で、前半は弟子たち全般が取り上げられ、後半はトマスに焦点が置かれています。何かを考えさせるために、福音記者がこのように整えたとも考えることもできるかもしれません。

そこで考えたのは、イエスの復活の出来事は、共同体にも、個人にも、救いの恵みを届けるということです。中でもトマスは、取り残された人の代表のように見えます。共同体に広く喜びが届いても、一人二人の、取り残された人がどうしても出てくる。そんな取り残された人にも、イエスの救いの手が届く。そのことを教えているのでしょう。

福音朗読の学びは、わたしたちの信仰生活に何を教えてくれるでしょうか。朗読箇所は、わたしたちの信仰生活の何かに似ていないでしょうか。お気づきの人もいるかもしれませんが、週の初めの日に、共同体が集まっている場面は、わたしたちのこの主日の集まりのことではないでしょうか。

もちろんわたしたちは、「自分たちのいる家」である「教会」の戸に鍵をかけてはいないでしょう。しかし、人によっては、日曜日のこの時間に教会に行き集まっているのだと、公にしていらない人もいるかもしれない。そこまではなくても、教会に行き何をしているか聞かれた時、「いやちょっと」と口ごもる人もいるのではないのでしょうか。

そんな、いろんなものを背負って集まっているわたしたちの中に、イエスが来て真ん中に立ってくださいます。それはつまり、わたしたちがささげるミサ、聖体祭儀です。パンとぶどう酒のもとに、イエスさまが確かにおいでくださる。ここに集い、聖体祭儀を共に祝うわたしたちは、「平和があるように」といつくしみ深い声をかけられ、「聖霊を受けなさい」と使命を授けられ、派遣されていくのです。

しかし、中にはどうしても事情があつてこの祭儀にあずかれなかった人がいるかもしれません。だれかから、「この前のミサに行っていないの？あーそれは残念」と、さらに追い打ちをかけられるかもしれません。いつの間にかわたしたちは、「ミサに行けなかった人」を、「ミサに行くことができた人」の立場で見ているかもしれないのです。

その時こそわたしたちは、「神のいつくしみ」を示すまたとない機会になります。その時のミサに参加できなかったことをあれこれ言うよりも、また主の日に集まって、いつくしみ深い神に近づこう。共同体にも、個人にもいつくしみ深い神が待っていてくださる。そんな声かけが必要なのだと思います。

今年の復活徹夜祭を思い出してください。光の祭儀の様子を、生まれて初めて見た人もいたのではないのでしょうか。声は聞こえるけれども、何をしているのかは分からない。わたしは特に関わっているメンバーではないから、見るができなくても仕方がない。そんな思いだったのでしょうか。

わたしは、「もっと多くの参列者が、光の祭儀、復活のローソクにおこなっている儀式を見せてあげたい」そう思ったので、知恵を絞りました。より多くの人に、参加していてもはじかれているその人に、司祭が執り行っていることを見せたい。何か工夫すれば、神のいつくしみがそこに感じられるのではないのでしょうか。

今日、復活したイエスさまは、わたしたちにトマスの姿を示して、何かの事情で漏れてしまった人に、あなたが恵みといつくしみを届ける人になってくださいと派遣します。どのように答えようかを考えてください。あなたが神のいつくしみを届けるために力を貸してくれるなら、イエスの復活を見ないのに信じる人はもっと増えていくのです。



復活節第3主日 (ルカ 24:13-35)

時を移さず出発して、エルサレムに戻ってみると

復活節第3主日A年は復活したイエスがエマオで現れる場面が取り上げられます。「そして時を移さず出発して、エルサレムに戻ってみると、十一人とその仲間が集まって、本当に主は復活して、シモンに現れたと言っていた。」(24・33-34) 復活したイエスが、同じ時に別の場所に現れたことについて、真剣に考えてみたいと思います。

咳がなかなか収まらず、ご心配をかけております。月曜日に漁船で海に繰り出したのですが、船に乗っているあいだは一度も咳をしませんでした。ですからこれからしばらく、海に船を浮かべて生活をしてみます。用事がある時は司祭館をピンポン鳴らすのではなくて、丘の上から、わたしの船に向かって旗信号を送ってください。よろしくお願いします。

育成会と女性の会で、ステキなお話が持ち上がっています。5月6日繰り上げのミサと、7日9時のミサで、こどもの日を迎えた小学生中学生に、女性の会からプレゼントを用意してくださるそうです。もちろん、ミサに来てくれた小学生中学生というのが条件です。女性の会からの真心、とてもありがたいなあと思っています。

育成会も、子供たちのために同じく6日繰り上げのミサと7日9時のミサで、子供のためにミサをささげてくださるそうです。このような取り組みは、女性の会にとっても、育成会にとっても、胸を張って誇ることができるものだと思います。

ここから先の話は、内緒の話なのですが、こどもたちもお母さんのために動き出しています。こどもたちのプレゼントを受け取るために、すべてのお母さんは母の日の繰り上げミサと2番ミサのどちらかにおいでください。

福音朗読に戻りましょう。復活したイエスはエマオに向かっている弟子に現れましたが、この弟子たちは復活したイエスになかなか気づきません。最終的にどうやって気付くかというと、イエスが「モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された」(24・27) このあたりから何かを感じ始め、「パンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった」ここに至ってようやく「二人の目が開け、イエスだと分かった」(24・31) のでした。

何となく皆さんもお気づきになっていると思いますが、イエスが聖書を解き明かしてくださり、パンを裂いてお渡しになるというのは、これはミサのことを言っているわけです。エマオに向かう弟子たちと道すがら話したり話しかけられたりしているあいだは気付かなくて、ミサの原型と言えるような動作に至ってようやく復活したイエスに出会っていると実感したのです。

さてここで問題となるのは、どのようにして復活したイエスは同じ

時間に別の場所で現れることができるのでしょうか。答えは意外と簡単かもしれません。イエスが聖書を解き明かし、パンを裂いてくださるとき、同じ時間に別の場所で、復活したイエスは現れてくださるのです。

イスラエルから帰国の途に着いて、いったんインチョン空港に降り立ちました。どこかで時計を日本の時間に合わせなければならなかったのですが、面白いことに韓国と日本は時差がないので、韓国で時計を合わせれば、そのまま日本に降り立った時には時計合わせが要らないのでした。

このことをあとで次のように考えました。わたしたちは朝のミサをしばしば朝6時にささげています。おそらく韓国でも似たような時間でささげているでしょう。そしてわたしたちが習った教えによると、ミサがささげられるとき、イエス・キリストはパンとぶどう酒のもとに実際においでになると理解し、信じています。

当然それは韓国でも同じことでしょう。するとイエスは、何の矛盾もなく、朝の6時にささげられているミサの中で、日本においても韓国においても、同時に現存しておられるのです。むしろ復活したイエスでなければ、同じ時間に別の場所に存在することは考えられません。復活の出来事を信じているわたしたちは、聖書を読み解き、パンを裂いて祝う主の過越の中で、同じ時、別々の場所でイエスを囲むのです。

もう一つ、考えなければなりません。「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」(24・32) この弟子たちの言葉を見落としてはいけないと思います。ミサに集まり、みことばを解き明かしてもらい、パンを裂いてくださるイエスに、わたしたちの心は燃えているのでしょうか。

復活したイエスに燃えるともし火をいただいた弟子たちは、時を移さず出発して、復活の喜びを告げ知らせています。わたしたちが朝のミサに集い、本当にイエスに燃えるともし火をいただいたなら、その日一日のどこかで、燃えるともし火を誰かに示し、分かち合う必要があるのです。

復活したイエスは、同じ時、別の場所で、ご自分のもとに集まるすべての人に聖書を解き明かし、パンを裂いてくださいます。田平教会で平日のミサにあずかる人は、残念ながら上五島の一般的な平日のミサよりも少ないです。もし、朝から新聞を待ってすでに起きているような人がいるなら、新聞に目を光らせる前に、ミサにおいでになってみことばに照らされ、聖体に養われてほしいのです。

平日のミサ、復活したイエスは誰よりも、何よりもわたしたちを燃やしてください。田平教会献堂百周年に向けて、同じ時間に別の場所で同時に現れる復活した主に出会い、一日を始める。そんな田平教会の信者が、もう少し増える 2017 年であればと願っています。



復活節第 4 主日 (ヨハネ 10:1-10)

わたしを通して入る者は救われる

2泊3日のお休みをいただきました。ソウル大司教区の司教座聖堂明洞聖堂を訪問してきました。縦が100m横が30mはあったと思います。この聖堂でしばらく今週復活節第4主日の説教案を考えてみました。

さて今週お願いされているミサの中で、育成会がお願いしたミサがあります。小学生・中学生の皆さん、気が付いたでしょうか。育成会のお父さんお母さんが、こどもたちが神さまのこどもとして成長してくれるように、ごミサをお願いしてくれました。

主任神父さまは、こどもの日をこう考えます。「こどものために、いちばんよいことをしてあげる日」これが神父さまの考える「こどもの日」です。育成会を作っているお父さんお母さんたちは、こどものためにいちばん良いことは何かを考えて、ごミサをお願いしてくれたのです。

もしかしたらこどもたちは、「ゲームを買ってくれることがいちばんいいのに」とか、「遊園地に連れて行ってくだらいたらいちばんいいのに」と思っているかもしれません。もし本当にその通りだったら、あなたのお父さんお母さんは、今日のミサに来てないでしょうし、小学生・中学生のあなたも、ここにはいないはずです。

育成会を続けてくれているお父さんお母さんがこどもたちのためにいちばん大切なことと考えたのはゲームでも遊園地でもなく、神さまの恵みを受けてすくすくと成長することです。目の前の楽しみは、目の前のことだけですが、今日こどもたちの成長を願って神さまからいただく恵みは、小学生・中学生の明日を作り上げていくのです。

未来を保証する神さまの恵みこそ、今こどもたちに必要だ。育成会のお父さんお母さんたちはそう思ったので、ごミサをお願いしてくれました。神父さまは育成会を誇りに思います。

福音朗読に戻りましょう。朗読の後半を取り上げたいと思います。イエスさまは「わたしは羊の門である」(10・7)「わたしを通して入る者は救われる」(10・9)と言われます。「門」をたとえにする話は、日本人には分かりやすいと思います。

立派なおうちは、入り口になる門も立派です。おうちの様子が見えなくても、立派な門を見れば、「このおうちはきっと立派だろう」と想像できます。門構えが、建物のだいたいの様子を想像させるのです。

お話の初めに、ソウルの明洞大聖堂に触れました。圧倒されるような大きさでした。近づくとだれもが、「入ってみようかな」と思わせる大聖堂でした。大きさは、人を惹きつけます。田平教会もそうです。明洞大聖堂にはかないませんが、ここに訪ねてきた多くの人々が、入り口を探して、入ってみようと思うはずです。

建物の「門」だけではありません。わたしたちは、「入門」という言葉を聞いたことがあるでしょう。学び始めることを「入門する」と言いますし、学び始めるときの本を「入門書」と言います。有名な人に弟

子入りするのを「門をたたく」と言うこともあります。それは本当に門をたたかなくても言ったりします。

教会も「門」にたとえることができます。復活徹夜祭に、一人のお父さんが洗礼を受けました。そのお父さんは田平教会の門をたたいて、勉強会を始め、洗礼を受けるために入門したわけです。イエスさまの弟子になりたいと思って入門してきました。だから、教会の門をたたいて洗礼を受ける人は、イエスさまが言っている通り、「わたしを通して入る者は救われる」のです。

大聖堂を見たとき、または田平教会のように立派に建てられた教会を見たとき、人はどうして、「ここに入りたい」「ここで学んでみたい」と感じるのでしょうか。それは、何かよいものがある、何かを受けることができると感じるからだと思います。

心で感じるものは、きっと本物だと思います。心で感じたこと、心に響いた声にちゃんと答えをもらったとき、わたしたちはいちばん満足できるのだと思います。特別おいしいものとか、高級な品物ではなくても、心が感じていることにきちんと答えてくれるものを、誰もが探し求めているのです。

「わたしは門である。わたしを通して入る者は救われる。その人は、門を出入りして牧草を見つける。」(10・9)これはイエスさまの固い約束です。立派な聖堂はイエスさまのしるしで、イエスさまが立派な聖堂を通してわたしたちを招いてくれます。「入りたい」と感じた人は、この聖堂を出入りして自分の心が期待していたものをイエスさまからいただけるのです。

聖堂に入って、聖堂でお祈りして帰る人は、がっかりした顔をして帰ったりはしません。もしかしたら何ももらっていないかもしれませんが。けれども、心が感じたものを多くの人を受け取って帰るのです。

わたしたちは、「行ってみたいなあ」と思って聖堂に入る人々とは違います。わたしたちは「聖堂に入ると、イエスさまから心が感じている必要なものをもらうことができる」とちゃんとわかってやって来ています。もしできるなら、おともだちに、「わたしたちは日曜日とかに教会のミサに行って、イエスさまに育て導いてもらってるんだよ」と堂々と言える人になってほしいなあと思います。

ときどき、教会の中を窓から覗く人がいます。ミサの説教中も、正面玄関のガラスの向こうから覗いている人がいます。窓から覗いても、イエスさまに養われることはできません。覗いて終わりではなく、「わたしの心がこの聖堂に引き寄せられているから、中に入って養われたい、中におられるイエスさまに導かれたい」そんな心の声に動かされる人がもっと増えるように願いましょう。

皆さんも、「この聖堂に入ってみたいですか？では先に入ったことがあるわたしに、ついてきてください」そんな案内をして、一人でも多くの人を真の羊飼、真の門であるイエスさまに案内することにしましょう。



復活節第 5 主日 (ヨハネ 14:1-12)

わたしのいる所に、あなたがたもいることになる

今年の復活節第 5 主日は 5 月の第 2 日曜日、母の日と重なりました。読み上げられた福音朗読の中から、「こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる」(14・3)を取り上げてみたいと思います。

イエスさまは父である神さまのもとへ行く時が近づいていたので、弟子たちに心の準備を話しています。「心を騒がせるな」(14・1)とか「あなたがたのために場所を用意しに行く」(14・2)

けれども弟子たちは、イエスさまが離れてしまうのではないかと心配です。トマスはとうとうこう言いました。「主よ、どこへ行かれるのか、わたしたちには分かりません。どうして、その道を知ることができるのでしょうか。」(14・5) いつもそばにいてくれた人がいなくなるかもしれない。どんなに寂しく、つらいと感じたことでしょう。

さて 5 月の第 2 日曜日は母の日です。母の日に、どんなことをしてあげますか？この日のために、小学生中学生の皆さんは貯金箱から出し合って、大好きなお母さんのためにミサをお願いしてくれました。お母さんのためのミサは、母の日の特別なプレゼントだと思います。

他にもいろいろ計画していると思いますが、神父さまは、お母さんとできるだけ長い時間一緒にいてくれることが、母の日にいちばん喜んでもらえることだと思います。神父さまのお母さんは上五島にいるのでそばにいてあげることができず、残念です。でも皆さんは、できるだけ長い時間、お母さんと一緒にいてあげてください。

神父さまには家族の思い出のうち、辛い思い出も楽しい思い出も両方持っています。楽しい思い出はだれでも持っていると思うので、辛い思い出のほうを紹介します。ある日の昼ご飯、本当に食べる物がなくて困っていました。お米はあるけれども、おかずがありません。たくあんも梅干しも、ふりかけもありませんでした。

そこでしかたなく、お母さんはしょう油を持ってきました。ご飯にかけるものはしょう油しかありませんでした。兄弟みんなで、ご飯にしょう油をかけて食べました。弟たちはご飯を食べずに泣いていました。

でも兄弟の長男だった神父さまは、不思議と涙は出ませんでした。いちばん辛い思いをしているのはお母さんだと知っていたからです。こどもたちより、お母さんが泣きたいはずです。お母さんは「本当にごめんね」と言いながら一緒に食べました。

神父さまはなぜか、その時とっても嬉しかったのです。ご飯にしょう油をかけて食べるのは辛いけれども、でもお母さんと一緒にご飯を食べている。一人きりでもないし、自分ひとりだけ食べ物が無いわけでもありません。船に乗っているお父さんを除けば、家族みんなでご飯を食べている。だからなぜか、嬉しかったのです。

家族が一緒にいてくれる。お母さんが一緒にいてくれる。それは本当に幸せなことです。もし、「お父さんお母さんはどこかに行くけれど

も、心配しなくていいよ」と言われたらどう思うのでしょうか。「心配しなくていい」とか信じられるのでしょうか。信じられないと思います。それよりは、何もなくてもお父さんお母さんが一緒にいてくれるほうがどんなに嬉しいのでしょうか。

福音朗読に戻りましょう。イエスさまは御父のもとに戻る日が近づいています。もし弟子たちを置き去りにして御父のもとに戻るのでしたら、心が引き裂かれる思いだったでしょう。イエスさまも弟子たちを置き去りにするくらいなら、御父のもとに戻ることをためらったでしょう。

けれども、イエスさまは復活して、いつも共にいてくださるお方です。弟子たちを置き去りにはしない。はっきりとそのことを理解していたので、「心を騒がせるな」と声をかけたのです。今は、弟子たちは理解できないかもしれませんが、イエスさまが御父のもとに戻り、辛く苦しい時にきっと「わたしのいる所に、あなたがたもいる」このことをはっきり理解する時が来るのです。

神父さまのおうちでは、小さいころお父さんは船に乗っていたので一ヶ月のうち三日間しか家にいませんでした。でもお母さんは、いつも一緒にいてくれました。楽しい時ばかりではなく、辛い時、泣きたいときも一緒にいてくれました。

だから、母の日にはできるだけ長い時間、お母さんと一緒にいてほしいのです。わたしたちのためにいつも一緒にいてくれているのだから、母の日くらいは皆さんのほうが、「お母さんずっと一緒にいるよ」と声をかけてくれたらいいなあと思っています。

イエスさまも同じことを弟子たちに考えています。イエスさまは決して弟子たちを置き去りにしません。復活していつも共にいてくださいますし、弱いわたしたちのために聖霊を約束してくださいました。イエスさまを信じる人を決してひとりにはしておかない方なのです。

そこで、わたしたちも考えてみましょう。母の日に、できるだけ長い時間お母さんと一緒にいてくださいとお願いしました。わたしはイエスさまと、いつでもできるだけ長い時間、一緒にいるのでしょうか？それは「主の日」である日曜日だと思います。

わたしたちは平日は、学校に通ったり習い事をしたり、ほとんどの時間を外で過ごしていると思います。イエスさまと長い時間一緒に過ごすことがほとんどできていないかもしれません。

けれども日曜日は、教会に来てミサにあずかります。ミサの時間はだいたい一時間ですね。日曜日に教会に来ると、たっぷり一時間、イエスさまの近くにいて一緒に過ごすことができるのではないのでしょうか。

イエスさまはいつもわたしたちのそばに一緒にいてくださいます。わたしたちは、はっきり意識しないと、イエスさまのそばにすることができません。だから日曜日は、とくにイエスさまと一緒に時間を過ごす。そんな時間にしてほしいなあと思っています、わたしは日曜日は特に、イエスさまと一緒に時間を過ごします。それがわたしたちの誇りになったら、本当にいいなあと思っています。



復活節第 6 主日 (ヨハネ 14:15-21)

わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない

復活したイエスは四十日にわたり弟子たちに現れ、その後天に上げられたと教会は教えます。今週は復活節第 6 主日、いよいよ父なる神のもとに帰るにあたり弟子たちを励ます言葉が聞こえます。わたしたちも復活したイエスがより身近に感じられるきっかけをつかみたいと思います。

直前に亡くなって葬儀ミサをささげたお父さんの姿をじっと眺めていて、わたし自身の父のことを思い出しました。9 年前の 5 月 31 日にわたしの父は亡くなりましたが、棺に納められて丸一日自宅で過ごしました。もちろん話することなど叶わないわけですが、奇跡が起こって返事をしてくれないかと思いつつ、心の中で話しかけたのを思い出します。

結論から言うと、話しかけてその時は返事をもらえなかったわけですが、問いかけたり話しかけたりした返事は、少し違う形でもらえたような気がしています。中田神父の父親は晩年は熱心に教会に通い、ロザリオ部の部長を務めていました。ロザリオの信心を絶やさないようにするための部会でした。

そういう父親でしたので、父親の声を聞くためには、父親が常日頃大切にしていたロザリオを自分もおろそかにしないことではないかなと思うようになったのです。そうしているうちに、「お前もこの地味な信心業の良さが分かって来たか」そう父親が言っているような気がしたのです。

「こんな時は、どんな決断をしたんだろうか。」人を束ねて、大きな目標にたどり着かせようとするとき、規模は違うかもしれないけれども、旋網船の船長時代、ロザリオ部の部長だった時代、人を束ねてきた父親の返事を探して、祈りの中で答えを見つけようとしたのです。すると、ひんぱんに通っていたミサの中で祈っている父親の姿が思い出され、「おれだったらこうするよ」とか「おれはこうしたけどな」という声が聞こえる気がしました。

年老いた姿になるまで生きてはおりませんでした。父親が子供たちに何を残したかったか、何を伝えたかったかは分かります。生きている間に大切にしていたものを自分も大切にすれば、生身の声は聞こえなくても、何かしらの声を聞くことができると感じたのです。

与えられた福音朗読の中で、次の言葉が目を引きました。「わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない。あなたがたのところに戻って来る。」(14・18) イエスの約束は力強いのですが、弟子たちは「はいそうですね」と喜んだのでしょうか。先週も話しましたが、イエスは御父のもとに帰ることを明言しておられるのです。おいそれと、「安心しました」とは言えないはずでした。

けれども、イエスが「あなたがたをみなしごにはしておかない」と言うからには、信頼に足りるだけの裏付けがあるはずです。わたしたち

もその点を押さえないのです。どうすれば、イエスに置き去りにされたと感じることなく、安心することができるのでしょうか。

それは、3年間共にしたイエスとの活動を、もう一度たどり直すことです。イエスはほうぼうの町や村を巡って教えを説き、病人をいやし、救いの希望を告げ知らせました。会堂では聖書を朗読し、集まっていた民衆や、指導的立場にある人々の前に立ちました。人々の無理解に会い、指導的立場の人々から命を狙われ、それでもイエスは御父がご自分のうちにおられると信頼していました。

これから弟子たちが、イエスの生涯を追体験していきます。各地を回って救いの訪れを知らせ、会堂で聖書を解き明かし、理解されたり敵意を買ったりしますが、その中で常にイエスがそばにいて強め、励ましてくださることを肌で感じるのです。実際にそばにいた時も心強かったのですが、復活したイエスはその後も弟子たちを守り、彼らをみなしごにはしておかないのです。

じつはわたしたちも、身近なところで同じような体験をすることができます。もっと長く生きてほしかった親に旅立たれ、戸惑っているときに、親が大切にしていたものを子供たちがたどり直していくと、どこかで親がそばにいたことが感じられたりします。

決してわたしたちを置き去りにしていったのではなく、わたしたちをみなしごにはしておかない、その親心が十分伝わる何かを見つめることができるのです。その何よりの近道は、両親が大切に守り、こどもたちにも残してくれた信仰の宝物を見直すことだと思います。

子供たちが、なぜここまでしてわたしに信仰を残してくれたのか、たどり直してみると、みなしごにはしておかないと考えていたことがありがたいと思えるようになるのです。親から子に残してくれた信仰をもう一度見つめ直したとき、わたしは旅立っていった父親を近くに感じることができました。

イエスも、弟子たちが途方に暮れないようにしてくださいました。わたしたちがふだん途方に暮れることがあるとすれば、それは探し求める場所が違っているのだと思います。

「わたしを近くに感じたいなら、欲望渦巻くこの世ではなく、目を天に上げ、神の国を求めなさい。そこでこそ、わたしはあなたたちのそばにいて、あなたたちを力づけることができる。」イエスは当時の弟子たちにも、わたしたちにも同じことを教えようとしています。



主の昇天 (マタイ 28:16-20)

足元を見据え、イエスの望みを彫り出す

主の昇天の祭日を迎えました。イエスと弟子たちの関わり方が決定的に変わるのが主の昇天の出来事だと考えています。イエスと弟子たちの関わり方は、イエスとわたしたちの関わり方にも通じています。

わたしたちがこれからどのようにイエスに関わって生きていくべきか、与えられた朗読を頼りに考えてみましょう。あわせて、中田神父は田平小教区で司祭叙階銀祝を迎えることができました。25年積み重ねてきたことをこの説教にすべて注いで、皆様への感謝の気持ちをお伝えできればと思います。

最近テレビの調子がよくありません。広島カープが勝ったり負けたりするのです。電気屋さんに「このテレビは調子が悪い。修理してくれ」と言おうと思っています。もし広島カープが勝ち続けるテレビが売っていたら、買ってきてもいいと思っています。

【前晩のミサのために】繰り上げミサの前に、聖母行列を行いました。聖母マリアは今週の主の昇天の出来事、イエスと弟子たちの関わり方が決定的に変化することを理解するための理想の姿だと思います。マリアはたびたびわが子イエスとの関わり方に変化を求められました。

初めはイエスを神殿に奉獻する時です。「あなた自身も剣で心を刺し貫かれます。」(ルカ 2・35) ふつうの母としてわが子に接する道は横に置かなければなりませんでした。

その後はイエスが12歳になって、神殿でイエスを見失い、見つけた時。さらに婚礼の席に招かれ、母マリアがイエスに「ぶどう酒がなくなりました」(ヨハネ 2・3)と伝えた時。最後は十字架の上で「見なさい。あなたの子です」(ヨハネ 19・27)との声を聞いた時。ほかにもまだまだありますが、ふつうの親子の会話、親子の関りは、何度も横に置かざるを得ませんでした。

けれどもその度に、母マリアはイエスとより高い関わり方に目を向け、そこに身を置いたのです。イエスは母マリアを通して、「わたしについて来たい者は、その度にわたしとの関わり方を見直す勇気が必要です」と、招いていたのだと思います。

【銀祝記念ミサのために】あっという間に25周年を迎えました。記念の御絵を用意しました。司祭叙階の時に用意した御絵を、聖書の言葉を入れ替えて作り直しました。その心は、「変わらずにミサを大切にしていけます」ということと、「ミサ、とくに説教に向き合う姿勢はこの25年で変わりました」という思いです。

司祭叙階の時は、詩編 116「神が与えてくださったすべての恵みに、わたしはどのようにこたえようか。救いの杯をささげ、神の名を呼び求めよう。すべての民の前に進み出て、神に立てた誓いを果たそう」(詩編 116・12-14)を選びました。ミサをささげ、自分から進んで感謝するという姿勢でした。

25 年を経て、わたしの思いは詩編 118 がより近いと感じるようになりました。「わたしはあなたに感謝をささげる。あなたは答え、救いを与えてくださった。」（詩編 118・21）いつも願いに答えてくださった神に、ミサをささげて感謝する以外わたしに何ができるだろうか」そんな思いに変わったのです。今までは「ミサでもささげて感謝しようかな」だったのですが、「ミサで感謝を表すことしかわたしにはできない」と認めています。

聖書の中でそれは、母マリアが人間の理解を超える神の求めに「お言葉どおり、この身に成りますように」（ルカ 1・38）と答えてイエスとより高い関わり方に目を向け、そこに身を置いた姿です。イエスは母マリアを通して、「わたしについて来たい者は、その度にわたしとの関わり方を見直す勇気が必要です」と、招いていたのだと思います。

イエスは弟子たちに、マリアを通して示された道を歩ませます。すなわち、イエスが天に昇られると、目の前にイエスがおられた時よりも高い段階での関わり方に身を置くよう求めてくるのです。

「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしてください。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。」（28・19-20）

イエスが弟子たちと宣教活動しておられた時は、言われたことを行えばそれで済みました。しかしイエスが天に昇られると、「あなたがたに命じておいたこと」を思い出し、実行する必要があります。イエスに率いられて業を行うよりも、イエスが共にいることを人々が理解できるような業を行うほうが、イエスとのより深い一致が必要です。

第一朗読に登場した「白い服を着た二人の人」の言葉は印象的です。

「ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。」（使 1・11）

イエスが「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」（28・20）と仰るのはその通りですが、イエスは天の父のもとに昇られました。ですから3年間の宣教生活と同じことを望むことはできません。天を見上げていても始まらないのです。これからは弟子たちの業の中に、イエスの存在を示すのです。弟子たちの業を見て、人々はイエスが共におられることを知るのです。

わたしも、司祭叙階 25 年を迎えて、イエスとの関わり方により高い段階を求められていると思います。今までは、説教をする時「感じたこと、気付いたことを分かりやすく示す」という努力でした。できるだけ分かりやすくという点については、もしかしたら経験を積むことができたかもしれません。

しかしこれからは、与えられた朗読箇所が「ここを伝えてほしい」「このように伝えてほしい」と語りかける声に耳を傾け、指し示していきたいのです。感じたこと、気付いたことを思い通りに伝えるだけでは、イエスとの関わり方はもはや深まっていきません。このままの司祭生活だと、イエスは先へ行くのにわたしは現状維持で、イエスとの距離が広がってしまいかねません。

イエスとの深い一致を求めて、イエスが言いたいことを福音から掘り出す説教でありたいと思います。思うことを思い通りに掘り出すので

はなく、「このように彫り出してくれ」この声に聴き従いながら、イエスが望む姿を彫り出す説教を目指したいと思います。

イエスと弟子たちの関わり方がより高い段階になるのは、司祭や修道者にだけ求められているではありません。信徒の皆さんにも求められています。信徒の皆さんも、現状にとどまっていたら、「なぜ天を見上げて立っているのか」と言われてしまうのです。

わたしたちの信仰が、「わたしは週に二度断食し、全収入の十分の一を献げています。」（ルカ 18・12）この延長線上の信仰であるなら、もはやそれ以上信仰の深まりは体験できないでしょう。イエスは「わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない」（マタイ 9・13）と望んでいるのに、わたしたちが同じ信仰を求めないなら、あとから来た人に追い越されてしまいます。

イエスのご自分を信じるすべての弟子に、「あなたの思う信仰を思い通りに歩むのではなく、わたしの望む信仰を歩みなさい。生活の中で、わたしの望みを彫り出して、人々に示しなさい」と招きます。わたしたちには天を見上げて立っている暇などないのです。

聖霊降臨の主日(ヨハネ 20:19-23)



聖霊降臨の主日 (ヨハネ 20:19-23)

恐れを取り除き、イエスに心を開かせる

聖霊降臨の主日を迎えました。聖霊を思い巡らすことは神の思いに心を向けることです。神の思いに目を向け、わたしたちにどんな生き方が期待されているか、考えてみましょう。

先週の司祭叙階 25 周年の記念ミサと祝賀会にはたくさんの方々に温かい言葉をかけていただき、ありがとうございました。子供たちのプレゼントも毎日司祭館の食堂で眺めています。打ち上げをしてくれと言っていました。7 月 17 日海の日夜の夜、バーベキューでいかがでしょうか？

お祝いもいただきました。貯金と言いたいところですが、これから 15 年乗り続けるためにカローラフィールダーを買いましたので、母親を温泉に連れていく以外は車の支払いに充てさせてください。ただ、お祝いをくださった方には記念ミサと祝賀会の様子をビデオに撮っていますので、ぜひお分けしたいと思います。

当日の祝賀会においでくださった方々には、わたしが司祭に叙階された時のビデオをお配りしましたが、ご覧になられたでしょうか。最後までご覧になった方は、島本大司教様が赴任地を発表している様子もご覧いただけたと思います。祝賀会で配ったものと同じ DVD もまだ残っています。ご覧になりたい方は案内書に声をかけてください。

一つ失敗がありました。祝賀会で入場の曲をかけてくれと言って、「パーフェクトヒューマン」というのを CD に入れて渡していました。分かる人は分かると思いますが、あの中で「ナカタ」「ナカタ」と連呼するシーンがあります。その掛け声に合わせて入場したかったのですが、ずっこけてしまいました。主任司祭入場だけ、霊名の祝いでもう一度やり直したいと思います。

福音に戻りましょう。聖霊降臨の学びは、第一朗読と合わせて考える必要があります。まずは福音朗読ですが、イエスは恐れに捕らえられている弟子たちの真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」(20・19)と言って恐れを取り除いてくださいます。恐れを取り除いてから、聖霊を受けるように促し、さらに使命を与えています。

使命は、聖霊を受けて与えられます。しかも、恐れを取り除いてもらった状態で、平和・心の静けさを整えてもらった状態で使命は与えられます。当然と言えば当然です。恐れている弟子に無理やり使命を与えても動けないでしょう。あるいは失望している状態にあっては使命も重荷になるでしょう。平和な状態、心の静けさを取り戻した状態になってから、弟子たちは使命を果たすことができるわけです。

その鍵となるのが聖霊の働きです。イエスは天に昇られ、そのままでは弟子たちは心に穴が開いたままです。聖霊は御父から御子に与えられて、弟子たちに注がれます。「炎のような舌」(使 2・3)でありながら、人間を焼き尽くすことはなく、心の平和と、使命への熱意を与えるのです。

聖霊が降った様子は使徒言行録に詳しく書かれていますが、仮にその様子を知らないとしても、問題ありません。福音朗読は聖霊が恐れを取り除いてもらってから注がれ、使命を与えることをはっきり告げています。

堅信の秘跡で、聖霊降臨の時と同じ聖霊を注がれると教えられ、中には当時の聖霊降臨と結びつかず、首を捻った人もいるかもしれません。使徒たちに聖霊が注がれた時も、彼らは使命への熱意に燃えたのであって、やけどをしたわけではないのです。堅信の秘跡を受けたわたしたちと変わりありません。

御父はアダムとエバが罪を犯して救いから遠くなったことを心配して、御子を送ってくださいました。また御子は御父から受けた聖霊をわたしたちに送ってくださいました。聖霊は、わたしたちに対する御父と御子との深い愛なのです。

ところで福音朗読の中で、「聖霊を受けなさい」この言葉にわたしはいったん立ち止まって考えました。弟子たちにわざわざ「聖霊を受けなさい」と言う必要があったのでしょうか。弟子たちには聖霊を与える約束がされたはずです（ヨハネ 14・26 参照）。もっと言うなら、イエスが弟子たちに聖霊を与えるのを弟子たちに前置きする必要すらないはずです。

わたしはこう思います。ヨハネ福音書は聖霊の約束を受けて何十年もあとに書かれています。何度も思い巡らし、聖霊の約束は弟子たちに言われただけでなく、イエスを信じるすべての人に向けて言われたと理解したのではないのでしょうか。復活したイエスは当時の使徒たちだけでなく、今このときにも、信じるすべての人の恐れを取り除き、平和と心の静けさを整えて、使命を授けるのです。

ある人たちには特別に罪のゆるし、ある人には平和のための活動、ある人には祈ることで神の国の完成のために働く。今も聖霊は注がれて、さまざまな人に、さまざまな使命を与えているのです。

聖霊の働きは、身近な人に向かいます。わたしたちが使命を果たすなら、出会う人はわたしたちを通して聖霊に触れます。生きている限り、この世界が続く限り、わたしたちは聖霊によって遣わされていくのです。

三位一体の主日(ヨハネ 3:16-18)



三位一体の主日 (ヨハネ 3:16-18)

聖霊の働きで、イエスへの信仰と結ばれた

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。」(3・16) わたしたちは主の昇天・聖霊降臨・三位一体・キリストの聖体・イエスのみ心と続く一連の祭日の期間を過ごしております。父と子と聖霊の三位一体の神をたたえる祭日にあたり、今年は聖霊について考えてみたいと思います。

今月9日に、平戸市の老舗のホテルが装いも新たにオープンしまして、これはぜひ母親を連れて、温泉旅行をしたいなと思っております。まだいつにするかは決めていませんが、曜日としては、火曜日から水曜日を押さえて親孝行の日を用意しようと思っています。もし関係者の了解が得られれば、火曜日の修道院のミサと、水曜日の朝ミサにもあずかってもらおうと思っています。

そう言っていましたら、偶然にもお隣の平戸口の先輩神父さまが、10日(土)にお母様とご家族を連れて田平教会に立ち寄られました。いちばん近いホテルは別にあります、ひょっとしたら先を越されて、オープンしたてのホテルに親孝行に行ったか？とビックリしました。

先月、母の日のミサを子供たちの依頼でおささげしてもらいました。今月、父の日が来週巡ってきます。その時もきっと、お父さんを喜ばせるミサがささげられると思います。中田神父さまは、先にお父さんが亡くなったので、目の前のお父さんのためにおささげができる子供たちは幸せだなあと 생각합니다。期待して待っています。

さて三位一体の祭日、父と子と聖霊の神さまのことを、毎年頭を抱えながら考えてきましたが、人間がどんなに考えても神さまのことについて完全な説明などできっこないので、それよりもむしろ3年かけて父と子と聖霊について考えたほうが、準備をするわたしのためにも、同じような話を聞く羽目になる皆さんのためにも良いのではないかと思います。今年は、聖霊について話してみたいと思います。

与えられた朗読箇所はヨハネ福音書第3章の「ニコデモとの対話」の箇所です。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。」神の独り子は、受肉して世に来られました。神と、人とが一つになりました。この神秘に、わたしは聖霊の働きを思い浮かべました。

この世のもので、何かと何かが一つになるためには、繋ぐものがが必要です。しかし神と人とが一つになるために、この世の何かでは繋ぎ合わせることは不可能です。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。」神の愛が、御子の受肉という神秘を可能にしていると考えれば、イエスにおいて神と人とが一つであるのは聖霊の働きでしょう。

聖霊が、神と人とを一つにする神の愛であれば、わたしたちの中で神に属するものとこの世のもので一つになるためにも、聖霊の働きは必要になるでしょう。わたしたちの中では、目に見えない神、そして神

が与えてくださる恵みが、わたしたちの中に宿ることを知っています。洗礼を受けた時、神の子とする恵みが、わたしと結び合わされました。

聖霊によって一つに結ばれたものは、本当は切り離すことができないはずですが、ある人は自分の中にある信仰を、あたかも脱いだり着たりする洋服であるかのように考えています。ある場面ではカトリック信者としてふるまい、別の場面ではカトリック信者であることを横に置きます。それは、聖霊の働きによって一つにしてもらった神の恵みとわたしの結びつきを、十分考えていないからではないでしょうか。

皮膚と、皮膚に覆われたからだとは、切り離すことはできません。そのような場面を想像すらできません。神の恵みは、あたかもわたしたちを覆う皮膚のように、聖霊によって一つに結ばれたものです。もしも無理にでも聖霊によって一つに結ばれたものを横に置くというのなら、それは皮膚を剥がすのと同じ行為であり、想像するだけでも痛みを伴うでしょう。

神の恵みであるイエス・キリストへの信仰を、聖霊によって一つに結ばれたものであると深く理解していた時代がありました。それはキリシタンの迫害の時代です。当時の人々にとってキリシタンの信仰は、例えて言えば体の一部でした。キリシタンの信仰を捨てるということは、体の一部を切り離すことで、とても考えられなかったのです。

わたしたちはどうでしょうか。わたしと、神が与えてくださった恵みとは、聖霊によって一つに結ばれているのでしょうか。切り離したり、脱ぎ着したりできるものと思い違いをしていないのでしょうか。先週お祝いした聖霊降臨、その聖霊の賜物は、わたしという止まり木につかまっている鳥のようなものなのでしょうか。

そんなはずはありません。わたしの中で、恵みの雨となってしみ込んだので、切り離すことも、取り外すこともできないはずです。むしろ聖霊のもたらす実を結ばせるもの、わたしの中にあるものなのです。

三位一体の神の愛、聖霊は、わたしと神の恵みとを一つにしてください。それは洗礼であり、堅信であり、聖体であり、叙階の恵みです。聖霊によって一つに結ばれたものは、わたしをわたしらしくしてくれているのでしょうか。父と子と聖霊の三位一体の神が、わたしの中に分けることのできない尊い恵みをくださいました。

この世に属していながら、この世に属していない神の恵みと結ばれている。わたしの生き方で、まだ三位一体の神秘に触れていない人々に証を立てましょう。脱いだり着たりできる信仰では、相手に何も伝わりません。わたしの一部となっている信仰で、出会う人に三位一体の神を告げ知らせましょう。



キリストの聖体(ヨハネ 6:51-58)

イエスの小さくなられた姿がわたしを養う

キリストの聖体の祭日を迎えました。わたしたちが聖体を拝領する中で、神が御子を通して示そうとしている思いを学ぶ機会としましょう。キリストの聖体は心と体を養う糧です。心と体を神の思いに向けるヒントを得たいと思います。

父の日を迎えました。中田神父さまにとってお父さんや、おじいちゃんは、早くに亡くなってしまった人たちです。わたしのお父さんのお父さんは、わたしが3歳のころには亡くなっていました。わたしのお母さんのお父さんも、人間の死が理解できるようになってから最初に亡くなった家族です。いつも、先に亡くなりました。

だから中田神父さまは考えたのです。父方のおじいちゃん、母方のおじいちゃんは、生きているあいの時間よりも、亡くなってから思い出す時間のほうが長い人たちでした。父方のおじいちゃんのことを、お父さんや洗礼の代父のおじさん、おじいちゃんより長生きしたおばあちゃんたちから聞きました。母方のおじいちゃんも同じでした。

中田神父さまの中で、思い出をつないで、両方のおじいちゃんの姿がよみがえりました。どんなことを大切にしていたのか、どんなことをしてはいけないと考えていたのか。今神父さまの心の中にあるおじいちゃんの姿は、亡くなってから、長い時間かけて形になったものです。

弟子たちにとって、イエスさまの姿も同じではないでしょうか。イエスさまと弟子たちと共に生活したのは3年間です。それより、復活して天に昇られ、聖霊が注がれてからの時間でイエスさまの教えが深まって、イエスさまの姿をはっきりと描けるようになったのです。

ここで意外なことを話しますが、イエスさまの出来事が書かれた福音書は、いちばん早く書かれたマルコ福音書でも70年代、イエスさまと3年間を過ごしてから40年も後に書かれています。最後に書かれたヨハネ福音書は、実に50年以上もあとに書かれているのです。イエスさまの姿をより詳しく描くために、40年、50年という長い時間も必要な時間だったのでしょう。

福音朗読に移りましょう。イエスさまは何度も、「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む」(6・54)ことを繰り返して言います。イエスさまを食べると言うのですから、イエスさまはバラバラにちぎられて、形がなくなってしまうことになります。まるで、親鳥が雛に餌となる動物を与えて、雛が食べるような光景です。餌として与えられた動物を食べているあいだ、雛たちは口の周りは血がいっぱい付いているはずです。

本当に、イエスさまが食べ物になることが父なる神さまの人間に対する思いなのでしょう。イエスさまが肉と血になってしまうよりも、何か代わりの食べ物を与えて、イエスさまはそのまま活動を続けるほうが、神さまの計画が前に進むのではないのでしょうか。いえ、父なる神さまは、イエスさまが肉と血になって食べられることを望まれたのです。

「人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。」(6・53) 今は、わたしたちにとってイエスさまの肉と血とはご聖体のことです。どうしてほかの食べ物ではなくて、ご聖体をいただかなければ、命はないのでしょうか。あんなに小さなパン、あんなに薄いパンのどこに、命を養う力があるのでしょうか。

中田神父さまは今 51 歳です。初聖体を受けたのは 6 歳の時です。45 年間、ご聖体をいただいています。でも一度もおなか一杯になったことはありません。朝 6 時のミサでご聖体拝領してミサが終わってすぐ考えることは、「あー腹減った。何を食べようかな」です。それなのにどうして、「わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる」(6・51) ののでしょうか。

神父さまになってから 25 年、神父さまになる前よりもご聖体のことを思い巡らし、学んできました。それでも時々、ご聖体が命を養ってくれることを忘れてしまうことがあります。昨日も、病院に入院しているおじいさんにご聖体を運んでお見舞いしてくださいと言われて、「困ったなあ。日曜日の説教の準備中で忙しいけどなあ」と一瞬思ったのです。

けれども、命の危険にあるおじいさんにとって、神父さまが運んできてくれるご聖体はどんなに力強いことでしょうか。神父さまはそのことをもう一度自分に言い聞かせて、病院で待っているおじいさんにご聖体を運んでいきました。

ご聖体は、見た目には小さなパンで、おなか一杯にもならないし、栄養ありません。お金で考えたら 10 円の価値もないかもしれません。けれども、ご聖体を待っていた人は感謝してくれます。その姿を見ると、「わたしたちへの愛のためにご自分を無にされたキリスト」の姿が見える気がするのです。

ご聖体を拝領する人は、その人が命の危険にあればなおさら、ご自分を無にされた神さまの愛をいただいているのだと思います。神父さまはこの前のお見舞いの時、イエスさまはこのおじいさんのためにご自分を無にされたのだなあと思いました。神さまの深い愛をもう一度思い出しました。この姿が、わたしたちを生かす力なのだと思います。

わたしたちへの愛のために、ご自分を無にすることもためらわなかった神さまの愛が、キリストの聖体です。この神さまの愛が、永遠の命です。神父さまは初聖体から 45 年もかかって、司祭になって 25 年もかかって、神さまの愛はわたしたちを生かすのに十分だと分かってきました。忘れることもあるけれども、今ははっきりそう思います。

今日お父さんに感謝するためにごミサをお願いして、ご聖体を拝領する子供たちも、覚えていてほしいと思います。ご自分を無にされた神さまの愛、あの小さなパンにまで小さくなってくれた神さまの愛は、わたしたちに永遠のいのちを与えるのに十分なのです。できれば、小さなパンまで小さくなられたイエスさまにお仕えする司祭、お仕えするシスターになろうと手を挙げてくれる人がいたらなあと思います。



年間第 12 主日 (マタイ 10:26-33)

譲れないものを、恐れずに言い広める

復活節の一連の祝祭日が終わって、年間の主日に移行しました。年間第 12 主日は恐れを持つ必要のある相手はこの世ではなく、むしろ神のみを恐れるべきであると招きます。わたしたちの心の持ち方をうながす大切な招きだと思えます。

この前、書留で印象深いミサ依頼を受け取りました。たいていのミサ依頼は、家族の為先祖の為だと思います。そのミサには、家族と思われる方の名前と、さらに洗礼を授けてくれた神父さま、洗礼に立ち会ってくれた代父母の為に書かれていました。

いずれ報告をするのでどなたが頼んだかは公表されますが、耳を傾けてほしいのは、誰が頼んだかではなく、どんな人のために頼んだかに耳を傾けてほしいのです。

自分と関わりのある人のためにミサをお願いする。よく見かけるごミサです。けれどもその人が洗礼を受けた時に関わった神父さま、立ち会ってくれた代父母にも思いを向ける気配りは、中田神父もちよっと思い浮かびませんでした。たしかに関わってくれた司祭や代父母がいます。わたしも洗礼を授けてくれた神父さまがいますし、代父がいます。わたしが 51 歳になるまで、洗礼を授けてくれた神父さまも代父のおじさんも健在です。本当にありがたいことだと思います。

ではこれら洗礼に関わってくださった方々のためにわたしはどんな感謝をしてきたでしょうか。わたしが司祭になったことでいくらかの感謝はお返しできたかもしれませんが、十分ではないような気がします。今回依頼を受けたミサの内容を見て、もっと考えていいことだなあと思いました。そのまま真似をしないとしても、何か続けて感謝の思いを伝えなければと思ったのです。

福音朗読を読み返してみましょう。朗読の後半に、次のようにあります。「だから、だれでも人々の前で自分をわたしの仲間であると言い表す者は、わたしも天の父の前で、その人をわたしの仲間であると言い表す。しかし、人々の前でわたしを知らないと言う者は、わたしも天の父の前で、その人を知らないと言う。」(10・32-33)

ミサを頼んでくださる方すべてに当てはまると思いますが、ミサをお願いするということは、人々の前で「イエス・キリストの仲間です」と言い表している人たちです。それに加えて、自分がお願いする人に関わった人たちのことも忘れない。こういう姿勢は、イエスの福音を消化して、自分のものにして生きているのではないのでしょうか。

「自分はイエス・キリストの仲間です」「この人は、イエス・キリストの仲間です」こう言い切ることでできる人は、他の人間関係はともかく、イエス・キリストとの関係は変わったりしない、変えたりしない。そう確信している人だと思います。それは、朗読の前半で言われていることにつながります。「人々を恐れてはならない。」(10・26)

人間関係が良好だった人と、信仰を危険にさらす場面で対立し、難しい判断ののちに離れていくことが時として生じます。ほかのことは譲ったとしても、信仰の点では譲れない。その、どうしても変えられない部分で何かを強要されると、ある人は何事もなかったかのように手のひらを返します。しかしどうしても譲れないので、ある人は強要する人のもとを去っていきます。

たとえばそれは、結婚のためにカトリックの信仰を捨ててくれということかもしれません。いのちを宿したとき、いのちを初めから守ると教えられたカトリックの信仰、生涯にわたって愛と忠実を尽くしますと、結婚の時に誓うカトリックの信仰。この生き方を捨てて、わたしと一緒に歩いてくれと言われても、わたしたちは譲れないのです。

譲れないものを守るために、離れ去ると、どんな仕返しがあるだろうか心配になったり、立場を失うのではないかと思うかもしれません。イエスはそこで励ましの言葉をかけておられるのです。「人々を恐れてはならない。」しかもどんな危険も、神のために譲れないものは譲れないと心に決めたなら、神はあなたを守ってくださるのです。

スコセッシ監督が制作した「沈黙」を思い出してください。映画の中で、ロドリゴは最後に死んで葬られていきました。恐ろしい拷問の末に彼は転んでしまったのですが、火葬のために送り出されるとき、小さな十字架を奥さんが手に持たせてくれて、その姿で火葬されました。

譲れないものがたくさんあって、それが一つずつ引きはがされ、最後には司祭としての姿も引きはがされました。それでも、最後に一つ、譲れないものを手の中に納めて、旅立っていきました。まるで、「最後に譲れないものは、イエス・キリストへの信仰、その一つだけである」と言っているかのようです。

イエス・キリストへの信仰のために譲れないものがある。その生き方は恐れる必要のない者を恐れず、恐れるべき者を恐れて生きる生き方です。わたしたちはどうかすると自分の努力で何でもできると思っているのか、祈りをしなくても一日無事に生きていると勘違いしていますし、寝ている間に心臓が止まらなかったのもさも当たり前であるかのように思っています。恐れるべき者を恐れずに生きているのです。

恐れるべきものを恐れて生きるとは、びくびくして生きるということではありません。むしろ恐れずに生きる生き方です。わたしたちはイエス・キリストへの信仰に筋が通っていれば、何も恐れるものはないのです。「自分はイエス・キリストの仲間です」ときっぱり言える生き方、これを曲げたりおろそかにしないなら、何を失っても、誰を失っても、譲れないのです。

生涯、「イエス・キリストはわたしの仲間です」と言い続ける。わたしの守るべきものが、引きはがされるかもしれません。それでもわたしたちが譲れないものは、恐れずに言い広めることにしましょう。



年間第 13 主日 (マタイ 10:37-42)

わたしのために命を失う者は、かえってそれを得る

(ミサの初めに) 年間第 13 主日を迎えました。今日は 7 月の聖トマスの祝日にいちばん近いので、わたしの霊名も祝ってもらえて感謝しています。そして佐世保から「みことば会」の皆さんがこの日のミサに参加してくれました。懐かしいです。小教区の皆さんのため、今日特別に来ている方々のため、心を込めてこのミサをささげたいと思います。

「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしくない。」

(10・37) これはイエスが弟子たちを前にして話している言葉です。イエスが話している言葉は、よく考える必要があります。12 人の弟子たちは、すでに父と母を残して、イエスに従った人たちです。イエスが言っているような説明は必要ない人たちです。

イエスの言葉をうまく説明するためには、ここにいる弟子たちは誰なのかをまず考える必要があります。わたしはこう考えます。ここでイエスの言葉を聞いているのは、マタイ福音書が書かれた時代の人々で、イエスが目の前で語っているその意味は、福音書の中のイエスが、朗読を聞いている人々に生き生きと現れているのです。

福音書の朗読を聞いているのは、ほとんどが男性だったと思います。キリスト者たちは初めはユダヤ人の集会がおこなわれる会堂を利用してははずです。そこに集まるのは、ユダヤ教の習慣に従えば男性ばかりです。女性は、男性が聞いて学んだことを、家に帰ってから聞いて学んでいたのです。この、男性ばかりの集まりが、イエスが語りかけている相手だと思います。

次に、イエスが言っていることですが、これは無理な要求でしょうか。納得できる要求でしょうか。いくつか例を挙げます。わたしが受けたものを比べてみましょう。わたしは父や母から名前をもらいました。神からは洗礼の恵みをもらいました。また、父と母から形をもらいました。父や母の特徴をもらっています。神からは、形はないけれども命をもらいました。

今あげた例で、神が与えてくれたものよりも父や母が与えてくれたものを大切にしたらどうなるでしょうか。神が与えてくれた命よりも、父や母が与えてくれた「形」を大切にする。もし見える形を大切にしても見えない命を大切にしないなら、どんな意味があるのでしょうか。

違う例を考えてみましょう。「わたしよりも息子や娘を愛する者も、わたしにふさわしくない。」(10・37) 両親は子供に対して、何か計画を考えるといます。2 歳になったらこういうことを体験させたい、3 歳の時はこの計画、保育園の時期にこの計画、大人になるまでの計画を持っていると思います。そして将来は、こんな人になってほしいと考えているでしょう。

神様もわたしのために計画を持っていると思います。そして神さまの計画、神さまが持っている時間割は、両親が考えている計画と少し違

うかもしれません。そんな時、神さまの計画と父母の計画、曲げることができないのはどちらの計画でしょうか。

父母は、自分たちがこどもに思い描いた計画通りに子供たちが成長しないと、心配したり焦ったり、苛立ったりするかもしれません。その時父母が、「なぜ計画通りに進まないのだろうか」と考えるのは、本当に正しいことでしょうか。

ところで神さまの計画は、予定が狂ったり、思い通りにならなかったりしているのでしょうか。わたしは、神さまの計画や時間割は、すべて神さまの望み通りに進んでいくと信じています。神さまはご自分が人間に立てた計画を、心配したり焦ったり苛立ったりはしないと思います。

そこで考えてほしいのですが、「わたしよりも息子や娘を愛する者も、わたしにふさわしくない。」子供の成長を見守る両親は、神さまがこどもに持っている計画よりも、自分たちが子供に思い描いている計画を愛するのは、ふさわしくないと思います。わたしたち両親も、神さまも子供を愛しています。子供を愛することは素晴らしいのですが、子供にかけた両親の計画を愛するようになると、神さまの望みに合わなくなるのではないのでしょうか。

わたしたちは子供を見守る時、わたしたちの計画通りに育てていることを喜ぶのではなくて、神さまの望みに答える子供に成長していることを喜ぶ人になっていきたいと思います。

田平教会の主任司祭としては、いろいろ投げかけたことを自分に当てはめ、このように実行したら主任司祭が喜ぶのではないだろうか。そのように考え行動する信徒に育ててほしいといつも願っています。けれども、それは中田神父の思い描く理想ですから、神さまの望みは少し違うところにあるかもしれません。だから、「どうしてわたしの投げかけを、右から左に受け流すのだろうか」と苛立ってはいけない」今はそう思っています。

イエスは時代を超えて、いつもわたしたちに語りかけています。今は聖書を通してイエスは語りかけます。イエスの声を聞こうとする人はみな、イエスの弟子です。それぞれの生活の中で、「わたしの思いよりも、神の思いが実現しますように」こんな考えを基本にして、生活してほしいと思います。



年間第 14 主日 (マタイ 11:25-30)

わたしはイエスと一緒に軛にかけられている

年間第 14 主日、朗読は大変厄介です。「わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」(11・30)「イエスの軛は負いやすく、イエスの荷は軽い」と、信仰を誰かに伝えるときに語らなければなりません。むしろ「だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい。」(マタイ 5・39)と宣教するほうが簡単かもしれません。どのように理解したらよいのでしょうか。

司祭の働きから学びたいと思います。カトリック教会は洗礼を受けた時から記録を残して一人のカトリック信徒の魂の状態を保管し続けます。幼子が洗礼を受けたとしましょう。その子は洗礼台帳に記載され、同時に信徒記録票が作成されます。信徒記録票は、いわばその人がいつか進学や就職で転出することになった時のための基本台帳です。

洗礼を受けた子どもは、その後の教会での出来事が追加されていきます。初聖体を受けると、洗礼台帳の備考欄に初聖体の記録が追加されます。堅信を受けると、まずは堅信台帳に堅信の記載をしますが、同じように洗礼台帳と、信徒記録票にも堅信の記録を書き加えなければなりません、婚姻も同じことで、婚姻台帳、洗礼台帳、信徒記録票と合計3箇所に記帳しなければなりません。

正直、大変な作業です。洗礼台帳がすべての台帳の出発点なので、できれば洗礼台帳に堅信の記録を追記すれば、堅信台帳にも、信徒記録票にも、同時に記録が完了する。そういう魔法のような台帳が出来上がればいいのになと思います。

わたしに言わせると、パソコンを駆使し、資金を投入すれば可能だと思うのですが、パソコンを駆使できる世代が司教になり、長老クラスにならないと、そういう時代はやってこないかもしれません。

ただ、聞いた話では、韓国の教会はすでにそういうシステムが出来上がっているそうです。年間5万人も信者が増える国ですから、ある意味そういうオンラインシステムがなければ対応できないのでしょう。

さてここからが問題なのですが、長崎教区の全司祭が、洗礼を受けた人があとで堅信を受けた場合、堅信台帳への記入・洗礼台帳の追記・信徒記録票への追記、すべてを確実にこなしてくれているかと言うとそうではありません。

いろんな教会に赴任してみて、堅信を受けた子の洗礼台帳に当たってみると洗礼台帳には追記されていない。そういうケースはざらにあります。堅信がそうであれば結婚も同じことです。婚姻台帳には確かに記載されていますが、おおもとの洗礼台帳に追記されていないので、未完成のままです。場合によっては、「この人は書類上、結婚していない」という扱いを受ける可能性もあるわけです。

なぜそういうことが起こるかと言いますと、制度上の不備があるからだと思います。教区長である大司教様は、数年に一度小教区を訪問し、すべての台帳に目を通してご自分のサインをするのです。ここに欠陥がある。大司教様は前回のサインをされた頁から今回までの記録に目を通します。仮に5年間だとすると、5年間の洗礼台帳、堅信台帳、婚姻台

帳、死亡台帳にサインをするわけです。

しかし、今年堅信を受けた子どもの原簿である洗礼台帳にも堅信を追記しているかどうかは、14年前の洗礼台帳を見なければ分からないわけです。結婚に至ってはなおさらです。今年結婚した人の記録を洗礼台帳に追記しているかどうかは、25年前、30年前の洗礼台帳を見なければ分からない。何が言いたいのか、お判りでしょうか。

つまり、洗礼台帳に追記しなくても、バレたりはしないし、いよいよにならないと問題が表面化することもないということなのです。さらに問題なのは、司祭たちはそのことをうすうす分かっているのです。それは数年とかの長さではなくて、場合によっては10年20年、30年前の台帳を見ても同じようなケースに遭遇します。極端な話その人が亡くなってしまえば、洗礼台帳に堅信の追記がなくても婚姻の追記がなくても、表面化しないのです。

わたしは、こういう司祭たちは「知恵のある司祭」「賢い司祭」なのだろうと思います。ただしイエスはこう言います。「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。」(11・25)

神が御自分の思いを示そうとするのは、悪知恵・悪賢さを働かす者に対してではなく、だれかが、この教会の魂の記録を完成させなければならないと、重荷を負い、軛を背負う覚悟を持つとき、その時代の小教区、その時代の司祭にご自身をお示しになるのだと思います。

ではわたしはどうか。わたしは意地悪な人間なので、諸先輩が追記していない分は、わざと青のボールペンで追記しています。それでもわたしに与えられる時間も永遠ではありませんので、青のボールペンでどこまで未記入部分をさかのぼることができるか分かりません。けれども、中田藤吉神父さまに、百年後にやってきた司祭として胸を張って報告ができる程度には、形を整えたいとは思っています。

歴代主任の記録に青のボールペンで書き込むのは疲れます。重荷です。軛と言えます。しかし、誰も知りえない魂の記録を完成させる達成感、言葉では表せないものがあります。この達成感がなければ、もともと怠け者のわたしが尻拭いなどするはずがありません。

今回話したことは、主任司祭しか知りえない部分ですが、どこかの時代に赴任した主任司祭が「青ボールペンの仕事」をしてくだされば(別に青のボールペンでなくてもよいですが)、その小教区の魂の記録は救われます。得てして、大教会ほど台帳記録に潜む危険は大きいのです。その誘惑を振り切って、神が世に与えてくださった魂に身がかがめ、台帳記入というゴールの見えない地道な作業に取り組んでくれる司祭こそ、「わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽い」(11・30)この言葉の意味を理解するのだと思います。

「わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」イエスの言葉の意味を理解できるのは、嘘偽りのない柔和と謙遜を身に付けた人です。軛は二頭の動物を一つにまとめる道具です。わたしと一緒に軛につながれているもう一頭は誰でしょうか。疑いもなくそれはイエス・キリストです。軛が負いやすく、軽い根拠もここにあるのです。



年間第 15 主日 (マタイ 13:1-23)

イエスに種まかれた生き方を生きる

年間第 15 主日は種まく人のたとえです。種まく人のたとえは、続く毒麦のたとえと並んで、イエスがたとえ話の説明をする珍しいたとえです。わたしたちの生き方につながるたとえだと読みましたので、一緒に考えてみましょう。熱中症なのか、土曜日一日で五回くらい下痢しました。今週は早めに説教を終わります。

農夫が種まきをする様子は、パレスチナのどこにでもありふれた光景でした。誰もが見たことのある光景ですから、当然語られている内容も誰もが理解できたのだと思います。それなのに弟子たちはたとえの説明を求めました。あまりに日常すぎて、たとえに込められた意味を汲み取れなかったのでしょうか。

わたしも、今週の種まく人のたとえは、何を伝えればよいのかなかなか見えませんでした。種まく人がイエスだとしたら、まかれた種は何を意味しているのか。何を当てはめれば分かるだろうかとともにきました。

そこで一つの答えにたどり着いたのですが、イエスがまかれた種とは「どのように生きるか」という「生き方」だったのではないのでしょうか。道端で、土の少ない石地で、茨の生い茂る場所で、良い土地で。あらゆる場所で、イエスの生き方が示され、種まかれたのです。

しかし、イエスの生き方をすべての人が重く受け止めたわけではありませんでした。イエスの生き方は「重荷を負って苦勞する人」の生き方ですから、あこがれを持つ人はいないし、華々しさもあります。弱くしいたげられている人の立場に立ってみなければ、イエスの示した生き方が「本当に価値ある生き方」だと見抜けないのです。

そうしてみると、イエスが種まかれた「イエスに倣うという生き方」は、多くが無駄になるかもしれません。イエスの生き方に興味を持っても、この世を生きるだけならありとあらゆる生き方があり、目移りするほどです。自分さえよければよいという生き方のほうが、かえって魅惑的すらあります。

イエスは、様々な形で、ご自分の生き方を種まきなさいました。すべてを超えて神を愛し、隣人を自分のように愛する。この生き方を様々な形で種まいたのです。ある時は、幸いについての教えを説くことで。ある時は、奇跡を行うことで。ある時は、宗教指導者に追い詰められている人を守り抜くことで。

実を結んだ人たちはイエスが示してくださった生き方を重く受け止めた人たちです。三十倍とか、六十倍とか、百倍と聞くと怯んでしまうかもしれません。でも三十倍の実を結ぶ人を基準に考えれば、その倍実を結んだ人たち、三倍ちょっと実を結んだ人たちです。

イエスの生き方を種まかれて、重荷を負って労苦しているなら、その人はすでに実りを約束されています。実を実らせるのは神なのですから。人の二倍三倍苦勞した人はいくらでもいるはずですが、イエスの生き方に倣ったために重荷を負って労苦しているその人たちに、あふれるほどの実りを約束し

てくれるのです。

イエスが種まかれた生き方は、この世では重荷を負って労苦する生き方ですが、この生き方を重く受け止めた人の報いは、それまでの労苦を忘れさせます。辛抱強く、イエスに種まかれた生き方を積み上げていきましょう。

年間第 16 主日(マタイ 13:24-43)



年間第 16 主日 (マタイ 13:24-43)

イエスの業を微塵も疑わない

年間第 16 主日は先週の「種をまく人のたとえ」と結びつけて考えてよいと思います。イエスによってまかれた種は実を結ぶ。しかも、実を結ぶことに何の疑いもない。先週と合わせて、このように今週の朗読を読み解くことができます。

2週間ほど前に、郷里の鯛之浦教会評議会議長から電話があり、故郷での銀祝を祝うミサと祝賀会を 11 月に予定したいが、何週目を希望しますかと尋ねられました。上五島地区は 11 月の第 2 週はいつも合同堅信式に当たっているので、次のように返事をしました。「喜んで招待をお受けします。11 月第 1 日曜日をお願いします。」

11 月 5 日（日）に招待を受けましたので、ついでに田平小教区の皆さんの上五島巡礼を計画したいと思います。11 月 4 日（土）から 1 泊 2 日で募集します。ふるってご応募ください。宿泊をどう確保するか、はっきり決まっていますが、20 人くらい募集したいと思います。申し込みは後日申込用紙を用意しますので、記入し主任司祭に預けてください。

巡礼の細かい時間割も決まっていますが、確実なことは中田神父の銀祝記念ミサが 11 月 5 日（日）の 11 時くらいなので、そのミサには参加してもらいます。あとは、土日で教会を巡って上五島の信仰を吸い込んでいただければ幸いです。中田神父は銀祝の記念ミサのあと祝賀会も出席なので、鯛之浦でのミサ後は巡礼団と別行動になります。

このような招待を受けると、11 月 5 日はほかのどの日よりも確実な未来に変わります。信徒総会の時点で配られる年間行事予定と比べても確実な未来です。天気が変わろうが、鯛之浦教会にいかなる事情が生じようが、わたしのために時間を空けてもらえます。疑いをはさむ余地ありません。もっと言えば、わたしが不治の病に侵されたとしても、そこに存在しさえすれば、銀祝の行事は確実なわけです。

福音朗読に戻りましょう。「毒麦のたとえ」「からし種」と「パン種」のたとえ、ここにも未来について微塵も疑いを持っていない雰囲気伝わります。「『まず毒麦を集め、焼くために束にし、麦の方は集めて倉に入れなさい』と、刈り取る者に言いつけよう。」（13・30）良質な麦と毒麦の区別は果たしてつくのか。そういった疑いすら微塵も感じられません。

また「天の国はパン種に似ている。女がこれを取って三サトンの粉に混ぜると、やがて全体が膨れる。」（13・33）ここでも、天の国が豊かになり、発展することに何の疑いも持っていないのです。パン種がうまく生地にいきわたるのかなど、わたしたちが心配しそうなことが何も語られていないのです。

これはイエスが、神の国の成長・発展について微塵も疑いを持っていないことをよく表しています。まるで毒麦を抜き集め、良い麦を倉に納める様子をすでに確かめて来たかのように。あるいは三サトンの粉

が膨れる様子を確認済みであるかのようです。イエスにとって神の国の成長は、神が成長させてくださるのだから何の疑いもないこと、疑いをはさむ余地すらないことなのです。

もう一つ、マタイ福音書が読まれていた共同体の中では、イエスがメシアであることについて微塵も疑いを持っていませんでした。マタイ福音書第 11 章には洗礼者ヨハネのように「来るべき方は、あなたででしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか」とイエスがメシアであるか心の揺れがある人たちも登場しますが、マタイ福音書が書き上げられた西暦 80 年ころにはイエスが死んで復活し、救いを成し遂げられたこと、イエスがメシアであることは疑いのない真実だったのです。

では、同じようにマタイ福音書の朗読を聞いたわたしたちは、神の国の成長が疑う余地のないことであり、イエスが救い主であることもまた疑いようのない真実であると、表明しているのでしょうか。苦労が多いのに結果が見えてこない。召命がみるみる減っているのに働き手を送ってもらえない。イエスさまがわたしを見ておられるのか、救ってくださるのか、疑問に感じるときがある。

なるほど、イエスのたとえもイエスのみわざも、今のわたしたちにとっては疑いをはさみたくなるかもしれません。けれども、いつの時代にも見えないものを見ることができるのは、微塵も疑いを持たない人たちです。

旧約聖書のダニエルの物語は有名ですが、わたしの体験から例を挙げましょう。三十代前半に、長崎の滑石教会で助任司祭をさせてもらった時期がありました。その時お見舞いをしているおばあさんの中に、九十歳を過ぎた方がいて、常々こう言っていました。「神父さま、わたしは滑石教会が栄えますように、滑石教会が栄えますようにと、いつも祈っています。」

このおばあちゃんは、生きている間に、滑石教会の繁栄を見ることができたのでしょうか。少なくともこの滑石教会には、お世話になっている教会が栄えることを微塵も疑わずに祈り続けてくれた人がいたのです。このような人に、神さまが応えてくれないはずがないと思います。

一年を切った田平教会献堂百周年に向けて、わたしたちも毎日祈っています。用意された「田平教会献堂百周年の祈り」の中に、次の言葉があります。「私たちも、この聖堂を祈りと賛美の歌がこだまする家にします。この家がすべての人のともしびとなり、宣教の拠点となるよう努力します。」そうねばいいですねと他人事のように祈っているのでしょうか。こうなることを微塵も疑わずに祈るべきではないのでしょうか。

マタイ福音書時代の教会共同体は、イエスが示した神の国の姿を微塵も疑わない人々が証ししてくれました。わたしたちの時代も、わたしたちの教会に注がれる神のまなざしを微塵も疑わずに祈ることで、証ししたいと思います。イエスの働きを微塵も疑わない人々に、神のみわざは実を結びます。



年間第 17 主日 (マタイ 13:44-52)

天の国のことを学んだ学者

「天の国は次のようにたとえられる。」年間の主日もおよそ半分を過ぎました。イエスは天の国を三通りにたとえて説明なさいました。畑に隠された宝、商人が探しまわる高価な真珠、網にかかった魚から良いものを選び分ける。この三通りのたとえはさまざまなことを連想させます。一人ひとりにじっくり当てはまる受けとめ方を見いだしましょう。

転勤してきて、鉄道に関係する違反で二度警察のお世話になりました。北松中央病院手前の高架を間違って右折した時と、ナフコ前の踏切一時停止を怠った時です。ナフコ前の違反は9千円と2点減点です。

五島という、線路のない土地に6年も住んで浦島太郎状態になっている司祭を、なぜ呼び止めるのでしょうか。それとスータンを着ている時は遠慮してほしいです。9千円は痛いので、「必要経費」と言い張って教会の通帳から支払おうと思っています。お父さんウソだよ。

さて今週のたとえに戻りますが、三つのたとえは広がりを感じさせるたとえだと思います。ただ単に、埋もれている宝、良い真珠、網でとらえた魚だけではなさそうです。大地と湖、そしてそこでやり取りされる品物で世界全体を表していると考えられます。「天の国」を学ぶ材料は、この世界のあらゆる場所にあるということです。

ほかにも、たとえば三つの暮らし方をしている人でもあります。初めの人、畑は耕すが、畑の所有者ではない人です。畑の所有者であれば、畑を買い取ったりはしません。この人は小作人で、人に使われて一生を終えるはずだったのに宝物を探し当てたのです。商人はみずから生計を立てる人で、取引の中で高価な真珠を探し当てる力を発揮した人です。網にかかった魚をより分ける人たちは、平凡な作業を繰り返していても、良いものを見逃さない人たちと言えるでしょう。ここでは「天の国」について、あらゆる人に学ぶ機会が与えられるのだと分かります。

もともと「天の国」は隠された宝であり、掘り当てたなら、あらゆる努力を払って手に入れる価値があります。「天の国」は価値を知っている人だけが見つける宝であり、価値の分からない人には「猫に小判」なのだから、「天の国」の価値を見抜く力が必要になってきます。

また「天の国」は区別が必要な宝なので、見かけや、目の前だけの楽しみなどに惑わされず、正しく見分けなければなりません。ニラは食べることができますが、ニラとよく似たスイセンの葉は食べると食中毒を起こします。正しく見分けることができなければ命にかかわるのです。

イエスが示した三つのたとえは、「畑に隠された宝」「高価な真珠」「より分けられた魚」というだけではなく、広がりを持っていると思います。ここまでいくつかの取り上げ方をしましたが、皆さんが受け入れやすい取り上げ方は見つかったでしょうか。

さてわたしはもっと大胆に、「天の国につながる宝」を一つ示したいと思います。それは「祈り」です。祈りのいくつかの特徴が、今週の

「天の国」のたとえに表現されていると思います。

まず祈りは「掘り下げていくとそのすばらしさが分かる宝」です。毎日祈りを唱えていても、祈りの言葉の持つ意味をあらためて考えることは少ないかもしれません。アヴィラの聖テレジアは、「主の祈り」をテーマにして一冊の本を残しました。わたしもこの聖人の残した本を通して、「主の祈り」という畑に隠された宝を掘り当てました。

また祈りは、持ち物すべてと交換しても惜しくない「高価な真珠」です。ベトナム人のトゥアン枢機卿を紹介します。彼は 25 歳で司祭に叙階され、39 歳ですでに司教に選ばれ、47 歳で大司教になりましたが、ベトナム政府は彼を危険人物と決めつけます。不当逮捕され、13 年間獄中生活を強いられました。

すべてのものを没収されましたが、彼はパンとぶどう酒の差し入れだけでミサをささげ、祈りから受けた照らしで獄中から面会人に小さなメモを渡し、教区民を導く言葉を与え続けたのでした。

トゥアン枢機卿はすべてを失いましたが、祈りからすべてを手に入れたのでした。すべてを失ってもすべてを得ることができる「祈り」。持ち物すべてと交換しても惜しくないものが他に考えられるのでしょうか。

さらに祈りは「良いものと悪いものを選び分ける篩（ふるい）」のようなものです。福者に上げられたユスト高山右近は、難しい決断をしなければならぬとき必ず祈って答えを尋ね求めました。ある時右近の上司である荒木村重は天下人織田信長に謀反を企てます。

右近はどちらかに忠誠を誓わなければなりません。彼は祈って、「より上位のかたに仕える」決断をしました。最後は、この世を支配する天下人より上位におられる天の父に仕える道を歩んだのでした。

このように、「祈り」は今週朗読されたイエスの三通りのたとえをうまく表現していると思います。もっと言うと、長崎教区民がこれから畑に隠された宝を見いだし、高価な真珠を手に入れ、良いものと悪いものを区別できるようになるためには、徹底して「祈り」を鍛え上げることが必要だと、心底思っています。

子供の時代、わたしたちは祈祷書のいくつかの祈りを暗記していました。ロザリオに続けて唱える「元后あわれみ深き御母」などは、だれもが暗記していたはずです。今の子供たちに祈祷書なしで唱えてごらんと言ってもまず言えません。今と昔では鍛えられかたが全然違うのです。

わたしは「祈りの道場」という場を設けて、数日間缶詰めになって祈りを覚える道場を開きたいと思うことがあります。道場を去る頃には、朝晩の祈りやロザリオ、十字架の道行きなどの先唱を率先してできる。そんな弟子を長崎教区に送り出したい。わたしのこの十年來の夢です。

わたしはすでに「天の国の幸い」を予感できるだけの宝を手に入れているのでしょうか。「天の国のことを学んだ学者」でしょうか。頭でっかちの学者でなく、畑に隠された宝を語れる学者が、田平教会に、長崎教区に、現れてほしいのです。「天の国のことを学んだ学者」がいれば、あちこちで人々に天の国のすばらしさが語られることでしょう。



主の変容 (マタイ 17:1-9)

モーセとエリヤとイエスが語り合っている

暑さもピークを迎えているこの時期に、「主の変容」の祝日を迎えるのは、厳しい夏を乗り越えるための神さまからのプレゼントのように思えます。気力も萎えてしまうような場面をどのように乗り越えたらいいのか、学びを得ることにしましょう。

近況報告です。先週の日曜日、所用で二番ミサ後にすぐ出ましたが、帰りは夜中でした。あまりの眠さに佐々のインターを降りて、いったん左折してコンビニに入り、栄養ドリンクを買って飲みました。

その後道路に復帰し、十字路を江迎方面にエレナに沿って左折しました。黄色の信号を構わず左折した途端、対向車線にパトカーが見えました。ビックリして、ドリンクを飲まなくても済むくらい目が覚めました。「これで免停になったか」と肝を冷やしました。しかしパトカーはわたしには目もくれず、左折して佐々の町中に消えていきました。少しは涼しく感じたのでしょうか。

暑いので、涼しくなるような話を考えてみました。「モーセとエリヤが現れ、イエスと語り合っていた。」(17・3) いったい何を語り合っていたのでしょうか。ルカ福音書による並行箇所を読み比べると、「二人は栄光に包まれて現れ、イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について話していた」(ルカ 9・31) と説明されていますから、十字架上で成し遂げられる救いのわざについて語っていたと思われます。

さらに、今週の朗読箇所「彼らが顔を上げて見ると、イエスのほかにはだれもいなかった」(17・8) とあります。ですから、モーセが語ったこと、エリヤが語ったことを踏まえた上でも、イエスが語られた内容が最も優れていた。イエスの語った内容こそ「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け」(17・5) という雲の中から聞こえた御父の声にふさわしい内容なのだと思います。

すると、いよいよイエスが何を語られたのかが大事になります。こんなことを考えてみました。モーセは、モーセ五書とか十戒とか、掟と法に関わる人物です。ですから、「人間の救い」について、「掟と法に従って裁くべきです」とイエスに進言したということはありません。モーセは、まだイエスが示す愛とゆるしを見ていないからです。

次にエリヤは、聖書の中では「バアル神の預言者と対決し、偽りの預言者すべてを剣にかけて殺した神の預言者」「炎の車に乗って神のもとへ運ばれた預言者」そういうイメージです。つまりエリヤが正しい人と不正な人や邪悪な人の間を裁くとすれば、「剣をもって正邪を裁くべきです」とイエスに進言するということはありません。エリヤもまた、イエスが示す愛とゆるしを見ていないからです。

そんな中でイエスは、ご自身がどのようにして人間を裁き、救われるかを説明しておられたのではないのでしょうか。つまりイエスは、「溢れるほどの愛、これ以上ないほどのゆるし」をもって人間を裁き、救わ

れるのです。モーセも、エリヤも、イエスの計画の前に身をかがめ、残っていたのはイエスのほかにはだれもいなかったのでしょう。

裁きの座に上がる人を想像してみましょう。表に立つ人たちがいます。政治や教育、文化や科学、宗教、そういった場所で人の前に立つ人たちはです。こうした人々が裁かれるとき、モーセは法に従って裁くでしょう。エリヤは彼らの行動に裏表がないか、表では正しい道を説き、裏では悪に手を染めていないか、剣をもって見分けるでしょう。イエスは、彼らの心に語り掛けて、任せられている務めを誠実に果たすよう辛抱強く導き、その後に裁くでしょう。

表には立ちませんが、人々から視線を浴びる人たちもいるでしょう。イエスの時代であれば徴税人や娼婦や、金持ちなどです。事情は様々ですが、モーセもエリヤも、これらの人々を罪に定めることができるでしょう。ひょっとしたら、この人たちを救うのは難しいと判決を下すかもしれません。しかしイエスは、モーセもエリヤも示すことのできなかった愛と赦しで、これらの人々に救いの道を示すのです。

「この人には責任がある。」裁きの座に就く人は、責任を迫及すればどんな人間も責任を逃れられないでしょう。父親としての責任、母親としての責任、社会人として、学生として、だれもが何らかの責任を任せられていて、残念ながら責任を果たせなかった場面があるかもしれません。

法に従って、剣にかけて過ちが明らかであっても、しかしイエスは最後にわたしたちを救うために裁きの座に就いておられます。ぞっとするような過ちの数々、並べられた訴えの数々。本当は救われないのかもしれませんが、ですがそこにイエスがおられるとき、「あなたがたの罪はゆるされた」「安心しなさい」という言葉をかけてもらえるのです。

「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け」(17・5)。ただ一人残っているのが法に従って裁くモーセだったらどうでしょう。剣にかけて正邪を裁くエリヤだったらどうなっていたでしょう。しかし父なる神は、わたしたちに最後に示されたのはイエス・キリストだったのです。

これは何を意味しているのでしょうか。わたしたちに「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け」と言っているのは明らかです。法に基づいて裁くこともできますし、正義の剣にかけることも可能でしょう。しかしわたしたちが会おう人に示すべきなのは、イエス・キリストがわたしたちに示された「愛とゆるし」なのです。

もし、雲の中で現れた三人が、「中田神父は法に従って有罪です」「中田神父は裏では悪を行っているので剣にかけましょう」という相談をしているとしたら、きっとわたしはひとたまりもありません。けれどもそこに、イエス・キリストがおられるので、わたしは憐れみを受ける可能性があります。そう思って、今回は雲の中に現れたお三方を思い描いてみました。



年間第 19 主日 (マタイ 14:22-33)

安心しなさい。わたしだ

今週の福音朗読は、「湖の上を歩く」というイエスの超人的なしぐさが取り上げられています。物語の中には、イエスが湖の上を歩くこと以上に大切なことが含まれています。そうでなければ、イエスが湖の上を歩く超人である、ただそれだけの物語です。イエスがもっと大切なこととしてわたしたちに示す教えを見落とさないようにしましょう。

近況報告です。8月2日のナイターソフトで調子に乗りすぎて手首を痛めてしまいました。ヒットを打ったのですが、それをどうしても二塁打にしたいくて、無理やり二塁まで走ったわけです。

一塁コーチャーの「えー？二塁に行くわけ？」という声が聞こえる中、滑り込みの仕方也不知道に思い切り地面に手をついて滑り、左手首をくじいてしまいました。手の皮もすりむき、手のひらに血がにじむほどでした。

試合中はそこまで痛みはなかったのですが、次の日の朝ミサをささげていると、左手でパンと杯の器を持ち上げることができません。聖体拝領のあいだも痛いのがまんして器を持ち、あやうく聖体の入ったチボリウムを落としそうになりました。

何も持てなかったわけではありません。司祭が拝領する大きなご聖体は持つことができましたが、その聖体を載せるパテナというお皿が重たくて持てません。100gとか200gとか、たかが知れた重さなのにです。

ミサ後、どれくらいまでなら持つことができるかお札で試してみました。1万円は持つことができました。10万円も大丈夫でした。しかし50万円になると重く感じ、100万円は持ち上げられませんでした。

およそ二週間、日常生活に支障をきたしました。これが全治二週間のけがかと、初めて体験しました。今も薄皮をめくるようにしか回復しません。重い物が持てないと嘆く人たちの気持ちがよく分かりました。

何より、わたしがけがをするとどれだけの人に迷惑をかけるか分かりました。ナイターソフトもほどほどにプレーしようと思います。でも本番になったらどうなるかは分かりません。

福音朗読に戻しましょう。場面を整理すると次のようになります。まずイエスは弟子たちを強いて舟に寄せ、向こう岸へ先に行かせました。弟子たちの乗った舟は逆風のため波に悩まされはじめます。そこへイエスが湖の上を歩いて弟子たちのところに行かれました。ここからが大事だと思うのですが、イエスと、ペトロに手を伸ばして捕らえられたペトロとが舟に乗り込むと、風は静まったということです。

始めと終わりだけをつなぐとこうなります。「逆風のため波に悩まされていた弟子たちは、イエスが舟に乗り込むと風が静まったのを見た。」あとのことは物語を補強しているのです。イエスが水の上を歩いて弟子たちのところに行きますが、復活したイエスは弟子たちが戸を閉め、鍵をかけていた家の中に入って来られました。ですからイエスをことさら

超能力者と見る必要はありません。イエスは神の子だからです。

ペトロは「主よ、あなたでしたら、わたしに命令して、水の上を歩いてそちらに行かせてください」（14・28）と言ったけれども強い風に気がついて怖くなり、沈みかけたので、「主よ、助けてください」（14・30）と叫びました。わたしたちも決めたことを実行しようとして、怖気づくことがあります。湖の上でのペトロの心境が語られているのです。

この物語で最も大切だと思っていることは、イエスが恐れに捕らえられている弟子たちに「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない」（14・27）と呼びかけている部分です。人が恐れに捕らえられ、パニックになっている。その時イエスは近づいて「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない」と声をかけ、恐れを取り除いてくださるのです。

だれもが、恐れに捕らえられ、パニックになることがあります。日曜日9時のミサでは、洗礼式が予定されていますが、命がこの世に誕生するその瞬間まで、心配でたまらないという経験をしたかもしれません。生まれてからも、この子が元気に育ってくれるだろうかと、心配は絶えないかもしれません。

わたしはこう思います。イエスはこの子に洗礼の機会を授けてくださいました。神が親子に近づいてきてくださり、「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない」と声をかけてくださっているのです。「この子が元気に育つように、わたしは人生の初めから生涯にわたって、この子に恵みとなりましょう。」イエスはそのように呼びかけているのです。

福音朗読の湖の上での出来事を、わたしはこう考えます。人間的にはすぐに助けに行くことのできない場所、助けを求めても、すぐには駆け寄ることのできない状態です。そんな状況にあっても、イエスはすぐに駆け寄ってくださり、わたしたちを救い出してくくださるのです。

わたしたちが神の恵みにあずかろうと教会に来るのは、恵みを期待しているだけではなく、人々に対する証でもあります。人間的には、すぐに助けに行くことのできない場所、助けを求めても、すぐには駆け寄ることのできない状態にあっても神はわたしを助けてくださる。教会に集うわたしたちは、そのことを人々の前で宣言しているのです。

イエスは、沈みかけそうになっているわたしに手を差し伸べ、救い出してくださいます。神さまの差し出す手が、短くて届かないということがあのでしょうか。決してあり得ません。わたしたちはそのことを少しも疑いませんと、あらためて表明しましょう。神は遅れることなくわたしたちに手を差し伸べ、恵みを与えてくださいます。



聖母の被昇天 (ルカ 1:39-56)

憐れみを忘れない神の働き

聖母の被昇天の祝日を迎えました。マリアを祝い、マリアのもとにとどまるということは、どんな意味合いがあるのでしょうか。与えられた朗読を通して考えてみましょう。

朗読の後半、46節から56節にかけては「マリアの賛歌」と呼ばれる個所です。マリアが言葉に表した世界が、わたしたちにどのようなつながるのかが分かれば、わたしたちがここにとどまる意味も理解できるようになり、8月15日にミサに集う意義と価値を人々に語って聞かせることもできるでしょう。

「マリアの賛歌」はマリアの個人的な体験から始まります。「身分の低い、この主のはしためにも目を留めてくださった」(1・48)。それはマリアの個人的な体験でしたが、そこから神の働き方を見たのです。旧約時代、人々が神の声に耳を傾けない中、神に忠実なノアとその家族に目を留め、洪水が地上を覆って、ノアの家族だけが救われました。

アブラハムはカルデアのウルから出た小さな部族でした。エジプトという大国にあって虐げられていたイスラエルの民を救い出し、エッサイの子供たちの中で末の弟に目を留め、イスラエルの王となさいました。人々が目を留めるものには目もくれず、人々から低く見られていた部分に目を留めるお方だと理解したのです。

マリアは、自分の個人的な過去の体験から神のなさり方を知ります。過去から現在に至るまで、神は思い上がる人、権力をふるう人、富める人ではなく、身分の低い人、飢えた人に近づいてくださるのです。そしてこの小さな人々に寄り添う態度は、未来にも変わらない。これがマリアの理解した神の働き方でした。

わたしたちも、今こうしてマリアの賛歌を聞きながら、神のなさり方は過去現在未来、変わらないということを知りました。わたしたちはなぜここに集まっているのでしょうか。それは、マリアが声を上げた神のなさり方を、わたしたちもいっしょになって讃えるためなのです。

わたしたちは見物人でしょうか。マリアの賛歌を聞きながら、なるほど神のなさり方はそうなのかと理解し、それでもなおマリアのそばを通り過ぎるのでしょうか。そうであってははいけません。わたしたちがマリアを祝い、マリアのそばにとどまるのは、マリアが体験し、理解したことを現代に向かって証言するためです。

神のなさり方は今も変わらない。世の人々がほめたたえ、あこがれる人々の脇を神は通り過ぎ、低いとされている者、取るに足らないとされている存在のもとへやってくる。わたしたちは神のこのような働き方を讃えますと、ミサの中で表明するのです。

これをひとことで言うなら、「憐れみを忘れない神の働き」と言えるでしょう。わたしたちはこの世がほめたたえる生き方に立たず、「憐れみを忘れない神の働き」を讃える「新しい神の民」なのです。



年間第 20 主日 (マタイ 15:21-28)

「しかし」を「そこで」に変える信仰

「しかし、イエスは何もお答えにならなかった。」(15・23) 異邦人であるカナンの女の切なる願いに、イエスは返事をしませんでした。イエスはカナンの女の覚悟を知りたかったのだと思います。今週わたしたちも、イエスに対する覚悟を問われていると思います。

田平教会に韓国の巡礼団が頻繁にやってきてミサをして帰って行かれることは皆さんもよく知っておられるかと思います。毎月5件とか10件とか、多いときはそれ以上、韓国巡礼団のミサが入ります。わたしが手数料を取れば、5年もあれば結構な金持ちになれるくらいおいでになっています。

巡礼ミサのほかにも、田平教会に問い合わせが多いのは撮影許可です。観光パンフレットのためとか、テレビ番組で紹介するとか、いろいろあります。その中に、「鉄川与助が手掛けた教会を大学の卒業論文に選んで研究しているので、撮影をお願いしたい」という依頼が混じっておりました。

はっきり記憶していませんが、いったんは「外観の撮影を許可します」と返事をしたのだと思います。ところがこの卒業論文に取り組んでいる学生から、内部の撮影がどうしても必要であると、切実な依頼文を添えて再度依頼が届いていたのです。

「自分は東北大学工学部の学生で、鉄川与助の手掛けた建築物にあしらわれている植物模様について研究しています。外観のみ撮影を許可しますという返事でしたが、鉄川与助が聖堂内あちこちにあらった植物について調べるためには、どうしても内部の撮影に協力いただきたいのです。どうかよろしく願いいたします。」

わたしは、それでも再度「内部の撮影は、これまで一度も許可しておりませんので」とお断りすることもできたと思います。けれども撮影依頼の文章の最後に、「もし撮影がかないませんなら、内部のスケッチを描かせてください」と書かれていまして、この学生の真剣な気持ちがよく伝わりました。

わたしたちにも恩恵をもたらしてくれる研究を、東北大学の研究生が取り組んでいる。スケッチだけでもさせてほしいという、その熱意に動かされまして、「主任司祭の立ち合いのもと、内部の撮影を許可します」と返事をしました。研究の成果が上がればいいなと思っております。

さて、説教を聞いている皆さんはうすうす気づいておられるかと思いますが、今話した出来事は、カナンの女の信仰の物語にうまく重なる出来事だといえます。鉄川与助の建築物の研究、それも卒業論文であるとは言え、わたしが断ればほかの教会にも依頼をかけているわけですから、それで済むかもしれません。

ですがこの学生は粘り強く交渉し、願いをかなえてもらう理由を見つけたのです。異邦人であるカナンの女性も、イエスから願いをかなえ

てもらふ理由を見つけ出しました。「主よ、ごもつともです。しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです。」（15・27）

わたしは、この一連の流れをこのようにまとめてみました。異邦人のカナンの女性は娘を助きたい一心で願います。ただすべての願いが神の望みにかなうわけではないのです。そのことを十分わきまえたうえで、再度女性がイエスに願うと、イエスは答えてくださいました。「しかし」と繰り返した女性の願いは、いつしか神の望みにかなう願いへと変えられていき、「そこで」イエスは答えてくださったのです。

「しかし」が、「そこで」に変えられていく。聖書の中でイエスにもこの場面を見出すことができます。イエスは最後の時を迎えるにあたり、苦しみ悶えながら御父にこう言いました。「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに。」（マタイ 26・39）

「過ぎ去らせてください」とは言ったものの、「しかし」もっと大切なことに立ち返ってもう一度御父に語りかけます。イエスにも、「しかし」から「そこで」に変えられる瞬間があったわけです。

わたしたちの信仰も同じことです。本来信仰は、「わたしはあなたを信じます」という生き方のはずなのに、いつの間にか一步も引けない願いばかりになっていることがあります。一方的に願うばかりではいつまでたっても願いは聞き入れられません。

「しかし」といったん立ち止まるならば、声を上げる人の中で何かが変わっていき、神は「そこで」答えてくださるのです。「しかし」が、「そこで」に変えられていく。異邦人のカナンの女性がわたしたちに教えていることです。

信仰にかかわる事柄で「こうしてください」「こう思います」と断言することも確かにあります。そこに、「しかし、御旨が行われますように」と添えることを忘れないようにしたいものです。

いつでも、「しかし」と一步引くことのできる信仰。「そこで」ようやく御父は望みのままに働くことができるようになり、神の国がすべての国、すべての民に広がっていきます。



年間第 21 主日 (マタイ 16:13-20)

わたしはあなたに天の国の鍵を授ける

「わたしはあなたに天の国の鍵を授ける。」(16・19) これまでよく見えてなかった部分に照らしを感じましたので、ペトロに託されたこの「天の国の鍵」について考えてみたいと思います。

先週、前半と後半でお休みをいただきましたが、前半は平戸地区の司祭 5 人で、大分と熊本を巡ってきました。大分では浜口司教さまを表敬訪問し食事をご一緒させていただきました。熊本では長崎教区からの司祭 2 人に会って食事をして元気づけてきました。

平戸地区に 8 人の司祭がおります。地区長神父さまから「夏休み中に一緒に出かけませんか」と誘われて、日程の折り合いがついたのが 5 人でした。出かけてみて分かったのですが、わたし以外は簡単に言う「温泉好きの神父さま」でした。

初日、黒川温泉の何とかと言う露天風呂に行き、2 日目は阿蘇の何とか温泉に行きました。帰りの 3 日も阿蘇の温泉に行きかけたようですが、2 つの教会で葬式が入り、朝 8 時からまっすぐ帰りました。わたしは温泉に入っても構いませんが、温泉に入らなければ悔いが残るという人間ではないので、お付き合いで参加したということです。

ただ、温泉の名前とお土産で聞き捨てならない物があると知りました。「はげの湯温泉」という温泉があって、その旅館のお土産で「せんべい」と「ソーダ」が有名なのだそうです。名前が傑作なのです。「はげませんべい」と「はげソーダ」と言うのです。もう禿げているわたしは、大変興味深いお土産だと思いました。今度先輩方と旅行した時は、はげの湯温泉旅館に行ってみたいと思います。

福音朗読に戻りましょう。イエスはペトロに「わたしはあなたに天の国の鍵を授ける」とおっしゃいました。鍵は大切なものです。最近わたしにとっての鍵は、「閉めるためのもの」ではなく、「開くためのもの」という思いが強くなってきています。

旅行に出かけて、旅先の宿で鍵を預かった時、その鍵は開くためのもののはずです。最近の部屋は、オートロックなので、勝手に閉まります。部屋に鍵を置いたままロックがかかり、フロントに迷惑をかける経験をした人もこの中にはいるでしょう。

また、スマートフォンという種類の携帯電話をお持ちの方は、暗証番号や指紋認証で鍵を開けて使用するのが体験しているでしょう。基本的にスマートフォンは、他人に勝手に使われたりしないようにロックがかかっているのです。ここでも暗号や指紋は開くため、使用を可能にするために使います。

ペトロに託された「開くための鍵」とは何でしょうか。「閉じるための鍵」ではなく、「開くための鍵」。わたしは思い切って「それはイエス・キリストである」と考えてみました。イエスこそ、地上で罪につながれていた多くの人を解き放ち、復活して天の国の門を開いてくださ

ったからです。

ほかに、救いから遠ざけられているとされていた異邦人にも扉を開き、心を頑なにする律法学者たちにさえ、警告の言葉をもって解放の道を示されたのです。「あなたたち律法の専門家は不幸だ。知識の鍵を取り上げ、自分が入らないばかりか、入ろうとする人々をも妨げてきたからだ。」（ルカ 11・52）。このイエス・キリストをペトロは「天の国の鍵」として預かったのではないのでしょうか。

加えて、鍵を預かる人はそれにふさわしい責任を求められます。開け閉めして中にあるものを出し入れしたり管理します。ペトロにも責任が伴います。イエス・キリストという鍵は、すべての人に天の国を開く鍵ですが、それはこの世が望むような権力と結びつく鍵ではありません。十字架に死に、復活して扉を開く鍵です。

当然この鍵を預かるペトロも、権力が天の国を開く鍵なのではなく、十字架上に死に、神によって復活させられる道が天の国を開く鍵であると理解しなければなりません。イエスはペトロが理解に達することができると信じて、天の国の鍵を授けたのです。今は理解できないとしても、ペトロの生涯全体をかけて天の国の鍵がどのようなものであるかを理解し、管理者となっていくます。

天の国の鍵を授けられたペトロは、これから天の国を開く鍵となる生き方を歩みます。それはイエスに倣う生き方です。12使徒の中でいちばん素朴で真っ直ぐなペトロが、教会の先頭に立って、教会が歩いていくべき道、十字架を背負って、復活を信じて生きる道を歩みます。

わたしたちの未来も、ここに描かれています。天の国の鍵を授けられたペトロと一つになって、この世を生きる必要があります。同じ生き方を人々に示すことで、わたしたちの知る天の国の鍵はこのような生き方ですと、証をします。

この世を謳歌するような生き方ではないかもしれませんが、けれども、天の国の鍵を見失う生き方よりも優れています。わたしたちが自分の生き方で天の国の鍵を保って生きることが大事だと知らせるなら、すべての人に対してわたしたちが鍵を握っている人間となれるのではないのでしょうか。



年間第 22 主日 (マタイ 16:21-27)

崖っぷちにいる人にも駆け寄るイエス

今週年間第 22 主日はフィリポ・カイサリア地方でイエスへの信仰を表明したペトロに、これからご自分が歩む道を示します。人間の理解を超える道で、ペトロも戸惑います。イエスに従う力を願い求めましょう。

ずいぶん前の話です。浦上教会の助任司祭だったときに侍者と聖歌隊の子供たちを遠足に連れて行けるように大型の免許を取りに行きなさいと主任司祭に言われました。はい分かりましたと言って、当時大型自動車の免許が取れるいちばん近くの学校だった「浦上自動車学校」に通い始めました。

名前は忘れてしまいましたが、小柄な教官がわたしを指導してくださいました。車の構造で、決定的な違いを学びました。それは、タイヤの位置です。一般の車と違い、トラックやバスは、簡単に言うとお尻の下にタイヤがあるのです。

タイヤの位置が違うと、どんなことが起こると思いますか？運転をしてみると分かりますが、例えば段差がある場所で車を段差のある場所ギリギリに頭から停めるとしましょう。一般の車ですと、タイヤは運転手よりもかなり先にあるので、ギリギリまで停めるのはそう難しくありません。

しかしトラックでは同じようにはいきません。自動車学校の教官が、「車止めに向かってトラックを寄せなさい」と指示しました。これくらいかなと思うところまで寄せてみましたが、「ダメだ。もっと寄せなさい」と言うのです。「先生。もう無理です。」わたしがこう言うと先生は「降りて確認してごらん」と言います。降りて見てみると、まだ1 m くらい余裕があったのです。

教官が言いました。「タイヤはお尻の下にあるのだから、『崖から落ちた』と思うくらい前に出して、ようやく一般の車と同じくらいなんだよ。よく覚えておきなさい。」一般の車とトラックでは、こんなに違うものなのだなとつくづく思ったのでした。

普通車を、十何年も運転していても、トラックなどの大型自動車の感覚は教官に教えてもらわないと理解できませんでした。車止めにすら、前輪をぴったり寄せることができませんでした。わたしの感覚で「これくらいだろう」「これ以上は無理だろう」と思っても、正確な場所までかなりの開きがありました。似たような体験を、ほかの場面で味わったことのある人も、皆さんの中にはおられるかもしれません。

イエスがこれから進もうとする道についても、イエスと弟子たちとでは理解にかなりの開きがありました。イエスが踏み込もうとされる場所を指し示しても、ペトロをはじめとする弟子たちは、十分理解できなかったのです。今週の朗読個所の直前でペトロが「あなたはメシア、生ける神の子です」(マタイ 16・16)と信仰を表明したイエスの踏み込もうとされる場所を、「多分ここまでだろう」「まさかここまでなさるは

ずがない」そういう思い込みがあったのだと思います。

しかしイエスははっきりと、ご自分が進まれる道の陰しさを知っておられました。「イエスは、御自分が必ずエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている、と弟子たちに打ち明け始められた。」(16・21)

人間の救いのために、多くの苦しみを受け、殺され、三日目に復活する。人の救いはここまで働けば可能だろうとペトロは思いました。想像を超えたとき、「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません。」(16・22)と言いたくなるのです。

しかし実際には、想像を絶するような働きがなければ、人を救うことはできないのでした。手の指の働きで人間を救うことも可能なお方が、血まみれになった人間を救われるのです。あえて危険を冒さなくてもすべてが可能なお方が、いのちを投げ出して人間を救うのです。

これが、イエスの進まれる道でした。そのイエスが、従おうとする人々にこう呼びかけるのです。「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを得る。」(16・24-25)

この十字架が身につける飾りとかペイントとか、その程度でないことは明らかです。自分の命を救うとは、この人生で手に入れた一切のものを手放してでも、失ってはいけない大切なもののなのです。

「ここまで努力した」「もうこれ以上は無理だ」人がそう思ってイエスに答えを仰ぐと、イエスはこういうでしょう。「あなたがどこまで近づくことができているか、見に来てごらん。」そして見に行ってみると、目標と程遠いところで立ち止まっていることに気づくでしょう。

だから、イエスのあとをついていく必要があるのです。血まみれになって人間を救おうとされるイエスの前に立ちふさがって、自分の考えのほうで合理的で優れているなどと主張することは、あってはならないのです。わたしたちは常に、「イエスについて来たい者」であって、「イエスの先に立つ者」を自称してはいけません。わたしごときが考える答えなど、神が導こうとする答えに遠く及ばないのですから。

罪におぼれ、悪に手を染め、救いから遠ざかって崖っぷちに立っている人がいる。安全を考えて、ロープを投げてつかまれと言うこともできるでしょう。イエスはしかし、その崖のふちまで駆け寄って救い出すのです。罪に沈みかけそうになっている人に救命浮輪を投げるのではなく、みずから罪の中に飛び込んで救ってくださるのです。

十字架を背負うとは、そのイエスに従うしるしです。安全第一でイエスに従っているのではなく、場合によっては自分の十字架に貼り付けになって死ぬ。それを覚悟でイエスについていくのです。各自、十字架を背負って、イエスを信じる者ですと人々に証明します。



年間第 23 主日 (マタイ 18:15-20)

忠告するのは神の光のもとに置くため

わたしの車は ETC が取り付けてあります。通常 ETC レーンで降りるのですが、考え事をして佐々から乗って佐世保中央を通過してしまい、次の大塔でも動揺していたのか、ETC レーンではなく一般レーンに入り、そのまま通り過ぎようとしたのです。

すると係員が叫びながら飛んできました。「お金払って～。お客さんお金～」係員の目には、一般レーンを不正通行しようとしている車に映ったのだと思います。ぼーっとしていたとは言え、わたしがそんな間違いをしたのがちょっとショックでした。監視カメラにもしっかり映ったことでしょう。

今週年間第 23 主日は「兄弟の忠告」について取り上げられています。誰かに忠告するのは難しいものです。上手な人でも難しいのですから、下手な人が忠告すれば、忠告したことがかえって分裂を引き起こしたり争いのもととなったりします。

ちなみに忠告が下手な部類の人たちがいます。ここに集まっている人の中では、主任司祭がいちばん下手だと思います。なぜかと言うと、主任司祭はいきなり祭壇の上から忠告したりするからです。

イエスは手順を踏んで忠告しなさいと言われました。「行って二人だけのところで忠告」「ほかに一人か二人、一緒に連れて行き、忠告」「それでも聞き入れなければ、教会に」教会の場を借りて忠告するのは最後の手段と考えるべきですが、主任司祭はいきなりそれを用いる危険があります。だから下手ということになります。

むしろ、問題を抱えている人に、二人だけのところで忠告したり、二人または三人の証人の口によって忠告したりできる皆さんのほうが、忠告は上手なのだと思います。主任司祭の忠告は「下手な人が忠告している」と思いながら聞いてください。

この前、今月の木曜会が開かれまして、お父さんたちと時間を過ごしておりました。ある教会行事にまつわることでわたしは改善を求めたくてある人に忠告しようと身構えて行きましたが、結局言わずじまいでした。イエスが示す原則に外れていたからです。

みんなが集まっている場で忠告すれば、「二人だけのところで忠告」に外れますし、自分一人で思い悩んで忠告しようとしていたので「一人または二人を連れて」という原則にも外れます。結局その場では言えませんでした。もし気付く人がいれば、主任司祭のせっかくの好意を台無しにされると主任司祭も気分が悪いよと、それだけヒントを言っておきたいと思います。司祭の下手な忠告でした。

忠告をするのは皆さんのほうが上手なことはすでに言いましたが、さらにその忠告を効果的なものとするために、イエスは次の言葉を付け加えました。「はっきり言うておくが、どんな願い事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心を一つにして求めるなら、わたしの天の父はそ

れをかなえてくださる。」（18・19）

「わたしたちの忠告に耳を傾けてほしい。」言葉を選び、聞き入れてくれそうな場所や環境を整えて忠告しますが、本当に聞き入れてくれるかどうか、相手の心まではわかりません。そんな時、イエスの言葉は力強いと思います。心をつにして祈り、聞き入れてくれるよう願うならば、その願いをかなえてくださるのです。

ここでも司祭と信徒の皆さんとの能力の差が現れます。司祭は家族もいないので、いつも一人で祈るしかありませんが、信徒の皆さんはより容易に誰かと一緒に心をつにして祈ることができます。家族と祈るとか、パートナーと祈るとか、修道院でも共同体の姉妹とともに祈ることができます。ここでも司祭よりお集りの皆さんのほうが忠告に必要な恵みを神にかなえていただけるのです。

忠告を何度か試みる中で、最後の砦に教会になっているのはなぜでしょうか。司祭の忠告が優れているからでしょうか。先ほどから申し上げている通り、司祭の忠告がいちばん下手なのです。そうではなく、教会が忠告の最後の砦になっているのは、教会の忠告は相手の人を神の光のもとにさらす働きがあるからです。

罪を犯した人を神の光のもとにおいて自分の過ちに気づき、悔い改める。そのために教会は最後の手段となっているのです。すると、二人だけのところで忠告する場合も、ほかに一人か二人連れて行って忠告する場合も、神の光のもとに相手を置くよう促すことが最も効果的な忠告なのだと言えるでしょう。

わたしは夢に描いていることがあります。わたしのもとに助任司祭が派遣されたとき、どんな共同生活をしようか、ということです。助任司祭をいただいたなら、初めてほかに一人、心をつにして祈ることができるかもしれません。

ひょっとしたら、助任司祭に忠告することがあるかもしれません。その時、二人だけのところで忠告しようと思います。また、助任司祭が神の光のもとに自分を置くきっかけを与えられるような忠告をしたいと思っています。そんなことを、夢見ることがあるのです。

皆さんは違います。夢見なくても、今すぐにでも、イエスの勧めを取り入れて忠告することができます。忠告の必要な人を神の光のもとに置いて、一人でも多く兄弟を得ることができますように。神に願うことにしましょう。



年間第 24 主日 (マタイ 18:21-35)

この世の損も神との絆には代えられない

年間第 24 主日 A 年の朗読で紹介されたたとえは、この世での損をあえて取ってでも、恵みが働く体験を失うべきではないと教えています。わたしたちの生活を見まわして、神の望みに答えていく具体的な道を考えることにしましょう。

最近司祭館玄関で面白い会話がありました。20 代かなあと思う女性がおいでになって、用件が済んだので帰ろうとしました。玄関は網戸が閉めてあったのですが、女性が網戸ではなくサッシの扉に手をかけてこう言いました。「お閉めしましょうか？」

わたしはとっさにこう答えました。「お構いなく。」ていねいに言ったつもりなのですが、あの場面では「お」を付けずに「閉めましょうか？」で十分だと思いました。20 代の女性にあらためて指摘はしませんでした。わたしには「おしめ」「しましょうか」に聞こえました。

今日は焼罪殉教祭です。この説教を書き終えたのは 14 日 (木) なので、当日どうなっているのか見当もつきませんが、おそらく天気は良くなっていないでしょう。残念ながら焼罪公園でのミサは取りやめになって、田平教会でのミサに変更になっているのでしょうか。あるいはもっと天候が悪化して、田平教会での開催も断念しているのでしょうか。

また 17 日の前後も天気は左右される予定がありました。前日の保育園運動会は、どうにか実施となっているのでしょうか。それから 18 日敬老の日は、甲子園球場に出かける予定です。台風がどこまで移動しているかで、飛行機も影響を受けます。こうしてみると、自然の力には、人間の思惑などひとたまりもないと思い知らされます。

福音朗読に入りましょう。先週の「兄弟の忠告」を念頭に置いて考えると、イエスの「あなたに言うておく。七回どころか七の七十倍までも赦しなさい」(18・22)の意味がより分かりやすくなると思います。

兄弟の忠告に際して、最後まで見捨てないで忠告し、仲間を得ようとする態度が必要でした。今週のたとえでも、主人は僕を最後まで赦して、できれば僕との絆を失いたくないと考えています。イエスが求める赦しの本質がここに現れています。赦しは、最後まで相手との絆を保ち続けようとする天の父の思いの現れなのです。

「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか。七回までですか。」(18・21)「あなたに言うておく。七回どころか七の七十倍までも赦しなさい。」(18・22)

わたしはゆるしの秘跡の場で、「赦しは恵みです。赦す心が備わっているから人を赦すのではなく、赦す力を恵みとしていただいて、人を赦すことができるのです」と話してあげることがあります。赦しが人間の努力とか能力であるなら、ゆるしの秘跡という恵みの場は必要ありません。

そうではなく、人を赦すのは、いつもそこに恵みが働いているので

す。たとえ話に登場する一万タラントン借金している僕は、自分に百デナリオン借金している仲間を赦す力があつたはずですよ。百デナリオンの借金を取り立てないと、明日を迎えられない人ではなかったでしょう。それなのに、仲間に憐れみをかけませんでした。自分が王に憐れみをかけてもらって王の僕であり続けることができたというのに、自分の仲間には仲間であり続けるための憐れみを拒んだのです。赦す能力を持ち合わせていても、そこに恵みが働かなければ、体験できないのです。

赦しが、つねに恵みの働く場であるなら、七回まで赦して恵みの体験を制限してよいでしょうか。「七の七十倍まで」つまり恵みの働く体験を何度でも、制限なく味わうべきではないでしょうか。イエスが赦しに限度を置かなかったのは、恵みが働く体験を制限する必要があるだろうか、そう問いかけたかったのです。

わたしの耳には、小教区内のいろんな人の声が聞こえてきます。腹立たしい話も、赦しがたい話も聞こえてきます。しかし、腹立たしさをこらえて、赦しがたいことも忍耐するとき、そこに恵みが働き、ゆるしの体験ができるのだと思います。

腹立たしいことをしていて自覚がない。赦しがたい振る舞いに気が付かない。はたから見れば哀れな人ですが、そうした人を赦してあげなければ、恵みの体験をみすみす逃すことになります。たとえ話を通してイエスは、天の父がどれだけ損をしても赦しを与え、わたしたちを滅びから救い出そうとなさるのだと教えておられます。人が神との絆を失って滅びるよりも、一万タラントン損して絆を保つことを天の父は選ぶのです。

そうであるなら、わたしたちも田平教会家族という絆を断ち切るよりも、自分が損を取ってその人を赦してあげましょう。この世の損は、だれかを田平教会家族から断ち切る損に比べれば小さいのです。この世の損は、天の父が弁償してくださいます。田平教会家族を切り捨てる損は、弁償できない損なのです。

わたしたちがお手本とするのは、一万タラントンの損を取って、王との絆を保とうとするお方です。この方向に舵を切る力は、恵みによってしか与えられません。神が赦しの恵みをわたしたちに与えてくださり、田平教会家族を一人も失うことのないように、このミサで願うことにしましょう。



年間第 25 主日 (マタイ 20:1-16)

あなたの計る物差しは天の父が与えてくださる

今週の朗読は「ぶどう園の労働者」のたとえで、たとえに登場する主人の考え方にどこまで賛成できるかが問われています。何かが引っかかって、このたとえに登場する主人の考え方に賛成できないわたしたち。どこをどう変えていけば、喜んで賛成できるようになるのでしょうか。

18日敬老の日、甲子園球場に行ってきました。感激しました。この話だけでも30分は語りたいですが、だれも喜ばないので手短に。

まず福岡空港から飛行機で伊丹空港に飛びました。飛行機で大阪に降りてみると、すでにタイガースファンがうろうろしてしまっていて、「大変な場所に来てしまった」とつくづく思いました。周りは敵ばかりという張り詰めた雰囲気の中で球場に向かうバスに乗りました。

球場が近づくときとあら不思議。わたしと同じユニフォームを着た人たちが続々と集結しているではありませんか。これには勇気づけられました。いちばん危険な場所に行って、優勝を勝ち取って来る。並大抵の勇氣ではできないことです。

おかげで甲子園を後にするときも、誰彼問わずカープファンから「ヘーイ！」とハイタッチを求められて、気軽に応じました。若い女の子ですら、おじさんのわたしにハイタッチをしてくるのですから、どれだけ盛り上がったかが想像できるでしょう。阪神ファンの皆様、大変聞き苦しい話になってしまったことをお詫びいたします。

福音朗読に映りましょう。ぶどう園の主人は、時間を変えながら何度も労働者を雇いに出かけています。早くから雇った労働者はきつとやる気に満ちた人たちだったでしょう。

彼らは最終的にぶどう園の主人に不平を言いました。なぜか？わたしの想像ですが、賃金をもらう頃には雇ってもらった恩は忘れ果て、「働いてやったのにどうということだ？」と開き直っているのです。開き直る権利などないはずなのに。

その後も定期的に労働者を雇い入れます。ぶどうの収穫は一刻を争う仕事なのだそうです。ですから最終的には猫の子も借りたいくらいになります。しかしながら広場に残っているのはやる気もあまりない人たちです。

やる気を見せていたら、とっくに雇われていたでしょう。最後の人たちとは、いわば履歴書の段階ではじかれ、面接すら受けさせてもらえず「どうせ俺たちを雇ってくれる人などいない」と投げやりになっている可能性が高いのです。

しかしぶどう園の主人は、この人たちの中に飛び込んで手を差し伸べます。「あなたもかけがえのない人です。わたしはあなたに人としてまともに暮らせるだけの仕事と賃金をあげましょう。」

やる気のあるなしにかかわらず、能力の有無にかかわらず、一人ひとりをかけがえのない人として受け入れる。これがぶどう園の主人が示

した気前の良さでした。

投げやりになっていた人をかけがえのない人として扱ってくれたぶどう園の主人に、最後に雇われたグループの人たちはどう思うでしょうか。ただただ、感謝しか浮かばないのではないのでしょうか。

今日も見捨てられるに違いない。今日もきっと人として扱われない。そう諦めていた人の中に飛び込んで手を差し伸べる。能力のある人だけが価値があり、ほかは価値がない。そうやって差をつける社会に、広場で突っ立っている人の中に飛び込むお方は問いかけるのです。「わたしは誰も拒まない。わたしの声に耳を傾けなさい。」

ある年の叙階式ミサで、司祭に叙階される方を育てた小教区の主任司祭が次のような説教をしました。「司祭がキリストの身分においてささげるミサは、永遠の価値がある。たとえ、司祭に叙階された者が一度しかミサをささげることができず、翌日には亡くなってしまったとしても、その人は完全に司祭職をまっとうしたのである。」言葉はまったく同じではないかもしれませんが、おおよそそのような説教でした。

わたしは、「そうかなあ」と思いながら聞いたのを覚えています。「十何年、司祭職を目指して準備を続けたのに、一日しかミサをささげることができなかったとしたら責任を問われるでしょう。」わたしはそう考えたのです。

きっとわたしも、賃金をもらうために行列に並んでいる一人なのだと思います。しかも、25年このかた司祭として働いて、数えきれないほどミサをささげて、それなのに父なる神の気前の良さを忘れ果て、「働いてやっているんだから報酬をくれ」と列に並んでいる者に違いありません。そして一日しかミサをささげることができなかった司祭を見て、「あの人よりはましだ」と思っている人間。それがわたしのなのだと思います。

どうすれば、最初から初めて最後の者まで気前良くしてくださる神の思いに賛成できると答えることができるのでしょうか。わたしは大切なことを忘れていました。主の祈りは次のように祈っています。「みこころが天に行われるとおりに、地にも行われますように。」

「みこころ」とは、たとえば話のぶどう園の主人が示した「わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ」(20・14)という態度にほかなりません。どうか、みこころが地にも行われますようにと、わたしたちは毎日、もしかしたら日に何度も、願っているのです。

言葉に裏表があってははいけません。わたしたちは祈っているのですから、最後に一時間だけ協力した人に神がねぎらいの言葉をかけるのなら、わたしたちはそれに賛成しますと、答えなければなりません。わたしたちが神の子となるためです。この世が大切にしている仕事の量、仕事の質で計る物差しを横において、わたしたちが計る物差しは、天の父が示した物差しですと、きっぱり言える生き方をしましょう。そのための恵みをミサの中で願いましょう。



年間第 26 主日 (マタイ 21:28-32)

自分に能力があって「後で考え直す」のではない

今週年間第 26 主日の福音朗読「二人の息子」のたとえば、さらっと書かれています。疑問が残ったままです。この疑問に正面から向き合うことが、たとえをよりよく理解する鍵なのではないかと考えました。

月が替わり、9月のことはすべて忘れてしまいました。司祭団ソフトボール大会でわたしと地区長神父様が打線の大ブレーキになったことも、守備に就いているときに浦上教会のK・Y神父様から痛烈な二塁打を浴びたことも、簡単なライトフライを右手、左手、右手とお手玉して落球したことも、すべて忘れしました。

いやなことはすべて置いて帰ってきたのに、なぜかわたしの手元には珍プレー賞の商品があります。守備でお手玉したのが授賞理由だそうです。いらないのでとっとと木曜会に持っていこうと思います。とにかくすべて、忘れしました。

福音朗読に戻りましょう。たとえばの中で父親が二人の息子それぞれにぶどう園に行ってお働きなさいと促します。兄は「いやです」と答えましたが後で考え直して出かけました。この兄は問題ありません。

問題は弟です。同じことを言うと弟は「お父さん、承知しました」と答えたが、出かけなかったのです。では弟が出かけなかったことを、父親はいっさい気にもかけず、問題にもしなかったのでしょうか。

イエスはこのたとえを神の国に入る人になぞらえています。神の国に入るかどうかという重大な問題につながるとすれば、「後で考え直して」取るべき行動を取らなかった人々をいっさい気にもかけず、問題にもしないのでしょうか。

先週の「ぶどう園の労働者」のたとえを踏まえて考えると、むしろイエスは「後で考え直して」行動を取らない人々をいつまでも気にかける方だと思います。先週のぶどう園の主人は、最後まで、広場で何もしないで立っている人をぶどう園に送り込みました。このことを合わせて考えれば、「お父さん、承知しました」と答えたのに出かけなかった息子のうちの弟は、いつまでも気にかかっていると思うのです。

たとえばから読み取れるわけではありませんが、神の国に入る人々を示そうとするたとえの中で、どちらの息子も、父親の望みに応じてほしいと願っているはずですが、先週も話しましたが、ぶどう園は日没になるまでに収穫を終えるために、猫の手も借りたいほどになるのです。

本来ならばぶどう園での作業は、農夫たちに任せて息子たちにはさせたりしないのかもしれませんが、けれども背に腹は代えられず、「悪いけれども、手伝ってくれないか」と声をかけたのではないのでしょうか。

ひょっとしたら「いやです」と答えて後で考え直して出かけた兄は、最後の一時間しか働けなかったかもしれません。そして弟には、収穫も終わろうとしている夕方五時に声をかけ、「お父さん、承知しました」と答えたのにそれでも出かけなかったのかもしれませんが、一時間しか働

かなかったとしても、兄は父親の望みに最終的には応じてくれたのですから、父親は喜んでいるのだと思います。

父親が一日の初めに息子の兄のほうに声をかけて、あとで考え直して兄が最後の一時間働いた。弟は最後の一時間になって声をかけて返事だけは良かったけれども応じなかった。もちろんそこまで書かれてはいませんが、これはわたしたちの人生の縮図なのかもしれません。

神はある人には人生の初めから声をかけて、神の望みに応じてくれるように促します。ある人は人生の最後になって神の呼びかけがあっていると感じます。早くから洗礼を受けて、教会につながっている人と、人生の終わりになってキリスト教を意識する人に当てはめてもよいでしょう。

小さいころから教会に行けと言われていていると、ある人は「いやだ」と感じるかもしれません。それでも後で考え直して、教会とのつながりを優先する人は、神の国から遠くない人々です。「歳を取ったら洗礼受けます」「定年したら教会に行きます」と色よい返事をして、とうとう教会のお世話にならなかった。こうなるとその人たちが神の国に入るのは、ずっと後になるのかもしれません。

いずれにしても、神の国に入る道となってくださったイエスを、ほとんどすべての人は人生のどこかで目にするのです。教会という見える集まりを通して、書物を通して、キリスト者一人ひとりを通して、招きを受けるのです。

わたしたちも弱さがあるので、ある時期は「いやです」と言うかもしれません。けれども後で考え直す。その機会をイエスは与えてくださいます。広場に何度も労働者を雇いに行くぶどう園の主人のように、何度も考え直す機会を与えて、人生全体が最終的に神の望みに答える人生となるように、辛抱強く見守っておられるのです。

「わたしたちはいざとなれば教会に戻ることができる。」もしこのように言う人がいるなら、一つだけ考えてほしいのです。「いざとなった時」は、本当にわたしが用意できるだろうか、ということです。未来を用意するのは人間ではなく、すべてを導いている神です。神が「いざとなった時」を用意してくれないなら、わたしたちが立ち返るつもりにしていた時もやってこないと思うのです。

「道、真理、いのち」であるイエスに、謙虚に従っていく人生を積み上げましょう。「いやです」と答える時期があったとしても、「後で考え直す」人であり続けましょう。わたしたちがこのような生き方を示せば、「わたしは自分でいつでも反省して神の国に入ることができる」と思い違いをしている人にも、良いお手本となることができます。



年間第 27 主日 (マタイ 21:33-43)

収穫を受け取る主の栄光のために働く

年間第 27 主日 A 年の福音朗読を味わうために、第一朗読を少し意識してみましょう。ひごろから、第一朗読、第二朗読のことを前置きして福音朗読に向き合うことが望ましいですが、今週は特にそのことを意識してみましょう。

数日前に広島の M さんからショートメールが入りました。「10 月 19 日 (木)、マツダスタジアムのチケットが手に入りました。ご一緒しませんか？」というものでした。この方は広島の司教様の運転手なのですが、願ってもない連絡にすぐ飛びつきたい気持ちを抑え、確認を入れてみました。「広島の司教様は、その日の予定はどうなっていますか？」

すると、すぐに返事がきました。「広島の司教様もいっしょにマツダスタジアムです。中田神父様がその日司教館に泊まるようでしたら、司教様とご一緒にミサができるように手配します。いかがでしょうか。」

答えはもう決まっているのですが、もったいぶってこう返事をしました。「その日は典礼委員会が予定されていますので、日程の調整ができたならわたしも加えてください。」19 日 (木) の典礼委員会、前日か、翌日か、一週間後か、いずれかに変更願います。

さて今週の福音朗読をもう一步踏み込んで考えるために、第一朗読にヒントをもらいたいと思います。第一朗読は「イザヤの預言」です。不忠実なイスラエルの民に回心を迫る書物ですが、「わたしの愛する者」はぶどう畑に良いぶどうを植えました。そして良いぶどうが実るのを待ったとあります。

ここで「良い」と日本語に訳されている箇所はそれぞれ別の単語が使われていて、「わたしの愛する者」が植えたと言われる「良い」ぶどうの木、ここで使われている「良い」は、「選りすぐりの」という意味があるそうです。

他方、「良いぶどうが実るのを待った」という場面での「良い」は、「まあ、普通に」ぶどうの汁を絞ることのできるぶどうという意味で、「選りすぐり」のような特別な価値を含んでいないそうです。

すると、ここで登場する「わたしの愛する者」が植えてくださったぶどうの木は選りすぐりのぶどうの木であり、そこから期待したのは、「まあ、普通に」ぶどうの汁を絞れたらそれで十分という控え目な期待だったことが分かります。

「しかし、実ったのは酸っぱいぶどうであつた。」この落胆は大きいでしょう。選りすぐりのぶどうの木を植え、まあ普通にぶどうの汁を絞れたらそれでいいよと言っているのに、その控え目な期待にさえ応えてくれない。ここを理解して、福音朗読に入っていきたいのです。

福音朗読でも、同じような物語の構造がみられるでしょうか。ぶどう園の主人はぶどう園を極めてよい状態に整えて農夫たちに貸し与えました。僕たちを送り出したのは、「収穫の 때가 近づいたとき」でした。

これはつまり、いよいよ収穫の時になって受け取りにだけ来たのではなく、収穫の時を共に喜び合うために、少し早めに入って一緒に汗を流して収穫し、それを受け取ろうという主人の配慮でしょう。主人が最後に送った息子も、やはり共に汗を流して収穫の喜びを分け合うつもりでした。

わたしはここにも、イザヤ書と重なる設定を考えてよいと思います。ぶどう園の主人は、選りすぐりのぶどう園を準備して農夫に貸しました。僕たちは、分け前だけを取りに来たのではなく、ともに汗を流そうと少し早めに来ました。愛する息子も、ぶどうの収穫にあれこれ注文を付けていないのです。選りすぐりの収穫でなくても、普通に収穫を納めればよかったわけです。

結果はどうなったのでしょうか。無残な結果に終わりました。控え目に見積もった収穫の受け取りすら、主人は受け取ることができませんでした。本来なら「その悪人どもをひどい目に遭わせて殺し、ぶどう園は、季節ごとに収穫を納めるほかの農夫たちに貸すにちがいない。」（21・41）

こうなっても仕方がなかったのですが、このたとえで予想される結末を超越して、神は人間の救いの為に「家を建てる者の捨てた石」（21・42）となられたイエスを通して、救いを成し遂げてくださったのです。選りすぐりの、さらに極みである御子イエス・キリストさえいけにえにして、神はご自分の救いの計画を完成されたのです。

わたしたち田平教会の家族は、今週のたとえから何を学ぶことができるでしょうか。田平教会はあと八ヶ月もすると教会献堂百周年を迎えます。収穫の時が近づいているのです。収穫の時が近づいて、一人ひとりこの場所に神から僕として送られてきたのです。

少し時間を与えられて、献堂百周年を迎えようとしています。わたしたちは互いに力を合わせて、汗を流して、収穫の時を迎えようとしているのでしょうか。「百周年の事業のために実行委員会が組織されているではないか。」たしかにそうですが、田平教会を形作っている神の民全員が収穫の為に手を差し出さなければ、本当の収穫は得られないのではないのでしょうか。

誰かが手を開かず握りしめたままそこにいたら、神が受け取るべき収穫は、間引きされ、横取りされて、みすぼらしいものになってしまうでしょう。「ご主人様、わたしたちを百周年に遣わしてくださいましたが、ご覧ください」と、主である神と喜びを分かち合えたらと思います。

たとえ話のように、田平教会の神の民にも収穫の時はもうすぐそこまで来ています。「収穫を自分のものにしてしまおう」「わたしがいたから計画は成功したのだ」などというような自己中心的な考えはいっさい捨てましょう。もしそのような人がここに混じっていたら迷惑です。そうではなく、神に収穫をお渡しする。その一点に集中して、これからの八ヶ月を過ごしてまいりましょう。一つひとつのわざは、収穫を受け取る主の栄光となるべきです。



年間第 28 主日 (マタイ 22:1-14)

あなたに礼服を着せたのは誰ですか

年間第 28 主日 A 年で取り上げられた「婚宴」のたとえば、神の国に多くの人が招かれる可能性があることを教え、同時に本人の責任で放り出される可能性もあると教えます。鍵となるのは、「礼服を着ているかどうか」です。

長崎教区の先輩司祭が一人亡くなりました。わたしや田平教会の同期の方が小神学校時代にお世話になった「阿野武仁」神父様です。小神学生時代、ずっと会計係をしていたので、わたしにとっては会計の神父様という印象でした。

いくつか思い出があります。入学直後に「霊名を言ってみなさい」と質問されて、「ペトロです」と答えました。母親が間違っってわたしに教えていたのですが、阿野神父様が「あなたの霊名は鯛之浦教会の記録によると『トマス』ですよ」と言うのです。忘れもしませんが、わたしはこの時「証拠がないと信じられません」と言ったのです。後になって、この返事の仕方こそわたしの霊名がトマスである証拠だと思いました。

神学校の朝ミサで、ミサ前に黙想の時間があって、それぞれ担当の神父様が黙想の話をしてくれるのですが、阿野神父様は学生の最後尾から話をしていました。前に立って話をすれば神父さまを見ながら話を聞くことができますが、姿がなくて後ろから声だけ聞こえるので、眠たくてよく居眠りしていた覚えがあります。これもあとになって気づくのですが、姿を当てにせず、声だけを頼りに深く黙想するための訓練だったのでしょう。そうとも知らず、いつも眠って申し訳なかったと思います。

神父様はよく拳骨を落とす方でした。規則違反とか、神学校での試験の成績が悪かったとか、何かにつけてたくさんの拳骨をもらいました。高校生になった時、宗教の授業で「少なくとも年に一度、告白すべしとは、いつのことを指していますか？」と聞かれたことがあります。

クラスの全員答えに窮していました。一列目が答えられなくて拳骨一発ずつ、二列目が答えられず拳骨二発ずつ、三列目は三発ずつ、徐々に拳骨の数が増え、わたしの列では六発くらいになっていました。いよいよわたしに質問が回ってきて、苦し紛れに「いつでもいいです」と答えたところ、望み通りの答えだったのか、拳骨が落ちなかったのです。

おそらく、神学生によって阿野神父様の思い出は両方あると思います。恨みを持っている人もいるでしょう。規則違反で往復ビンタを何発も食らった人もいるわけですが、司祭になった人も、そうでない人も、阿野神父様を通ったことでどんなに鍛えられたかわかりません。神父様になった先輩で、顔が腫れるくらい往復ビンタを食らった神父様が、「当時は恨んでいたけれども、あそこで終わっていたら今はないのだから、感謝している」と言っているのが印象的でした。

わたしは、阿野神父様と小神学校時代、さらに上五島時代と二度関わったので、小神学校時代しか見たことのない人とは違った見方を持つ

ています。たしかに小神学校では鬼のような神父様でしたが、上五島に赴任した時はおじいちゃん神父様で丸くなっていました。

もちろん小神学校時代の記憶はなかなか抜けませんでしたが、それほど極端な人ではなく、別の時代に出会っていたら、付き合える神父様だなという印象を持ちました。晩年はご自分の衰えと、思うように導けない歯がゆさと闘いながらの司牧生活だったと思います。先月だったか、病氣療養中だと聞き、わたしはてっきり上五島病院だと思っていましたが、マカオに滞在中体調を崩したようです。

あっと驚く死に場所でした。マカオでお亡くなりになると、だれが想像するでしょうか。詳しいことはわかりませんが、神父様は萩原神父様と一緒にローマで勉強し、ローマで司祭に叙階されています。きっと学友もたくさんいたことでしょう。その中に、親しかった学友がマカオにいたのかもしれませんが。今はご遺体を引き取りに行っていて、戻ってから通夜と葬儀の日程が決まると聞いています。

阿野武仁神父様の追悼の辞に終始してしまいました。最近長崎教区は司祭の通夜の時に 24 時間の連続ミサをしなくなりました。かつては 30 分間隔で徹夜のミサをしていましたので、若い司祭たちにも思い出を語る機会がありました。今は通夜の説教を担当する司祭と、葬儀の説教を担当する司祭しかチャンスがありませんので、せめてこの場で話をさせてもらいたいです。

最終的に二つのことを思いました。一つめは、阿野神父様はおそらく自分の最後が近づいていることを感じていたのでしょう。婚宴に招かれるその日のために、礼服の準備を整えようとマカオに行ったのかなと思いました。もし、学友を訪ねたのであれば、自分の身支度を、学友に手伝ってもらったのかもしれませんが。そして立派に礼服を着て、王が王子のために用意した祝宴に招かれて行ったのではないのでしょうか。

二つめは、阿野神父様の厳しい指導で、礼服を身につけた神学生、司祭、そして司教様もいたということです。わたしたちは誰もが天の国の婚宴に招かれるとき、礼服が必要です。礼服がなければ、善人も悪人も、区別なく放り出されることになるのです。たとえ神学校であっても、善人も悪人もいるのが共同生活です。学生を区別せず、神学生に求められる脇目もふらずに生活する道を厳しく指導した阿野神父様は、出会った学生すべてに、礼服を着せてくれたのではないかと思います。

わたしたちはどうでしょうか。わたしたちに礼服を着せてくれた人は誰でしょうか。その人に感謝しているのでしょうか。また、わたしたち自身は、だれかに礼服を着せるお手伝いをしたのでしょうか。

わたしに礼服を着せてくれた人を証言すれば、その人も婚宴に招かれるでしょうし、わたしたちが誰かに礼服を着せてあげれば、わたしたちも招かれます。善人も悪人も、一人残らず、礼服を着て天の国の婚宴にあずかれるように、できるお手伝いをしたいものです。



年間第 29 主日 (マタイ 22:15-21)

神のものを神に返すわたしたちに人々は驚く

「彼らがデナリオン銀貨を持って来ると、イエスは、『これは、だれの肖像と銘か』と言われた。」(22・19-20) ファリサイ派の人々は、「皇帝への税金」を餌に、イエスを罠にかけようとしします。イエスは偽善者たちの罠を打ち破り、本来考えなければならないことに目を向けさせます。イエスの問いかけはわたしたちにも当てはまります。

先週、インフルエンザのシスターの代用教員をしてみて、小学1年生2年生の指導は大変だなあと思ったと話しました。その続きの話もしておきましょう。3人来ていた子供たちに、イエス様を信じる人々が増えてきたら、「福音を宣べ伝えなさい」「彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授けなさい」という務めは、そのうちに手が足りなくなってくるよね～どうしたと思いますかという話を最後にしました。一人芝居までして、説明をしたのです。

「イエス様を信じる人が、1万人になったら、遠くに住んでる人のお世話をしに、『行ってみ～す』と出かけて、3日くらいして『ただいま～』って帰ってくる。信じる人が5万人くらいになったら『行ってみ～す』『ただいま～』って1ヶ月くらい戻ってこれなくて、ずいぶん家を空けてしまうよね。10万人にもなれば、『行ってみ～す』『ただいま～』って帰るまでにももしかしたら3ヶ月もかかるかもしれない。そうなったらどうすればいいかなあ。」

この時わたしが説明したかったのは、「12人の弟子たちだけではお世話が難しくなるので、後を引き継いでくれる『司教様』を国ごとにと、地方ごとに選んで、イエス様に託された仕事続けていったんだよ」ということでした。こうして教会が広がっていくのと同時に、地方にも司教様が選ばれてイエス様からの務めは立派に果たされたんだよと言おうとしたのです。

「信じる人が10万人になると、遠くまで務めを果たしに行って、3ヶ月もしてから『ただいま～』ってなるよね？」と聞きました。すると先週正解を答えに書いていた女の子が自信を持ってこう言ったのです。

「大丈夫。留守番できるから。」そうか～。留守番できるのね。じゃあ司教様も要らないか。わたしはそれ以上説明できませんでした。こんな小さな子供たちが留守番できるのであれば、立派な大人たちは司祭が250年間戻ってこなくても、留守番できるはずだよねとも思いました。

さて今週の福音朗読で強調したいのは、「神のものは神に返しなさい」という力強いイエスの返事です。当時パレスチナで流通していた貨幣には、皇帝の肖像が刻まれていました。お金は、いくら貯めていても役に立ちません。お金は使うことで、価値が出てきます。皇帝が要求してきた税金を払うことも、お金を必要に応じて使うことの一つでしょう。

同じように、わたしたちは神のものを神に返す、あるいは神のものを神のために使う必要があります。わたしたち人間には、ローマの貨幣

に皇帝の肖像と銘が刻まれていたように神の像が刻まれています。ですからわたしたち自身を神に返す、神のために使う必要があるのです。

神ために自分自身を使う身近な場所は教会です。典礼奉仕はその最たるものでしょう。ただ、皆さんの典礼奉仕を見ていて、せっかくの奉仕がもったいないなあと感じることが多々あるのです。わたしたちはお金の使い方は少しでも無駄にならないようにと気を遣うのに、自分自身を神さまのために使うことになぜあまり気を遣わないのでしょうか。

たとえば、第一朗読・第二朗読をお願いされた人が朗読台にやってきて朗読をします。よく聞き取れない時がありますね。せっかく自分自身を神さまのために使っているのに、朗読が聞き取れないとか何度も読み間違えて流れが悪いとか、もったいない話だと思います。共同祈願も、聞き取れないことがあります。自分自身も朗読した聖書が耳で聞いて理解できない、唱えた本人が共同祈願の内容が聞き取れないなら、それは誰のための朗読、誰のための共同祈願なのでしょう。

祈りの先唱の人は、必ず自分のあとを皆さんが継いで唱えます。そのつもりで先唱する人は、あとを継ぎやすいように間を空けてくださいます。「すべてを造り、治められる神よ」でしっかり止めてくれたら、皆さんはたやすくあとを継ぐことができますが、「すべてを造り、治められる神よいつくしみ深い御手の中で始めるこの集いを祝福し・・・」とやられると、あとを継ごうにも継げないのです。

せっかく奉仕しているのですから、「もったいない」と思わせるような奉仕で終わらないよう、あとひと手間かけてください。マイクが声を届けてくれているか気にするとか、わたしの朗読はの声だけで十分意味が伝わっているか気にする。先唱の人は、皆さんがあとをスムーズに継げるように、止めるところはしっかり止める。そういう「あとひと手間」があれば、神さまからいただいたわたし自身を、神さまにお返しする、神さまのために使うことになると思います。

ちなみにイエスは「皇帝のものは皇帝に」とも言われました。皇帝が当時のローマ帝国に及ぼしていたのは政治的な影響力です。わたしたちも目の前に選挙を控えています。衆議院選挙と、平戸市議会議員選挙です。どちらも、よく考えたうえで大切な一票を投じてください。

国政選挙は 600 億円ものお金が先につき込まれています。1 人あたり 600 円くらいです。この 600 円、選挙に行って 1 票を投じれば、国民の税金を国民に返すことになるのです。国民の税金が先に使われているのに、投票せず、お金を捨てるようなことは決してしてはいけません。

「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」(22・21) 特にカトリック信者であるわたしたちは、自分自身を神さまのために使って、人間に刻まれている神の肖像と銘を曇らせないようにしましょう。いやいや奉仕しても、もったいない使い方にしかありません。あとひと手間かけて、もっと喜ばれる奉仕にしましょう。人間の権利と義務の上に、神の栄光となるカトリック信者の権利と義務を果たして、人々を驚かせる者となりましょう。



年間第 30 主日 (マタイ 22:34-40)

あなたの生活は二つの掟に基づいているか

「律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。」今週の福音朗読の答えがここにあります。わたしたちの生活も、この二つの掟に基づいているはずです。わたしは、神を愛する見えるしるしを、隣人を自分のように愛することで表すことができているでしょうか。

11月、いくつかの大事な予定が組まれています。2日(木)死者の日に田平教会の亡くなった方々のためにミサをします。田平教会は大きな家族なので、信徒の中からたくさんの修道者、司祭を輩出し、そのうちの何人かはすでに眠りにについています。こうした聖職者、修道者の為にも合わせてお祈りしましょう。

5日(日)、わたしは郷里の鯛之浦教会に行って叙階25周年の感謝のミサをささげてきます。田平教会にも12人の主任司祭が与えられました。中には亡くなられた歴代主任司祭もいますので、その方々の為にも日を改めてお祈りしたいと思います。わたしは5日のミサで、司祭職という生き方は思い付かなかった人も多いかもしれないが、「いちばん偉い人」を目指しているなら、考えてみてほしいと話そうと思っています。

12日(日)女性の会のバザーがあります。午後からは生月「黒瀬の辻」殉教祭とこの教会に戻ってきて「鉄川與助の建てた教会」について鉄川進氏から講演をしていただきます。わたしたちがお世話になっているこの聖堂をもっと深く知り、大切に守っていくためのヒントをいただきたいと思います。

こうしてみると、わたしたちが神を礼拝し、神に感謝し、神に願うために、この教会堂は重要な役割を果たしていると思います。ほとんどの人は、洗礼を受けて永遠の命をいただくために、この教会堂のお世話になったわけです。

大人の信者になるための堅信の秘跡も、互いに愛と忠実を尽くすことを誓ったのも、教会堂の中においてです。「神を愛するのに建物は直接関係がない」と言えなくもないですが、わたしたちの身体は「祈りの為に建てられた家」と「生活のために建てられた家」とでは、「祈りの家」で祈るほうが、より祈りに入りやすいことを知っているわけです。

今週の福音朗読で、イエスは律法の専門家が仕掛ける新たな罠を見破ります。当時律法の専門家は書かれた掟のほかにも言い伝えとして受け継いだ掟があり、一つ残らず掟を守るのはほとんど不可能でした。その中で自分たちはすべての掟に背かず生きていることを誇りにして、他人を見下していたのでした。

「先生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか。」(22・36)律法の専門家がイエスにこう尋ねたのは、答えを聞きたかったというよりも、どれか一つの掟を答えとして選んだ場合に、「この人は掟の一つは重要だと言ったが、ほかをないがしろにした」と言いがかりをつけるための落とし穴として尋ねたのです。巧妙な罠でした。

イエスは彼らの罫を見破り、答えます。「律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。」(22・40)たとえばそれは、ビーズ細工をつなぐ糸のようなものです。神を愛することと、隣人を自分のように愛することが掟を貫く糸であり、この糸を失ったら一つ一つの掟はバラバラになってしまうのです。

あるいはウイスキーの樽を縛っている「たが」のようなもので、「たが」が外れれば樽は形を保てないし、意味を為さないのです。掟を守ることが、神を愛し、隣人を自分のように愛することに結びつかなければ、意味を為さないのです。

教会には秘跡があります。神の目に見えない恵みを、目に見えるしるしによって与えてくれるものです。恵みは神が与えるのですから、人間の道具を必要としません。神はあえて、その恵みの中でも七つを、人間が感じることできるしるしで用意してくださいました。わたしたちにとって、恵みをいただくのに「見えるしるし」は大いに役に立つのです。

わたしたち人間にとって、神を愛する目に見えるしるしは、「隣人を自分のように愛すること」です。隣人とは、まずはすぐそばにいる人です。わたしのすぐそばにいる人は誰でしょうか。その人と、どのような関係を築いているのでしょうか。ここから考えて、各自それぞれの答えを見つけてほしいと思います。

もう一つの「すぐそば」についても言わせてください。11月12日、鉄川與助の思いを今に受け継ぐ鉄川進設計事務所の代表鉄川氏に講演をお願いしています。わたしたちが神を礼拝し、神に感謝をささげ、また願いを打ち明ける時、建物である聖堂が深くかかわっています。神は愛するが隣人は愛さない。そんな信仰が成り立たないのであれば、神を礼拝するが聖堂はどうでもよい。そんな礼拝も成り立たないのではないのでしょうか。神を愛する、その目に見えるしるしが聖堂を愛することと言っては、言い過ぎでしょうか？

聖堂を愛するきっかけを得るためにも、12日の夕方5時からの講演会は、一人でも多く参加してほしいのです。わたしたちがより良い礼拝をささげるために、この田平教会聖堂の成り立ちを知り、どのようにかかわっていけばよいのかを学ぶのはとても良いことだと思います。

日頃、聖堂の内外清掃をわたしたちの手でしております。清掃を心掛けなくても礼拝は可能かもしれませんが、しかし、聖堂を完全に放置すれば、埃だらけ、カビだらけになり、神を礼拝するどころではなくなるのではないのでしょうか。

わたしたちは体を持った存在で、礼拝も心だけで礼拝しているのではなく体である聖堂を使わせてもらっています。12日の講演がきっかけになって、「神を愛することは、聖堂を愛することと深くかかわっている」そう感じる事ができれば幸いです。



年間第 31 主日 (マタイ 23:1-12)

まったく違うところで、願うものを探しなさい

典礼の年間の季節も押し迫ってくる第 31 主日に、鯛之浦教会へお招きいただいて銀祝の記念ミサをささげることができました。感謝申し上げます。ひょっとしたら 25 周年を迎えられるかもしれないとは思っていましたが、まだ遠い先の話と高を括っておりましたらその日はあつという間に来ました。これからという神父様方にはくれぐれも、遠い話ではないということを念押ししておきたいと思います。

さて今日皆さんにお伝えしたいことは、「あなたがたのうちでいちばん偉い人は、仕えるものになりなさい」(23・11)ということです。わたしたちの一般常識で、いちばん偉い人はどこにいらっしゃるのでしょうか。いちばん偉い人は、椅子に座っているかもしれません。「社長の椅子」「総理大臣の椅子」などです。成績がいちばんの人を昔は「首席」と言っていました。これも椅子みたいなものです。だいたい、いちばん偉い人は椅子に座っているようです。

ではイエス様が示した「いちばん偉い人」はどこにいらっしゃるのでしょうか。その人は「仕えるもの」の中にいると言います。誰かに仕える人は、椅子になんか座っている暇はありません。汗を流し、せっせと働いているはずです。イエス様が示す「いちばん偉い人」は、一般常識に当てはまりません。

これを簡単に言うと、イエス様が示す「いちばん偉い人」は、「常識とまったく違うところで探さなければならない」ということです。お金持ち、人並みの生活、有名人、なりたい職業のトップ 10、こんな常識とはまったく違う場所を探さなければ、イエス様が言う「いちばん偉い人」にはなれないのです。

最近韓国語を勉強しています。ある文法規則を「実に面白い」と思いました。故郷のおじいちゃんおばあちゃんが昔言っていた言葉を、韓国語の文法表現の中に見つけたのです。わたしのおじいちゃんおばあちゃんは、「うわ～」と言いたいときに「あよ～」と言っていました。「そう、その通り」と言いたいときに、「およ～」と言っていました。けれども、おじいちゃんおばあちゃんが使っていた「あよ～」「およ～」という言葉、今は誰も使っていません。せいぜい、「そんな言葉使っていたなあ、懐かしいなあ」くらいです。

ところが。韓国ではおじいちゃんおばあちゃんどころか、最先端の若い人たちも「あよ～」「およ～」と言っていることを発見したのです。例を挙げると、「良い」を韓国語で「チョッタ」と言いますが、日常会話では「チョアヨ」と言います。「美味しい」は「マシッタ」ですが、実際の会話では「マシッソヨ」と言います。五月の連休に韓国一人旅をしてきましたが、今どきの若者たちが「アヨ」「オヨ」「アヨ」「オヨ」と繰り返していたのに唾然としたのです。その光景にわたしは思わず「あよ～」と言いました。

もちろん使い方には違いがあります。けれども「アヨ」「オヨ」活用を反復練習しているうち、幼い頃のおじいちゃんおばあちゃんと結びつき、何十年もあとにまったく違う場面で再会して、あーこれは11月5日に使える！と直感したのです。そこまで閃いたので、おかしかったのです。

もはや「死語」とも言える「あよ～」「およ～」に、まったく違う場所で再会した。これは、わたしたちの人生にも当てはまるのではないのでしょうか。ここにいる子供たち、若い人たちがもし「いちばん偉い人」を目指しているとしたら、一般常識の中ではおそらくたどり着けないでしょう。

「社長の椅子」「総理大臣の椅子」「首席」またはお金持ち、人並みの生活、有名人、なりたい職業のトップ10など。ほとんど当てが外れて、悲しい思いををすると思います。わたしはそんな思いを皆さんにしてほしくないのです。

むしろ、まったく違う場所に、目指している「いちばん偉い人」はあるのです。想像したこともない、まったく違う場所で探すときにはじめて、あなたが求めていた「いちばん偉い人」を見つけると思います。もうすぐ話は終わりに近づきますが、ここにいる皆さんが、考えたこともない、想像もつかない、まったく違う場所とはどこでしょうか。最後にその場所を示して終わりたいと思います。

鯛之浦教会に集まっている皆さんは、もうすでに見ています。中田神父が立つこの祭壇です。誰も思いつかなかったでしょう。だれもが思いつきそうな場所では、イエスが言う「いちばん偉い人」にはなれません。むしろまったく予想しない場所、ミサをささげているこの祭壇がその答えです。ここに立つためには何が必要でしょうか。そうです。「司祭になる」ということです。ここに、イエスが招く「いちばん偉い人」の椅子があります。

これからの時代、よくできたロボットが作り出されて、ほとんどの仕事がロボットの仕事になるでしょう。今まで目指していた「いちばん偉い人」はほとんどロボットに取られてしまうでしょう。でも大丈夫。ロボットにはミサをささげることができません。動作は完ぺきに身につけるかもしれない。けれども教会はロボットに資格を与えないのです。

医者手術をします。しかし将来ロボットが、医者よりも正確に手術ができるようになるでしょう。すると医者でさえもロボットの仕事になると思います。国は、ロボットに手術を許可する時代が来るでしょう。そんな時代がやってきても大丈夫、教会はロボットにミサをささげることが許可しません。

考えもしなかった場所に、「いちばん偉い人」の姿があります。この祭壇はその一つです。この祭壇を含め、「司祭職を生きること」ここならイエスが教える「いちばん偉い人」を見つけることができます。わたしが次にあいさつするのは25年後です。その時にはここにいる人は誰もいません。したがってこれは皆さんへの「最後の授業」です。



年間第 32 主日 (マタイ 25:1-13)

あなたの「最後の授業」を聞かせてください

本日「黒瀬の辻殉教祭」が午後2時から予定されています。説教師はわたしなので、田平教会での説教も大枠は「黒瀬の辻殉教祭」の説教を使わせていただきます。

世界中でブームになっている授業があります。「最後の授業」というものです。「引退を迎えた教授が、お別れの日におこなった授業」ではありません。現役バリバリの教授が、「もし余命数日の宣告が下されたら？」というような設定で、すべてを賭けておこなう授業のことです。

最初にこの授業をおこなったのは、余命半年のがん宣告を医師から受けたランディ・パウシュという教授でした。彼は余命半年でありながら、希望に満ちた、エネルギッシュな授業を展開したのです。死にゆく人のメッセージではなく、聞く人にやる気を起こさせる授業でした。

先に「黒瀬の辻殉教祭」の案内をしました。この殉教祭は言わば「福者西家族を思い起こし、物語るためのミサ」です。わたしはこの説教を考える準備として、黒瀬の辻で殉教した西家族について、殉教から400年を迎えた2009年に山田教会で発行された「生月の殉教者・福者ガスパル西玄可とその家族」という青い冊子を注意深く読みました。冊子を読んだ上で、400年前を振り返るだけでなく、出来事を今どうやって生きたらよいかを付け加えて話してみたいと思いました。

冊子を読んでわたしが考えたことは、西玄可とその家族は、決してこの世を捨てて、この世に背を向けて生きていたのではないということです。時代はキリシタンにとって完全な逆風だけれども、正面から逆風に立ち向かって生き続けた人たちです。「この世に興味がないから、命を取り上げるのであればどうぞ。」そんな生き方を選んだものではありません。誠実に日々を生きて、生き方を曲げることなく貫いたのです。

わたしは、西玄可とその家族の最後の日々は、彼らが日頃から用意していた「最後の授業」だったのだと思っています。「どうせもう死ぬから、これだけは言っておこう」という気持ちで立てた証ではなくて、命に満ち満ちた、花が満開に咲いた状態で、すべてを賭けておこなった授業だったと思っています。

当時ほとんどの人が、西家族の「最後の授業」を理解しませんでした。救い主イエス・キリストのために命をささげることが、命を投げ捨てることのように思えたからです。本当は理解できたはずなのですが、伝統やしきたり、面子など自分を縛っているものから解放されるのを怖がっていたのかもしれません。

殉教祭の参加者は違います。黒瀬の辻に集まってくださるということは、西家族の「最後の授業」をもう一度聞きたい、そう思って集まるはずですが、もしそうでなければ、ほかにすることはいくらでもあったはずですが、それらをなげうって殉教祭に集まってくれる。西家族の「最後の授業」に価値を見つけたからです。同じ時間に放送されているテレビ、

ラジオよりも、聞く価値があると考えたからここに集まっているのです。

ランディ・パウシュの「最後の授業」を受けた人たちはどうなったのでしょうか。授業を受けた人たちは、別の友人知人に、授業から学んだことを伝える人になりました。「最後の授業」をこなした教授に倣って、自らも「最後の授業」ができる人になったのです。

「最後の授業」を受けた人たちとわたしたちを重ねてみましょう。わたしたちが殉教祭に集まるなら、西玄可とその家族が命を賭けておこなった「最後の授業」を聞くことになります。そうであるなら、わたしたちもまた、友人や知人に、殉教祭で感じたことを伝えるべきです。

もっと言えば、わたしたちも西玄可とその家族に倣って「最後の授業」ができる準備を整えておくべきです。わたしたちが生きる気力に満ち満ちているときに、現役バリバリの時に、人生の終わりなどこれっぽっちも考えない時に、「最後の授業」を用意しておくべきなのです。「これ以上はできない」という最高の授業を、いつどこでも、だれにでもできるように、心の準備をしておきましょう。

「最後の授業」のテーマは自由です。与えられた福音朗読では、十人の乙女たちが「ともし火」を消さないように注意を怠りません。「ともし火」は、聖霊だと考えてみました。聖霊がわたしたちに与えられ、その大切さは十人とも理解できたのです。愚かな乙女さえも、「油を分けてください。わたしたちのともし火は消えそうです」（25・8）と言ったのです。

賢い五人は聖霊の火をともしつづける「油」を持っていました。「油」とは何でしょうか。それは、常日頃から準備しておく「最後の授業」「わたしなりの信仰の表し方」です。この油があって初めて、わたしたちは「聖霊の火」を人々にともし続けることができるのです。

わたしは釣りが大好きで、一週間に八日間出かけたくらい好きです。わたしの釣り場は、水深 40m から 50m のところです。そこでキジハタやタイを狙っていますが、40m 先の、ほんのちょっとの変化を見逃さないことが釣果を左右します。

人間の世界では 40m 程度ですが、神さまは人間を救うために、神さまに背を向けて離れてしまっている人間の、ちょっとした変化に神経を研ぎ澄ましています。果てしなく遠ざかっている罪びとが、一度だけ神さまに向き直った。それを神さまは決して見逃しません。その人が心を入れ替える「一生に一度のチャンス」を見逃さないのです。

これで、趣味の釣りを題材に「最後の授業」ができました。いかがですか？あなたの身の回りで起こっていることを話題にして結構です。いつチャンスが巡ってきててもよいように、あなたがどのように神さまを信じているのか、だれにでも話せる準備をしておいてください。

あなたにとっての「一世一代の授業」は、今日やってくるかもしれませんし、三年後かもしれません。西玄可とその家族は、いつでもその準備ができていました。わたしたちも、神さまをどのように信じているかを、自分の言葉で話せるように準備を整えておきましょう。



年間第 33 主日 (マタイ 25:14-30)

お預けになりましたが、御覧ください

年間の主日も今週と来週の「王であるキリスト」二週となりました。与えられた福音朗読は「『タラント』のたとえ」です。17日(金)に長崎教区の川添神父様がお亡くなりになったので、そのことと重ねながら福音の学びを得たいと思います。

川添猛神父様が85歳で亡くなりました。フランススコ病院で癌の闘病中でした。わたしが司祭に叙階されて、初めての赴任地だった浦上教会で、主任司祭として厳しくそして温かく指導していただきました。川添神父様に5年間指導をいただいたことが、わたしの司祭生活の大切な財産になりました。

川添神父様は浦上で三人の助任司祭を束ねて、それぞれ個性の違うわたしたち助任司祭の才能をうまく引き出してくださり、当時の浦上教会は自分が言うのもなんですが、うまく回っていたと思います。四人の司祭全員が五島出身で、受付のシスターも五島出身でしたので、長崎の中心にありながら司祭館の中だけは五島弁の治外法権でした。

ある時教会の台帳記録を前に、手順が分からずまごついていました。「そんなこともできないのか。何を神学校で習ってきたのか」と五島弁できつく言われました。その時、先輩助任の真浦神父様から「怒られたな。俺も最初は怒られたんだよ」と慰めてもらったりもしました。

川添神父様は助任司祭に寛大に仕事を割り振ってくださいました。「責任は俺が取る。思う通りやってみろ。」それと同時にこうも言っていました。「薬にも毒にもならないことはするな。」わたしの理解ですが、浦上教会の神の家族にとって、よい薬になる取り組みは当然ですが、苦い薬、もう二度と繰り返してはいけないと身をもって知る経験も、あとでは財産になるので、「薬になるか、毒になるか」いずれかの役に立つことをやってみろという教えだったのだと思います。

今週のたとえで、主人が僕たちに自分の財産を預けて旅に出て行きます。どのように活用するかも僕たちに任せました。五タラント預かった僕と、二タラント預かった僕は、主人の態度から全幅の信頼をしてもらっていると感じて商売に励みました。

ところで一タラント預かった僕は、主人の思いを正しく理解しませんでした。この僕には、預けられた財産が重荷に感じられ、使い方で任せたことも無言の圧力に感じたのです。同じように預けられ、同じだけの時間があつたのに、一タラント預けられた僕は主人の期待を喜びや誇りと感じることはできなかったのです。

わたしが最初にお仕えした川添神父様は、わたしたち助任に主任司祭の権限を分け与えてくださり、のびのびと仕事をさせてくださいました。「責任は俺が取る」この言葉に勇気づけられて、任せられた仕事を「重荷」「圧力」と感じることなく、喜んで果たすことができたのです。

わたしたちはどうでしょうか。神さまはたとえにある主人のように、

ご自身の持ち物である「タラントン」を預けてくださいます。わたしたちの能力はそれぞれ違いますが、神はすっかりわたしたちを信じて、「タラントン」を預けてくださり、人生という長い時間の中で、それをどのように活かしてくれるか、口出しせずに見守っておられるのです。

神さまが預けてくださる「タラントン」とは何でしょうか。今回わたしは、洗礼によっていただく三つの役割「預言者」「王」「祭司」と考えてみました。洗礼を受けた時点で、わたしたちは預言者のように神から託された言葉を語り、王のように家族や周りの人を神の望みにかなうように導き、祭司のように家族のため、人々のために神に祈ることを期待されているのだと思います。それは洗礼を受けたときから、神に召されるその時までの長い期間です。それぞれの能力に応じて、語りかけ、導き、取り次ぎの祈りをささげます。

わたしたちは神の期待をどのように受け止めているのでしょうか。「洗礼を受けた人だから、人々に語りかけてください。導いてください。取り次ぎの祈りをささげてください」と言われたら、それはあなたにとって「重荷」「圧力」でしょうか。もしみなさんが「重荷」「圧力」と感じているなら、その時点ですでに神さまから預かった「タラントン」を土に埋め、最後のその時に神に突っ返そうとしていることになりませんが、果たしてそれでよいのでしょうか。

わたしたちはそれぞれの能力に応じて「御主人様、お預けになりましたが、御覧ください」と答えればよいのです。最後の一タラントン預かった僕に主人が要求したのは、銀行に預けて得られる利息でした。今銀行にお金を預けていくらもらえるのでしょうか。1千万円預けても2千円です。それなのになぜ神さまの期待を恐れる必要があるのでしょうか。

今日（明日）、歴代の主任神父様のお写真を並べてミサをささげています（ささげます）。この神父様たちは皆さんを神さまに紹介しながら、「わたしにお預けくださいましたが、御覧ください。こんなに立派な田平教会の信者に、田平出身の聖職者、修道者になりましたよ」と報告しているのではないのでしょうか。わたしたちが育っていれば、この歴代主任神父様方は主と喜びを共にできているのではないのでしょうか。

わたしは、川添神父様に何もない状態から育てられ、川添神父様はわたしの銀祝 25 周年を見届けて、旅立っていられました。中学生の時、26 聖人殉教記念ミサで聞いた説教に感銘を受け、どの神父様だったかは見えなかったけれども、あんな説教をする神父様になりたいと心に誓って司祭になったのでした。その思い出話を浦上に赴任して分かち合ったら「その説教をしたのは俺だ」と川添神父様に言われ、「よく神父になってくれた」と喜ばれたのです。今は神さまのもとで、「助任司祭をお預けになりましたが、御覧ください」と言ってくれていると思います。

神さまがわたしたちにひとまず期待しているのは、銀行の利息くらいの額です。期待を恐れる必要などまったくありません。自分を期待してくれている神さまに、喜んでもらいたい。この思いで人生をまっとうすることにしましょう。



王であるキリスト (マタイ 25:31-46)

イエスが見ている方向を見る生き方

年間最後の主日「王であるキリスト」がやってきました。わたしたちが復活の主を迎えて、年間を通して導かれてきた、この一年を振り返ってみましょう。

親孝行のために旅行に行くことにしました。5月28日、田平小教区での銀祝の祝い金をいただく際、「お願いがあります。これでお母様を温泉に連れて行ってください」と言われました。遅ればせながら、12月13日から15日の2泊3日で、母親が興味関心を持っている場所に連れて行こうと思います。

あまり詳しくは言えませんが、母親はある映画スターのクッションを持っています。関連グッズも持っているくらいですから、相当好きなのでしょう。その希望を叶えようと旅行を計画したのです。ただ、もう少し早く出かけるべきだったかなあと思っています。

なんと言っても真冬ですからねえ。映画のワンシーンは体験できるかもしれませんが、帰りに風邪をひかせては元も子もありません。それだけはわたしも反省しております。とにかく、12月半ばの旅行に支障のないよう、祈りは忘れても息だけはしてお過ごしください。

王であるキリストの祭日に与えられた福音朗読は、「すべての民族を裁く」という箇所でした。キリストはすべての人を前に、ご自分とどのようなかかわりを持って生きてきたかを問いかけます。わたしたちに、「わたしと同じ方向を向いていたか否か」を問い、同じ方向を向いて生きてきた人には報いがあり、キリストに背を向け、目を背けて生きてきた人には厳しい裁きを下します。

キリストと同じ方向を向いて生きてきたかを見分けることは容易です。「お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渴いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。」(25・35-36)

弱く、貧しい人たちを見捨てない生き方が、キリストと同じ方向を向いた生き方です。反対に社会的弱者に背を向け、目を背けるならば、キリストの前に立つその日は厳しい結果が待ち受けていることになります。

たとえに書かれているような、食べ物を差し出したり飲ませたり、宿を貸したり服を与えたり、病人を見舞ったり牢にいる人を訪ねるなど、直接的な働きかけもそうですが、そのような弱い立場にある人のほうを見て生活をしてきたかがいちばん問われます。

その意味では過去に何度か取り上げたかもしれませんが、高校を卒業して福岡の大神学院に行くまでの期間に体験した、小長井の障がい者施設での体験は、わたしの中で痛みを伴う体験となっています。

当時わたしは高校を卒業したばかりでしたが、従妹のいる聖母の騎士修道女会経営の障がい者施設でボランティアに来ないかと誘われまし

た。行ってはみたものの、障がい者との交流にわたしは心を閉ざしていたのです。手の先が肩に直接くっついていて人、足先がすぐ腰につながっている人などに声をかけたり近寄ったりするときに、まったく心が開けなかったのです。最も弱い立場にある人を、わたしは目を背けてお世話して、「頑張ってお世話した」と思っていたのです。

本当に恥ずかしいことですが、当時のわたしは目の前にいる入所者の方に心を開けませんでした。けれども今振り返ると、わたしが目を背けていた理由もまったく理由にならない理由です。懸命に生きている入所者に、もう一度会って力が足りなかったことを謝りたいくらいです。

イエスの模範を理解するには、当時のわたしは幼すぎたと思います。イエスはいつも、弱く、貧しい人たち、社会的に不利に扱われている人たちのことを自分のことのように思っているかたでした。わたしは今現在、命の危険にある病人のもとを訪ねるとき、自分のことのように思える人になってきました。時間はかかりましたが、ようやく、イエスが目を向けているのと同じ方向を、自分も向くことができるようになったのです。

王であるキリストが目を留めるその同じ方向に目を留める人が、王であるキリストの民であるはずです。人間の社会は競争に明け暮れ、蹴落としたり蹴落とされたりして針の先のような頂点を目指し、その頂点に立っても安らかな気持ちにはなれず、常に緊張した状態に置かれています。

それだけの犠牲を払って頂点に立ち、いざキリストの前に来た時「あなたはなぜわたしと同じ方向を向いてこなかったのか」と言われるなら、人生で払って手に入れた身分や財産など、どれほどのものでしょう。置かれた境遇はそれぞれであっても、イエスと同じ方向を向いて、弱い立場にある人に手を差し伸べる人生を考えるべきです。

わたしも、自分の置かれた場所からイエスと同じ方向に向き直るために遠回りをしてしまいました。けれども、今は違います。不完全ではあっても、イエスと同じ向きを向いて歩く意味と価値を理解しています。

一日に何度も電話がかかり、何度となく玄関のチャイムで自分の用事を中断させられる日もあり、苛立ちを覚えることもあります。それでも自分がなにがしかの価値ある仕事ができるのはイエスと同じ向きを向いて奉仕しているとき、その時だけなのです。

ついこの前の晩も、中学生のけいこが終わって背伸びをしようとしたら電話が鳴り、青洲会病院に病者の塗油を授けに行きました。車に乗るとき、「これがわたしの生き方なのだ」と自分に言い聞かせ、よい働きができたことを病院からの帰りに神に感謝したのです。

どうか皆さんも、イエスが今週のたとえで示した「弱い立場にある人に目を向けて生きる人生」を選んでほしいと思います。イエスがみている方向を見る人でなければ、結局イエスを信じていてもイエスと同じ喜びや慰めを得ることはできないと思います。「わたしの父に祝福された人たち」は、どんな境遇に置かれた人にも開かれた生き方なのです。



待降節第 1 主日 (マルコ 13:33-37)

いつであっても、いくつになってもキリスト者

主の降誕を迎える準備の季節、待降節がやって来ました。教会の暦「典礼暦」もB年に移行します。季節の切り替わり、暦の切り替わりに、第一に考えておくべきことを福音朗読から学ぶことにしましょう。

亡くなった川添神父様のこともう一つ忘れられない思い出があります。わたしが浦上教会で五年川添神父様にお仕えした同じタイミングで、川添神父様も天草への転任を引き受けて行かれました。その後二度ほど直接訪ねて行きましたが、以後は年賀状のやり取りをするくらいで、それほど連絡を取り合ってはいませんでした。

川添神父様の年賀状は毎年俳句が書かれていて、いつも楽しみにしていました。ある年にいただいた年賀状は忘れられない年賀状となりました。その年は珍しく俳句は書かれていませんでしたが、次のような言葉が墨で書かれていました。「どこに行っても神父、どこにいても神父。」

とても考えさせられる言葉でした。ひょっとすると若い神父たちは、月曜日に休暇を取るときは神父を捨て去って外出しているかもしれません。わたしもご多分に漏れず、月曜日はテニスに釣りにと、神父であることなどみじんも感じさせない過ごし方でした。

その年賀状をいただいて、それまでの自分の時間の過ごし方を考え直したのです。もちろん月曜日に休暇を取るとは、土日にもっとも働く仕事なのですから誰もが理解してくれます。けれども川添神父様が年賀状で戒めてくれたように、「どこに行っても神父、どこにいても神父」であることを忘れてはいけないと思ったのです。どんなに夢中になっているときでも、信徒にお願いされたら自分の都合を横に置ける司祭であれよと、言っておられたのだと思います。

その川添神父様の戒めを、今週の福音朗読と照らし合わせて考えてみました。「気をつけて、目を覚ましていなさい。」(13・33)「いつ家の主人が帰って来るのか、(中略)あなたがたには分からないからである。」(13・35)亡くなった神父様の戒めに当てはめると、さしずめ「いつであっても神父、いくつになっても神父」というところでしょうか。

実際には、新米神父の時から徹底的に教え込まれていたことでした。浦上教会のすぐそばには長崎市内で一二を争う大きな病院である「長崎大学病院」があって、助任司祭たちは夜中だろうが何だろうが電話が鳴れば大学病院に駆け付け、病者の塗油を授けていました。ある時は交通事故で血だらけになっている人に、ある時は心臓が停止して、医者が心臓マッサージを懸命にして、それでも心臓が蘇生しないのを家族に説明している中で、授けることもありました。

前任地の時代には、ボートに乗っていてとある集落に救急車が駆けつける音が聞こえると、シーアンカーを上げて、いつでも帰ることができる態勢で様子を見守ることもありました。朝6時のミサ前にたたき起こされて救急病棟に行き、フラフラになって帰って朝ミサをすることもありました。

そうやって若い時から訓練を受けているのですが、それでも人間は弱いものです。今日は病人は出ないだろう。今日は告解人は来ないだろう。今日はミサを頼みに来る人はいないだろうと高をくくって、司祭館を留守にしたり、度を過ぎてお酒を飲んだり、いろんなことで「いつであっても神父、いくつになっても神父」を忘れてしまうのです。

徹底的にそのように教育されて最初の 10 年を過ごしてきたので、頭では分かっていたことですが、誰かに言われたことはありませんでした。最初にわたしの主任司祭となってくれた川添神父様だからこそ、わたしにあの言葉「どこに行っても神父、どこにいても神父」を贈ってくださったのだと思います。

さて、みなさんはどうでしょうか。与えられた福音朗読の結びに耳を傾けましょう。「あなたがたに言うことは、すべての人に言うのだ。目を覚ましていなさい。」(13・37) 皆さんにも、中田神父の体験は十分当てはまるのです。皆さんも、「どこに行ってもカトリック信者、どこにいてもカトリック信者」なのです。あるいは「いつであってもカトリック信者、いくつになってもカトリック信者」なのです。

たとえ話の中で僕たちはいつ主人が帰ってきても、主人の望み通りの働きぶりを示さなければなりません。「お前はどのように、主人であるわたしのために日々を過ごしていたか。」その答えを求められるのは夕方なのか、夜中なのか、鶏の鳴くころか、明け方か、分からないのです。

わたしたちも時には旅行に行くこともあるでしょう。旅行先でもわたしたちは神に問われるのです。「あなたはどのように、わたしを信じていることを明かししてくれるのか。」旅行先ではどう考えてもミサに行けないかもしれません。ミサに行けなくても、わたしはイエスの弟子であることを、違う形で示さなければなりません。

そうやってわたしたちは、目を覚ましている信者であり続けるのです。病院に長期入院している人は、ミサにあずかることなど不可能です。告解で「病院に入院していたのでミサに行けませんでした」と告白する人もいると思うのですが、その告白は何を言いたいののでしょうか。わたしはきっぱりと「だから何なのですか？」と聞き返します。入院中に自分にできることをして、イエスの弟子であることを証明すれば、それで十分ではないでしょうか。

わたしたちはみな「いつであってもキリスト者、いくつになってもキリスト者」なのです。いつ主であるイエスに働きぶりを報告せよと言われても答えられるキリスト者でありたいと思います。「眠っているキリスト者」すなわち「主人の帰りは遅い」と勝手に思い込んで自分の働きをおろそかにすることがあってはいけません。「どこに行っても、どこにいても」わたしたちはそれぞれの身分でイエスの弟子であることを証明する必要があるのです。



待降節第 2 主日 (マルコ 1:1-8)

主に向き直るのが唯一の道

待降節第 2 主日と第 3 主日は洗礼者ヨハネを登場させる朗読が取り上げられています。洗礼者ヨハネは「荒れ野で叫ぶ者の声」です。声に耳を傾け、声の促すほうに向きを変えるよう努めましょう。

平戸地区ではあまり見かけませんが、かつての太田尾小教区時代や前任地の上五島地区、古くは福岡での大神学生時代に、街頭に出てクリスマス募金の呼びかけをしていました。商店街に出かけたり、大都会の目抜き通りだったり、いろんなところでクリスマス募金の呼びかけをしました。

当時は「荒れ野に叫ぶ者の声」を文字通りに考え、反応がなくても、とにかく声を限りに叫んだことに意味があるのだと思っていました。街頭募金のたびに声がつぶれて、次の日の朝ミサは「ガラガラ声」でのミサでした。

しかし今年は、当時の振り返りも少し違った意味を持っています。当時は振り向かなくても声を出すことで務めは果たせたと思っていましたが、「荒れ野に叫ぶ者の声」は、もっと大切な使命を帯びていたわけですから、当時の考え方は少し足りなかったなあと思っています。

洗礼者ヨハネは預言者イザヤの言葉を用いて言いました。「わたしは荒れ野で叫ぶ声である。『主の道をまっすぐにせよ』と。」(1・23) 荒れ野に叫び声が響くだけでは働きは十分ではなくて、叫び声を聞いた人が主に向き直るように働く必要があります。わたしが参加していた「街頭募金」が、街を歩く人々の心に「向き直らないといけないなあ」と思わせてこそ、働きは完成するわけです。

教会の中で行われる礼拝において、司祭の説教は「荒れ野で叫ぶ者の声」にならなければならないと、常々思っています。ひびきの良いことだけ話したのでは使命を果たせていないし、「ご無理ごもっとも」といちおう聞いてはくれても主に向き直らなければ、これまた使命を果たせません。何とかして、持ち帰ってもらって、生活を主に向き直らせる。その思いだけが毎週の説教を準備させる原動力です。

「荒れ野に叫ぶ者の声」は、洗礼者ヨハネに限ったことでしょうか。洗礼者ヨハネのように、人々の前で語る人だけが、「荒れ野に叫ぶ者の声」なののでしょうか。わたしはもっと、「荒れ野に叫ぶ者の声」を聞いた人は、人々の中に入って、「声」となる使命があるのではないかと思います。

「声」を聞いて、「声」に動かされた人が、誰かに対して「声」となる。そうして、「荒れ野に叫ぶ者の声」は広がり、遠くへ届いていくのです。わたしたちは誰もが、ミサの中でイエスの声を聞いて、その声を人々に届けるための「荒れ野に叫ぶ者の声」になる必要があります。

「声」となるといっても、叫んだりわめいたりする必要はありません。「主に向き直る」その助けをしてあげるなら、十分「声」の働きを

果たしています。わたしたちが持ち帰った「声」にだれもが反応してくれるわけではありませんが、少しずつ、わたしたちの声が人々の中で聞き取れるくらいの声になり、はっきり聞こえる声になっていくよう努力したいものです。

一つ原理原則を持っていれば助けになります。それは、「ぶれない」ということ、主に向き直る「声」を曲げないということです。この場面では主に向き直るための「声」の働きをしているが、ある場面では呼びかける人に遠慮して主に向き直る「声」を潜める。それでは「声」として弱いのだと思います。

出来事をどのように受け止め、理解するのか。わたしはこう考えるという姿勢を「声」としてあらわすためには、わたしは一步近づいて、「声」にならなければならないと思っています。しかし、人より一步近づいて考えを述べるのは並大抵のことではありません。

それは場合によっては火中の栗を拾うといった勇気が必要です。虎の子を得るために、虎の穴にさらに一步近づく勇気が必要です。「わたしはカトリック信者だから、いのちをそのはじまりから守ります。」学校の先生も踏み込んで言えないことを、カトリック信者であるわたしたちは信じていることとして「声」で表明する必要があります。

いのちの終わりについても一步踏み込んで意見を表明する場合があります。新しく始まった裁判員裁判という制度があります。裁判員裁判の多くは重大事件であり、死刑を言い渡すような裁判のケースもあります。しかしカトリック司祭は、人に死刑を言い渡す裁判員の任務に就くことは認められていません。

もちろん社会的には、国が求める任務を拒否することになります。それでもカトリック司祭は人に死刑を言い渡すことは許されないので、一步踏み込んで、「引き受けることはできない。辞退する」と表明するわけです。場合によっては国の制度に反対してでも、「声」を届けなければなりません。

いのちの始まりについて、いのちを刑罰によって終わらせることについて、人間には権利がないので、「荒れ野で叫ぶ声」になって、主の道である「いのちの始まりと終わりは、神の手の中にある」と、向き直らせる。これはカトリック教会に委ねられた大切な使命だと思います。

わたしたちはこの待降節中特に「主に向き直る」という回心が求められています。ぶれないで「主に向き直る道が唯一の道」ただこの一つの声、持ち帰って社会に響かせましょう。わたしたちは「声」にすぎませんが、わたしたちの響かせるただ一つの声、まもなくおいでになる主は「声の持ち主」として具体的に実現させてくださいます。



待降節第3主日 (ヨハネ 1:6-8,19-28)

証しをする使命を渋々でも引き受けよう

待降節第3主日はヨハネの証しについてです。今回の説教を準備しながら、よく考えてみれば「証し」とはそういう意味なのだと再認識しました。学びを皆さんと分かち合いたいと思います。

ひょっとしたら、この説教は二回目になっているかもしれません。もしかしたら今回が一回目で、二回目は後日かもしれません。あるいはその反対で、すでに一回「証し」ということで同じ話をしているかもしれません。もし今日が二回目であるなら、皆さんは説教の結論まで理解していることになります。

今週の福音朗読箇所についていつも読んでいる解説書を読みながら、よく考えれば確かにそうだなと思ったのが「証し」についての考え方です。次のような説明が目に残りました。

(中略) イエスが行った御父についての「証し」は福音として全世界に告げ知らされますが、その場合、イエス自身が拒絶されたように、宣教者も迫害にさらされることになります。そこで「証し」という言葉<マルテュリオン>は殉教を意味する言葉になってゆきます。

わたしたちがイエスについて証しするということは、最終的には命がかかっている、ということです。「あなたはわたしについて証しすることで、命を削ることになるかもしれない。もっと言うと、今この場でこの世の命を取り上げられることになるかもしれない。それでもわたしについて人々の前で証を立ててくれるか？」

ある人はこの問いから逃げ出してしまいます。「無理です。命までは懸けることはできません。」ある人はこれを受け入れます。「主よ、御一緒になら、牢に入っても死んでもよいと覚悟しております」(ルカ 22・33) ある人は知らないうちに命を賭けてイエスを証しするのです。

三つの態度を示しましたが、良い悪いは別として、「逃げ出す」というのと「勇敢に証しする」というのは分かります。どちらも人間らしい姿だからです。しかしなぜある人々は、「知らないうちに命を懸けてイエスを証しする」ことになるのでしょうか。

わたしは、逃げ出すのと勇敢な証しと、どちらにも当てはまらない場面もあると思っています。イエスがカルワリオで十字架を担った時、あまりの重さに何度もお倒れになりました。その時、シモンという人に無理に十字架を担がせたという話があります(マタイ 27章参照)。このキレネ人シモンは、逃げ出したわけでもなく、勇敢に身代わりになったのでもありませんが、イエスの十字架を刑場まで担ったのです。

シモンは、たまたま押し付けられて十字架を担ったかもしれません。けれども彼は、目に見える形でイエスの仲間であると証しした最初の人になったのです。強いられて十字架を担ったとは言え、担った十字架の意味と価値は変わらないわけです。

同じように、わたしたちの中には逃げ出しはしませんが完全な動機

からではないわががたくさんあると思います。病気をしたくて病気になったわけではないけれども、病気をイエス様の十字架に合わせて仕方なくささげた。道に迷って困っている人を、逃げるわけでもなく喜んで案内したのでもなく、通りがかったので仕方ないなあと思いながら道案内してあげた。これくらいの話はいろいろあると思います。

喜んでした隣人愛であれば、誰かに話して喜び合うかもしれません。しかし仕方なくした隣人愛は、誰にも話すことなく、そのうち忘れてしまうかもしれません。本人が忘れる程度の奉仕ですが、神はそのわざを決して忘れず、あとで報いてくださるのではないのでしょうか。

すると、しかたなく、命がけで苦しみをおささげするということもあり得る。そう考えます。「ほかの人はともかく、自分は命を削ってまでカトリック信者であることを証しすることはしない。」そう思っているかもしれません。ですが実際は、思いがけず救急車で病院に運び込まれ、もうこれ以上命を削れないというところまで仕方なく命を削って、苦しみをささげる。そういう人も案外いるのではないのでしょうか。

命を削って、苦しみをイエス・キリストにささげる。逃げることもできず、さりとは英雄的な勇気を発揮してでもなく、仕方なくささげる。それでもその人がささげた証の意味と価値は、減らないのだと思います。イエスはその人のささげた苦しみを、尊いささげものとして受け入れてくださるはずです。

実はわたしも、この説教を 10 日前に書き上げました。13 日（水）から 15 日（金）まで、親孝行旅行に行っていたからです。その前後も、教区広報委員会、マリア文庫、保育園のクリスマス会出席、母親の佐世保港までの見送りと、ほとんど時間がありませんでした。仕方なく、半ばいやいやながら、先々週に説教 2 週間分、詩編の解説 2 週間分、その他の仕事も 2 週間分こなして、出かけて行ったのです。

先々週準備したからと言って、この説教の意味と価値は下がらないと思います。皆さんは何事もなく説教を聞くことができたのですから、わたしが「あー、いやだなあ」と思いながら準備したとしても、それでも証しはできたのです。多くの場合の証しは、このようにして成り立っているのではないのでしょうか。

わたしたちは例外なく、証しする者として招かれています。洗礼を受けたとき、証しする預言者とされたのです。もちろんだれもが洗礼者ヨハネのように「燃えて輝くともし火」（ヨハネ 5・35）ではないでしょう。仕方なく、渋々証しする人もいるでしょう。

それでも構いません。「光について証しをする」（1・8）洗礼者ヨハネの使命はわたしたちにもあります。最後はいのちを懸けた証し「殉教」すら、場合によっては自分に託されます。少なくとも、「知らず知らずのうちにささげるなら、わたしも手伝います。」これくらいの覚悟は持ちましょう。今週の決意として、パンとぶどう酒、献金の奉納と共にその決意をおささげしましょう。



待降節第 4 主日 (ルカ 1:26-38)

神からの言葉はすべて不可能ではない

待降節第 4 主日です。今年はこの日が 12 月 24 日になっています。いちばん遅くやってくる待降節第 4 主日です。「救い主の誕生」はもう目の前です。ゆっくり構えてはいられない。そのつもりで福音朗読の学びを得ることにしましょう。

親子韓国旅行のきっかけはわたしの銀祝を田平教会で祝っていただいた時のお祝い金でした。5 月にソウルの明洞に行った時、日本と気候は変わらないなと思ったので、季節も考えずに 12 月に予定を立てました。

旅行代理店に相談に行ってみると、「ソウルは寒いですよ～。福岡より寒いです。寒さ対策をして出かけてくださいね」と言われました。店員にそう言われて、そのまま母親には伝えられませんでした。

旅行代理店の予約と支払いを済ませた直後でした。夜 10 時に実家から電話がかかりまして、「やっぱり韓国には行けない。韓国は寒いに違いない」と言ってきたのです。わたしが言わなくとも、衛星放送で世界の天気が紹介されれば、いやでも天気は目に入るわけです。

わたしは慌てまして、「いやいや。日本と気候は変わらないんだよ」と思いとどまらせようと思いました。結果的に、韓国に行くまで不安は解消させることができなかったのですが、旅行を終えた後は「とても楽しかった。ありがとう」と言ってもらえました。わたしの言葉を信じてよく同意してくれたなあと感謝しています。

さまざまな体験を積みました。言葉の違う生活、本場のキムチ、アワビのお粥、ビビンバ、烏骨鶏を丸ごと入れたサムゲタン。ほかにもミュージカル「ナンタ」の観劇、韓国王朝ドラマの舞台景福宮（キョンボックン）巡り、韓国のタクシー、地下鉄、王宮衣装の着せ替え体験、明洞大聖堂でのミサ、最後は韓国式エステも体験してきました。肌がつるつるになって、出国審査の時に「パスポートの人物と別人になっている。取調室に来なさい」と連れていかれました。最後はウソです。

まあとにかく、言葉を信じて、言葉にこの先を委ねて、抱いている不安を横に置いてついてきてくれたので、今回の親子旅行は実りあるものとなりました。言葉だけしか判断材料がない。写真もない、映像もない、そんな中で決心してくれたことに心から感謝しています。

福音朗読の「イエスの誕生の予告」の場面に移りましょう。天使ガブリエルは、ナザレにいるヨセフのいなずけのマリアのところに遣わされました。天使ガブリエルも、神からの言葉だけを携えてマリアと向き合うことになります。天使の言葉にマリアは戸惑い、考え込むのです。

それでもマリアは、神の言葉を信じて、神の言葉にこの先を委ねて協力することにしたのです。何より、人間の言葉ではなく、神の言葉であるがゆえに、すべてを委ねることができたのだと思います。

しかしあくまでもこだわる人は疑問を持つでしょう。「天使ガブリエルの言葉は、突き詰めると天使ガブリエルの言葉ではないのか」と。

実際天使ガブリエルも「これこれの言葉を、神から託されましたのでお伝えしました」とは言っていない。

わたしも、少し調べたほうが良いと思い、一か所調べ直してみました。37節の「神にできないことは何一つない」についてです。日本語訳だけだと、それこそ天使ガブリエルの言葉であって、神の言葉ではない印象を受けます。

こういう場合は、できるだけ元の言葉に近い理解を確かめることが大切です。わたしは残念ながらギリシア語はさっぱりですが、元の言葉により忠実に置き換えると「神からの言葉はすべて不可能ではない」となると解説書にありました。

この説明だと、「神からの言葉」であることをより実感できます。マリアは神からの言葉の前に、人間の戸惑いなど何の意味があるだろうかと思い直し、ありのまま受け止めようとしたのです。マリアの返事も印象的です。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」(1・38) 神からの言葉に、身をかがめようとしているのです。

ここで見落とせないのは、この場面、マリアが出来事を中心なのではなく、神の言葉が出来事を中心にあるということです。マリアが出来事を中心にあたれば、戸惑い考え込む彼女から神の招きに答える力は生まれなかったでしょう。神からの言葉が出来事を中心にあると理解できたので、「わたしでよければ」という協力が可能になったのです。

わたしたちが持ち帰る学びが見えてきます。中心に神からの言葉があるとき、言葉は出来事となって実現し、救いの計画が前に進みます。人間が出来事を中心にあるとき、神からの言葉は望みのままに働くことができず、出来事は実現しないのです。

わたしたちが、日ごろ思い通りにいかないにつぶやくことがあるなら、あらためて考えてみましょう。出来事の中にわたしがいて、わたしの思いが実現しない、通じないと、つぶやいているのではないのでしょうか。マリアは、神からの言葉が出来事を中心であれば、出来事は受け入れることができると教えているのです。

神からの言葉に中心を譲らなければ、いつまでたっても事態は変わらないでしょう。むしろ、マリアに倣って「神からの言葉はすべて不可能ではない」この体験を積み重ねましょう。

マリアと同じ立ち位置で出来事を見直すとき、世界は神の計画の中で着実に進んでいることが分かるでしょう。その時わたしの口にのぼるのは、つぶやきではなく賛美、不平不満ではなく感謝の言葉となるはずで。



主の降誕（夜半）（ルカ 2:1-14）

幼子イエスが最初に見たのはマリアとヨセフ

主の降誕おめでとうございます。誕生の喜びはどんな人、どんな時代、どんな状況でも喜ばしいものですが、イエス・キリストの誕生はすべてに勝る喜びです。この夜半のミサでは、誕生の瞬間、幼子イエスが目にしたものを想像しながら喜びを分かち合うことにしましょう。

イエス・キリストが誕生した時、最初に出会った人々は誰だったのでしょうか。まだはっきり見えていない中で、ぼんやりとその目に映ったのは、当然の答えなのですが、マリアとヨセフでした。この基本的な出来事から出発したいと思います。

イエス・キリストが最初に出会った人、最初に目にした人は、マリアとヨセフでした。聖書の読み返しをすると、マリアもヨセフも、イエス・キリストの誕生という神秘的な出来事に至るまでに、出来事を受け入れようと悩み、もしかしたら苦しみ、それでも個人的な考えを横において、すべてをお任せするまでの大変な心の道のりを経てきました。

悩みながら戸惑いながらも、マリアもヨセフも、これから成長していくイエス・キリストに全面的に協力する心の広さを持ち合わせていました。特にマリアは、のちにイエス・キリストの地上での最後の場面、十字架の出来事までそばにいて、苦しみを共に受け止めてくださったのです。

およそ二千年前は、イエス・キリストが最初に出会った人々はマリアとヨセフでした。では今年のクリスマスにイエス・キリストが最初に出会うのはいったい誰なのでしょう。ナカダコウジという一個人でしょうか。それとも誰か別の一個人でしょうか。

わたしは違う考えを持っています。今年も、イエス・キリストが最初に出会うのはマリアとヨセフであるはずです。マリアとヨセフに出会わなければならないのです。ではどこに、マリアはおられるのでしょうか。ヨセフはどこにおられるのでしょうか。

今年は、現代のわたしたちが、マリアとヨセフとして、クリスマスにおいてになるイエス・キリストをお迎えする必要があると思っています。マリアと同じ心構えで、ヨセフと同じ心構えで、イエス・キリストを受け止めるとき、今年のクリスマス、今年のイエス・キリストの誕生が完成するのではないのでしょうか。

ではマリアと同じ心構えとは何でしょうか。マリアは、悩みと戸惑いの中で、「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身になりますように」

（ルカ 1・38）と答え、神の計画が前に進むためなら、喜んで身をささげますと答えました。わたしたちが、「神さまの計画が前に進むためなら、喜んでお手伝いします」そんな思いで幼子の前にひざまずくなら、わたしたちはマリアと同じ心で幼子イエスの前にいるのです。

ヨセフと同じ心構えとはどのようなものなのでしょうか。ヨセフは婚約期間からすでに思い悩んでいました。婚約を解消しようとさえ思っていました。大きな悩みを抱えつつも、それでもイエスが生まれた時はマリアと幼子を守り抜き

ます。そんな思いだったでしょう。男性の皆さんが、神の計画に協力する中で困難は予想されるけれども、わたしに託されたものを守り抜きます。そんな思いで幼子とマリアの前に立つならば、ヨセフと同じ心でここにいるのです。

イエスが幼子としてこの世界においでになった時、最初に出会う人はマリアとヨセフでなければならないのです。救い主の誕生の前に、謙虚に身をかがめる人々でなければならないのです。「わたしがいるからこの会は成り立っているのよ」とばかりに自分が中心になって取り巻きを作り、なびかない人は退けるような身の毛のよだつような人はイエスの前に立つことは許されないのです。

いつか、羊飼いがイエスの前に立つでしょう。いつか、占星術の学者たちがイエスの前にひざまずくでしょう。けれども権力にしがみつく人、人を人とも思わない人がイエスの前に立つのはずっと先のことなのです。わたしたちが今日、イエスに近づこうとするなら、マリアの心、ヨセフの心でなければなりません。

今日お生まれになったイエスは、初めて目にする人としてあなたを受け入れてくださるのでしょうか。イエスの目に、わたしはどのように映っているのでしょうか。幼子イエスの前にひざまずいて、自分の心に問いかけることにしましょう。

主の降誕（日中）（ヨハネ 1:1-18）



主の降誕（日中）（ヨハネ 1:1-18）

神の独り子は制約多い「肉」を受け入れられた

主の降誕を、あらためてヨハネ福音書の朗読から学びなおします。ヨハネ福音書の冒頭は、「言が肉となった」という抽象的な言い回しですが、今年はわたしの中で学ぶところがありましたので、分かち合い、学びを持ち帰っていただきたいと思います。

神の独り子が最初に出会ったのは何でしょうか。昨晚の夜半のミサ説教が参考になるはずです。神の独り子は、最初に何と出会ったのでしょうか。それは「肉」です。食べる肉の意味ではありません。永遠のお方にとって、滅びるもの、朽ち果てるものに属する「肉」に出会われたのです。

永遠に属するお方が滅びるものに属する「肉」に出会った。どんな意味があるのでしょうか。それは、限界とか制約とか、神の子にまったくふさわしくないものを受け入れたということです。本来無限のお方である神の御子が、有限を受け入れられ、疲れることも眠ることもないお方が疲れて眠り、死ぬはずのないお方が死ぬべき定めを受け入れられたということです。

わたしたちは、ほとんど例外なく、より良いものに巡り合えばそれまでのものを手放し、より良いもので効率よく、生産性をあげて、豊かに暮らそうとするものです。

どの家にも洗濯機があり、自宅の洗濯機で間に合わないものはより大きな洗濯機を数百円で利用できる時代です。こんな時代に、あえて限界があり、制約だらけの洗濯板で服を洗濯する人がどこにいますでしょうか。

蛍光灯や LED 電球が隅々までいきわたっているのに、それらに背を向けて誰がローソクの火で生活するのでしょうか。暖房器具もこれだけふんだんに利用できる時代に、誰が家の中で焚火をして暖を取ったりするのでしょうか。だれも、便利なもの、より優れたものを手にしたあとで、限界だらけ、制約だらけのものに手を伸ばそうとはしないのです。

ところが神は、その御独り子をこの世にお遣わしになるにあたり、限界だらけ、制約だらけの「肉」を取られたのです。いつかは死にゆく身体、翼もない、目は闇の中を見分けることもできない、社会も様々な制約だらけ。そんなこの世、そんな「肉」を受け取って救いの計画を始められたのです。

のちに宣教活動を開始されますが、だからと言って神の独り子は一度でも宣教活動に限界と制約を感じて不平不満を父なる神に述べたのでしょうか。決してそういうことはなさいませんでした。

ところがわたしたちは、同じ限界と制約の中に生きて、数えきれないほどの不平不満を神に申し述べているのです。時間がない。思うような道具がない。夫が不満だ妻が不満だ。ありとあらゆることに不満を感じて生きているのです。

わたしたちはなぜ馬小屋に眠るイエスを見て考えないのでしょうか。神が救いの計画を完成させるのに、限界と制約のある「肉」を甘んじでお受けになったのに、わたしたちが並べ立てる不平不満はどれほどのものなのかと。わたしたちはもっと別のことを、幼子の前で申し述べる必要があるのです。

むしろ、こう言うべきでしょう。「おいでくださったイエスさま、わたしが自分に課せられた限界と制約を受け入れる知恵と勇気をお与えください。」限界と制約の多い「肉」を受け入れても神の救いの計画は完成するのですから、わたしたちの人生も、さまざまな限界と制約をありのまま受け入れたとき、完成するのだと思います。

本日のミサでは、一人の方が洗礼をお受けになります。一回限りの人生を、カトリックの信仰に土台を置いて完成させようと決意しておられます。限界や制約もあることでしょう。不安も少しあるかもしれませんが。けれども、人間の制約多いいのちを救い、完成させてくれるのはイエス・キリストですから、イエスを信じて生きる新しい生き方に生まれ変わってほしいと思います。

これから入信の秘跡に入ります。復活祭ののちには、同時に参列しておられるパートナーの方と婚姻の秘跡を結ぶ予定となっております。参列者の皆さんも、心を合わせて受洗者のためにお祈りください。

聖家族(ルカ 2:22-40)



聖家族 (ルカ 2:22-40)

シメオンは神をたたえ、マリアに語りかけた

聖家族の祝日を迎えました。ヨセフとマリア、幼子イエスで始まった家族のことです。わたしは、ただぼんやりとヨセフとマリアとイエスがいる姿を思い描くのではなく、幼子イエスを母マリアが腕に抱いて、ヨセフが見守る姿、このように聖家族を描いてみたいと思います。

喜んでください。来年3月に予定している黙想会の説教師が決まりました。使徒ヨハネの祝日に、使徒ヨハネの霊名の神父さまに頼み込んできました。その神父さまはあるものに目がないので、大好物をぶら下げて説教師を引き受けてくださるよう説得してきました。案外簡単に釣れました。平戸瀬戸での釣りより、よほど簡単でした。

話変わりますが、最近、聖体拝領をさせていて感じたことにちょっと触れたいと思います。聖体拝領はご存知のように直接口の中に、舌に載せて授ける方法と、手に載せてもらって自分で口に運んで拝領する方法と二通りありますが、最近舌をしっかりと出して直接聖体を拝領する人は少なく、手に載せてもらって自分で口に運ぶ人が多いようです。

聖体拝領に来るお母さんの中に、お子さんを抱っこしておいでのなるお母さんがいます。感心だなあと思いつつ、器用だなあとも思います。わたしが感心するのは、口の中に、舌に載せる方法ではなくて、手に載せた聖体を自分で口に運ぶ方法を選ぶお母さんです。体重3kgか、それ以上のお子さんを抱えたまま、手を動かすわけですから、器用だなあと思うのです。

それはわたしにとって一つの気付きでした。母親は、子供を抱いたまま、もう一つのことをこなすことができるのです。説教の結論もここで見えてきています。お母さんたちは何気ないことなのかもしれませんが、幼子を抱いたまま、もう一つのことができるというのは新しい発見でした。

今週の福音朗読で、預言者シメオンと女預言者アンナが登場します。特にシメオンに注目すると、「シメオンは幼子を腕に抱き、神をたたえて言った」(2・28)とあります。ここまでは待ち望んでいたメシアに会えたわけですから自然な成り行きです。

しかし続けて、「シメオンは彼らを祝福し、母親のマリアに言った」(2・34)とあるのです。シメオンは幼子を腕に抱き、一方で神をたたえ、他方でマリアとヨセフを祝福したのです。

皆さんはこう言うかもしれません。「シメオンがマリアとヨセフを祝福するときには、もう幼子イエスは腕に抱いてはいないでしょう」と。わたしは違う考えを持っています。預言者シメオンがマリアとヨセフを祝福した時、もし幼子イエスもシメオンが祝福したとしたら、そこには矛盾が生じるからです。

シメオンは、はっきりと幼子イエスを「主が遣わすメシア」と理解していました。それなのにシメオンが幼子イエスを祝福するのは無理が

あります。ですから、この時点で預言者シメオンは幼子を腕に抱いていたに違いないと考えたのです。

もう一つ、わたしの考えと重なる部分があります。シメオンは母親のマリアにこう言いました。「御覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりするためにと定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。（中略）」（2・34）

「御覧なさい」とは、どういう状況でしょうか。母親がすでにわが子を抱いている状況で、そばにいる誰かが「御覧なさい」と言うのでしょうか。むしろ、語る人が幼子を抱いていて、注意を向けるために「御覧なさい」と言うのではないのでしょうか。

まとめるとこういうことです。預言者シメオンは、「主が遣わすメシア」「幼子イエス」を腕に抱いたまま、一方で神をたたえ、他方でマリアとヨセフを祝福したということです。先に母親は、わが子を腕に抱いたまま、もう一つのことを器用にこなしますと言いましたが、預言者シメオンにもそのまま当てはまるのです。

大胆に言わせてもらうなら、人は腕に幼子を抱いたまま、二つのことが可能なのだということになります。一方で神をたたえ、同時に人に語りかけたりすることができ、ということです。条件は、その人が幼子を腕に抱いているとき、ということになります。

わたしたちの生活でも、同じことは実現するのだと思います。同時に二つのことはできない。そう思っている人がほとんどだと思いますが、イエスを腕に抱いている人は、同時に二つのことが可能なのです。

ある人はこう言います。「現実の生活があるから、信仰と生活の両立はできない。」それは、本当の意味で幼子イエスを腕に抱いていないから、不可能だと思ってしまうのではないのでしょうか。幼子イエスをしっかり腕に抱いている家族は、信仰生活と社会生活を、同時に、両立させるのです。どちらかを捨てなければ、どちらかを取れないというものではないのです。

マリアとヨセフに連れられて神殿に来た幼子イエスを腕に抱いた預言者シメオンに学びましょう。幼子を抱いて、同時に聖体拝領のために手を広げる母親に学びましょう。

わたしたちが同時に成し遂げるのは無理だと思っていることは何でしょうか。同時に成し遂げる確実な方法は、幼子イエスをしっかりと腕に抱いて生活すること。これが唯一の答えです。